

史跡保存整備事業

史跡岡山城跡本丸下の段
発掘調査報告

2001年3月

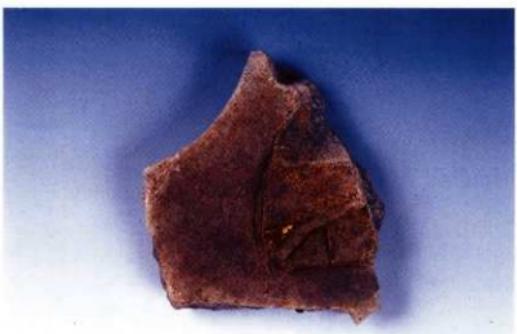
岡山市教育委員会



1. 金箔おし桐文軒丸瓦



2. 金箔おし転平瓦



3. 金箔おし桐文鬼瓦



1. 前池田期の唐津焼 (SE 3ほか出土)



2. 前池田期の陶磁器 (SE 3ほか出土)



3. 前池田期の土師質土器皿 (SE 3出土)

序

史跡岡山城跡は、東瀬戸内圏の中核都市として発展を続ける岡山市の礎であるとともに、岡山市の歴史的アイデンティティのシンボルでもあります。岡山城は、戦国乱世の余韻の残る天正18（1590）年に、豊臣秀吉の寵遇を受けていた宇喜多秀家が居城を築城したことに始まり、慶長2（1597）年の天守閣の竣工をもって完成をみた後、城主が四家の交代を経ていますが、江戸時代を通して岡山藩主池田家の治世の城府として健在であり、明治維新を迎えるに至っています。織豊期の城郭が近代まで継承された数少ない事例の一つであり、名城と呼ぶに相応しいものです。

今日の岡山の町づくりの原点であり、歴史的記念物の象徴である岡山城跡は、現在では鳥城公園として市民の安らぎと憩いの場となり、また観光地の中心施設の一つとなっていますが、明治維新以降の不断の近代社会への変貌に伴って、本丸と後楽園に当時の面影を残すだけとなっています。従って、史跡岡山城跡は、今日の我々の世代が守り、子孫達に伝えなければならない最小限の原点の姿と言つて過言ではなく、これ以上の変質を許されないかけがえのない文化遺産であります。城跡を文化財として我々の世代が受け継いだ姿よりも、よりよい姿で後世に引き継いでいくことが、文化財行政を司る者の使命であり、責務と痛感しています。

史跡岡山城跡の史跡としての保存整備は、昭和62年に史跡指定がなされて以来の岡山市の課題であり、担当部局である教育委員会が取組み続けている施策であります。平成4年度からは国庫補助事業により、岡山城跡の歴史的景観の復元整備を実施することとなり、本丸中の段の史跡環境整備を意図して、平成7年度までに事前の発掘調査の実施と整備計画の策定に当たりました。しかし、整備の実施時期が岡山城築城400周年の記念行事の実施期に重なったことにもより、施工する運びに至らず、発掘調査報告書だけは平成8年度に刊行致しました。その後、岡山城跡の保存整備事業は、本丸域全体を整備対象とした長期ビジョンの策定を図って取組む方針となり、「史跡岡山城跡保存整備計画（第II期）」の作成と、事前の下の段の発掘調査及び石垣の一部の保存修理を実施致す運びとなりました。平成9年度から平成11年度にかけて、本丸下の段全域の発掘調査を行い、成果は今後の歴史的環境整備に活かす所存でありますが、このたび報告書に取り纏めることができました。

こうした成果をあげることのできましたことは、文化庁と岡山県教育委員会のご支援や、発掘調査対策委員と史跡岡山城跡整備委員の先生方を始め、関係者各位のご指導・ご助勢の賜物と存じ、深謝申し上げます。殊に、調査の実施にご協力頂きました方々や関係機関、さらには発掘担当者に心から謝意を表する次第であります。

この報告書に纏めました調査成果については、ご検討・ご批判を頂き、今後の課題となる史跡岡山城跡保存整備事業に資するとともに、少しでも近世史の調査研究に寄与できますならば幸に存じます。

平成13年3月31日

岡山市教育委員会

教育長 玉光源爾

例　　言

1. 本書は、岡山市教育委員会が国庫補助事業として実施している史跡岡山城跡保存整備事業にかかり、平成9年度から11年度に行った発掘調査の報告書で、平成12年度に作成した。
2. 発掘調査の対象地は、岡山市丸の内二丁目3-901、905、906、907、909、1001、1002の「史跡岡山城跡」地内で、岡山城本丸下の段に相当する。
3. 発掘調査と報告書作成は、岡山市教育委員会社会教育部（平成10年度から生涯学習部）文化課（平成12年度から文化財課）が行い、現場実務は乗岡央が担当した。
4. 本書の編集は乗岡が担当し、本文の執筆は第II章第1節・第2節と第V章第5節を出宮徳尚が行ったほかは乗岡が行った。
また、付章として松井章氏（奈良文化財研究所）に依頼した魚骨・獸骨類の分析成果と岡崎隆司氏（メルパルク岡山 調理部門）に依頼した貝類の分析成果を掲載した。
5. 遺構の実測・写真撮影・浄写は乗岡が行い、実測の一部は大西千鶴・藤井裕之の援助を受けた。遺物の実測・拓本は乗岡のほか、谷口光子・八木留利子・大西千鶴・岡本東美・信江清美が分担し、浄書は主に田中美穂が行った。
6. この報告書で用いた高度値は標準海拔高度、方位は座標北である。
7. この報告書にかかわる出土遺物、実測図・写真などは、岡山市埋蔵文化財センター（岡山市網浜834-1）で保管している。



目 次

第Ⅰ章 岡山城の歴史と構造	1
第Ⅱ章 調査経過	
第1節 調査に至る経過	10
第2節 調査の体制	14
第3節 発掘調査の位置・方針・経過	
1. 発掘位置	16
2. 調査方針	17
3. 発掘調査の経過	18
第Ⅲ章 造 構	
第1節 基本層序と発掘区割り	24
第2節 内下馬門調査区	
1. 概 要	26
2. 内下馬門枡形	26
3. 南石壙	34
4. 北石壙・東石壙	38
第3節 鉄門下調査区	
1. 概 要	42
2. 階段下の広場	42
3. 最下層期の堀跡と張り出し	42
第4節 修覆櫓～金蔵調査区	
1. 概 要	45
2. 修覆櫓の櫓台と石壙	45
3. 金蔵門	52
4. 大納戸櫓櫓台下	56
5. 金蔵周辺	58
6. 伊部櫓櫓台下	64
7. 下層遺構	64
第5節 油櫓～数寄方櫓櫓台下調査区	
1. 概 要	69
2. 油櫓の櫓台	69
3. 油櫓の下方郭内	76
4. 数寄方櫓櫓台下	76
第6節 春屋～馬場山門調査区	
1. 概 要	79
2. 春屋周辺	80
3. 馬場口門内	84
第7節 天守台石垣～廊下門東脇調査区	
1. 概 要	92
2. 天守台石垣	92
3. 外被石垣	97
4. 廊下門東脇台の北面石垣	101
第8節 六十一雁木～坂下門調査区	
1. 概 要	102
2. 六十一雁木門	102
3. 六十一雁木北方	115
4. 坂下門	125

第9節 本段南東高石垣～櫓柵調査区	
1. 概要	132
2. 本段石垣	132
3. 郊内平坦部	140
4. 弓櫓	147
5. 柵柵と多門櫓	147
第10節 宍栗櫓調査区	
1. 概要	152
2. 宍栗櫓	152
第11節 春屋櫓調査区	
1. 概要	157
2. 春屋櫓	157
第IV章 遺物	
第1節 瓦類	
1. 金階おし瓦	161
2. 軒平瓦	168
3. 軒丸瓦	184
4. 模込瓦	185
5. 鬼瓦類	210
6. その他の瓦	210
第2節 土器・陶磁器類	
1. 土師質土器Ⅲ	216
2. その他の土師質土器	217
3. 貿易陶磁器	217
4. 国産施釉陶器	218
5. 国産磁器	219
6. 備前焼類	219
第3節 その他の遺物	
1. 銅錢と金属器	258
2. 石製品・貝製品ほか	258
第4節 近代の遺物	261
第V章 調査成果の整理と展望	
第1節 岡山城本丸の変遷	265
第2節 岡山城本丸の石垣	276
第3節 絵図に示された時代（5期）の本丸	286
第4節 瓦について	299
第5節 歴史的環境復元整備に向けて	317
付 章	
第1節 岡山城本丸下の段出土の動物遺存体	323
第2節 調理技術的にみたS E 3 出土の貝類	338

第Ⅰ章 岡山城の歴史と構造

南の瀬戸内海に注ぐ岡山県の三大河川のうち、真ん中を流れるのが旭川である。岡山城はその旭川下流の沖積平野部に位置する広大な城郭で、城地は現在の岡山市中枢をなす市街地と重複している。これは岡山城が近世を通じて備前一国ないしはそれ以上の範囲にわたる領国の政治・経済・文化の中枢であり続いた結果である。

岡山城の歴史と構造を考えるうえでの資料は、これまでは絵図や文献史料、それに地表で観察できる遺構に限られたが、ここ数年は市街地での再開発に伴う発掘調査や国指定史跡となっている本丸内の史跡整備をめざしての発掘調査が行われ、考古学的なデータがしだいに加わりつつある。あらためて岡山城

の歴史を見直せば、とりわけ室町時代から江戸時代初頭に至る古い時期に関しては、未確定・未解明の事がはるか以前に多いことが思いつまる。城主系統の交代や城郭構造の変化が大きかったにも関わらず、依拠する文献史料が断片的で欠落している事が多く、しかも殆どが同時代性を持たない江戸時代中期以降の編纂物類で、その記述内容も他と矛盾する部分があつたり、具体構造を示す絵図類は皆無に等しいという限界性を伴うのである。文献史料や絵図類に基づく研究成果と考古学的成果との統一、また整合・不整合の吟味、さらには考古資料を駆使しての新たな事実の究明や叙述は今後いっそう重要な課題となってくる。

いまの岡山城主要部には古くから城があった。南北朝期に名和一族で南朝方の上神太郎兵衛高直が城主であったという伝えや、応仁1年(1467)に赤松政則・浦上則宗が攻略したとの記述があるが、信憑性や詳細は定かではない。いずれにせよ、近世岡山城との関連で問題となるのは、室町時代後期の金光氏が城主であった段階からである。江戸時代の編纂物には大永年間(1521~1527)以降のこととして金光備前の名がみえ、その跡目を養子の金光与次郎宗高が繼いだとされる。金光氏は在地領主で、元は松田氏に従っていた。松田氏は旭川中流の要所を占める金川城(御津町金川)を本拠に、備前西部を支配していた準戦国大名で、岡山城の西北約4kmにはその一族が直轄する富山城^①(岡山市矢坂)が知られている。岡山城は、富山城と連携を取りながら旭川下流域の生産力の高い穀倉地帯を直接に掌握できる絶好の位置にあり、瀬戸内海に通じる旭川を用いた水運の利便性にも恵まれていた。

宇喜多直家は吉井川東岸の肥沃な沖積平野をひかえた邑久郡にある在地領主から、下剋上を経て戦国大名にのし上がった人物で、その寄って立つ城は生地である砥石城(邑久町豊原)を出発点に、最初の持ち城である乙子城(岡山市乙子)、さらに新庄山城(岡山市竹原)、そして永禄2年(1559)に義父である中山備中守信正を殺して手に入れた亀山(沼)城(岡山市沼)と着実に西方に進出して



第1図 岡山城跡の位置 (1/50000)

来ていた。永禄10年（1567）には明善寺合戦で勝利して備中の三村氏の侵入を阻止し、永禄11年（1568）には金川城を攻めて松田氏を滅ぼして西備前の掌握に至り、手中に収めた富山城を備中方面に対する前線の城として弟の浮田忠家を配した。岡山城については、一時に三村氏に従っていた城主の金光宗高を配下として当面は安堵したが、元亀1年（1570）に策略を廻らして宗高を切腹に追い込んだ。宇喜多直家は、ついに念願の岡山城を奪取し、天正1年（1573）には龜山城から移って自らの居城としたのである。当時の戦国大名の居城はまだ山城が主流であり、大河川下流の広大な平野の内にあって領国経営の拠点性を高めうる岡山城への進出は、彼の先進性として評価される。

岡山城を本城とした直家は、天正3年（1575）には毛利氏と組して備中の三村氏を亡ぼし、天正5年（1577）には吉井川中流の天神山城（佐伯町）を攻めて、かつての主君で備前東部を支配した戦国大名の浦上宗景を殺して、備前全土を掌握した。ついで直家は毛利方に反旗を翻し、天正7年（1579）には、羽柴秀吉の仲介で正式に織田方に付く事となった。これは、毛利氏と織田氏という巨大な軍事勢力が対峙する構図のなか、狭間にあって活路を見出さなければならない直家が選んだ途であるが、宇喜多氏はこの時から体制側につき、直家の子である秀家の豊臣政権下での異例の出世に驚いて行く。信長や秀吉は城郭の構造やその付加価値の追求で近世化の最先端を行く存在であったから、岡山城の構造や評価を考える上でも、天正7年は留意すべき時点といえる。

近世岡山城は二の丸〔外郭〕以下が純粋に沖積平野に立地するが、主要部は北西部の天神山（名称は現在での認識）、中部の石山、東部の岡川といった低独立丘を下地に展開する。これらの丘は花崗岩～流紋岩の風化岩盤からなり、標高20mの岡山の北部を最高点とする。史料によれば中世の金光氏段階の城は、石山の最高所で江戸時代には池田家祖廟があった場所に本丸を置き、西に向いた小さな城であったという。またこの頃、隣接地には定まった町数もなく、離れ離れに五軒十軒の家並みがあつて川を定めて市が立っていたという。市の伝承地は5個所であるが、いずれもが完全な沖積地に立地し、かつ城の主要部からは数百m以上離れていて、城と一体のものとして成立したとは考え難く、城より先行的である。このうち、城の北西方向に唯一ある市の町（現岡山市富田町付近）は弥生時代以来の集落が展開する南方遺跡の微高地群にほど近く、大仏殿市（同京橋町）、二日市（同二日市）、十日市（同十日市）といった残りは城の南側でしかも旭川に沿って比較的近接して並んでいて、一帯ではやはり弥生時代以来の集落が展開する天瀬遺跡や二日市遺跡が知られている。これらの遺跡で確認できる遺物や遺構は今のこところ中世前半から中葉のものが主体で、16世紀代前半～第3四半期のものが具体的に確認できるわけではないが、立地の上では考古学的にみても整合性をもつ。特に南の市場集落群は、旭川による水上交通の利便性が背景となっているのであろう。一方、岡山・石山・天神山の丘やその南隣で後の二之丸〔外郭〕となる沖積地も弥生時代～中世中葉の遺跡が点在し、城地の中核域にも前史として人的な営みがあった事が、具体的に判ってきた。一部の史料から解かれてきたような、無人の島地や荒野では決してなかったのである。

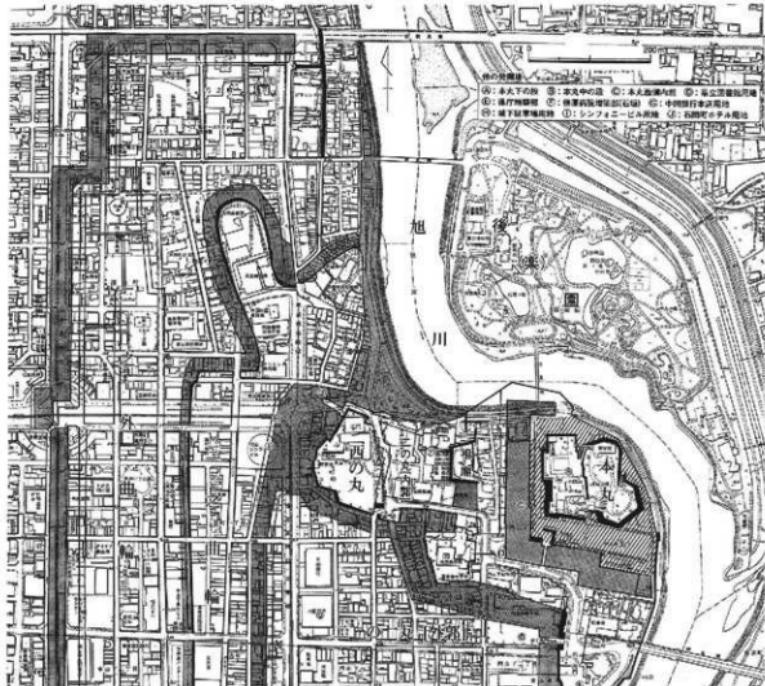
宇喜多直家は金光氏の岡山城を改造し、在地領主の城から戦国大名が領国支配を行うための拠点城郭へと造り変えた。改造は天正1年（1573）の直家人城に先駆け、城を守備する戸川平左衛門と馬場重介の管理のもと、岡平内を奉行として行われたものと伝えられる。本丸は金光氏の木丸を踏襲して石山の同位置に設けられたとし、いまの本丸がある岡山への移転は子の秀家の時とするのが通説であるが、石山の内で城の中心が東遷されたとも読み取れる史料や、直家入城の後である天正1年から8年（1580）頃まで普請があって江戸時代と同じ位置、つまり東の岡山に本丸を移したとする『吉備温

『故秘録』中の記述もあって、文献史料の側で総てが整合しているわけではない。いずれにせよ、直家の改造に伴って東の岡山方面でも郭の造成があったことが記され、元からあった酒折宮（岡山明神）や岡山寺を西方に移転させたという。また、直家が造ったという町は、岡山のさらに東方にも及ぶいっぽう、石山から南に延びる石山通りと交差して東西に延びる後の櫛の馬場通り（=現在の県庁通り）を軸に町割りを行い、三社宮〔今村宮〕や蓮昌寺を移転させたと伝える。城の大手は西に向き、先の東西街路の西端の大手門の近くには櫛あるいは備前の邑久郡福岡とゆかりのある商人の子として後的小西行長が住んでいたという。城下には虎倉城（御津町虎倉）を守っていた伊賀久隆の屋敷があり、父子が交互に住んだという。これは恐らく人質的なものとして忠誠を誓う意味も含んでいる。その他、従来は岡山城の遙か北方を一直線に通過していた山陽道を南に迂回させ、城下に引き込んだとの記載（秀家の時とする史料もあるが）や近隣にあった市場集落での商業活動を停止させたといった記載もある。

こうした史料から窺える直家の首領の要点は、中心的郭群の拡大的整備、宗教施設の先行存在とその強制移転、計画都市としての城下町の建設、城下への主街道の取り込み、在地性をもった有力家臣を含めた武士それに商工民の城下への集住化、政治・商工活動の城下=城主への集約化、城主と富豪商人との私的な繋りなどで、近世城郭へと脱皮するための要件をかなり満たしているのである。ただ、直家の城の記述では上居、堀、櫓、附がみえても、石垣、天守の語がない事や、城下町の基本軸が十字に交差する二本の道路であって、道路が複数の交差点をもって街区を成すものとしては示されていない事は、注目しておきたい。

さて、通説で直家の本丸があったという石山の最高所は池田家祖廟の郭で、その現構造は直家当時のものと言われてきたが、現実には天正9年（1581）を越る直家段階のものとは到底考えられない。矢穴を残す大きな割石を積んだ高さ10m超級の本格的高石垣を配すという事に加え、本丸中の段の発掘調査⁶で判明した諸様相の変遷に照せば、宇喜多秀家や小早川秀秋段階よりもさらに新しく、前池田氏段階のものとみられる。旧地形に從順な古い郭が埋め込まれ、時期を追って郭が拡大していく中の段の状況からすれば、直家段階の郭があったとしても地下に埋め込まれているに違いない。石山に想定できる他の直家段階の郭についても同様である。したがって直家期の石山の具体構造は未確認であるが、併行期とみられる富山城や本丸中の段第I期の構造から、本格的な高石垣は未だなく、石垣はあっても高さ2~3m程度の低石垣で地山切り落しによる斜面や土壘が多用されていたとみられる。また、現地形などから、西方へは風化岩盤による台状地形が馬の背状に延びていたのが確認でき、史料に示された城の西向きは肯定できよう。

ところで、東の岡山で土壁を伴う中の段第I期の構造は、直家が新たな郭を東方に造成した事を記す史料との関連で注目されるが、中の段で検出された郭の規模や高度は、石山の本丸伝承地に埋め込まれる郭に匹敵し、その東隣には5m程の段差をもって高い中心郭が旧地形から想定できるから、岡山の郭群が事實上の本丸（詰の丸）としての要件を備えていた可能性が窺える。そのいっぽう、石山の自然丘は岡山より扁平で範囲は広く、台状の頂部にはまとまった平坦地が取り易く、三丘陵の中央に位置するから全方位的な軍事展開に対しては有利であるし、北からの旭川の洪水に対して石山のすぐ南背後の沖積地は安定度が高かったとみられるから、直家の居館や家臣屋敷、城下町の形成といった面では岡山より確かに石山が中心的もしくは先行的と考えられる。実際には混乱している史料の記述状況を顧みれば、石山から岡山への本丸移転があったとしても、果たして誰の段階のいつであったのかという事を、今後は考古学的に詰めていかなくてはなるまい。それは城地の移転問題でなく、天



第2図 岡山城主要部と調査位置（1/8000）

神山・石山・岡山に展開した郭相互の機能分化の問題である。

具体的に直家期（もしくは秀家期でも天正18年以前）に遡る可能性のある初期の城下町関連の遺構は、後の櫻の馬場通りに臨む純然たる沖積地で下層には古墳時代初めなどの水田が確認された中国銀行本店用地³、天神山から風化岩盤が尾根状に延び先行して古墳時代などの遺構が営まれたシンフォニービル用地⁴の西半部、後の大手門近隣で中世墳墓や多量の土器が確認された中国電力内山下変電所用地⁵など、広範囲で確認されつつある。これらは、もとから地盤が安定した地点に限られるようで、場所によって地割り軸が異なる可能性が強く、また遺構密度も疎で瓦を伴うこともほとんどなく、後の二の丸【外郭】のような広大な一塊の郭としてあったものとは考えにくい。

宇喜多直家は天正9年（1581）に死去し、翌天正10年（1582）にはその次男でまだ幼年であった八郎が遺領相続を織田信長によって認められ、宇喜多勢は織田方の最前線にあるものとして備中高松城（岡山市高松）の水攻めに臨んだ。羽柴秀吉は高松出陣に際して岡山城に立ち寄ったと伝えられている。秀吉は、水攻めで毛利方に勝利する一方、本能寺の変を受けて中国大返しを挙行し、天王山の戦い、清洲會議、賤ヶ岳の合戦などを経て豊臣政権を樹立した。その豊臣政権のもと、宇喜多八郎は天正13年（1585）に元服して秀吉の養子として秀家を名乗り、従五位下に叙されて侍従を任じられて以降、天正14年（1586）には従四位下・左少将、天正15年（1587）には従三位・参議、総大將を務めた文禄の役を経て文禄3年（1594）には中納言、そして慶長1年（1596）には大老と異例の出世を遂げ

る。こうした秀家の岡山城は、豊臣政権を構成する有力大名の城のみならず、擬制的な豊臣一族の居城として、備前・美作の二国をはじめ備中の高梁川以東や播磨西部の一部を含む領域支配のための拠点城郭として位置づけられる。

秀家は直家の城郭を大規模に拡大改造し、江戸時代へと繋る近世岡山城の構造の骨格を造ったといつてよい。秀家の普請は『岡山私考』では天正10年から16年（1582～1588）とするが、それはさがに古く考え過ぎのよう、その他の史料に基づく天正18年（1590）もしくは19年（1591）着手、慶長2年（1597）完成が通説となっている。普請には家臣の角南隼人、あるいは秀家の妻のお豪に付いて前田家から来た中村次郎兵衛が当ったという。本丸は、秀吉の意見を聞いて、それまでより東方の現在の位置に移し（前述のように史料間の不整合はあるが）、石垣を築き上げ、はじめて天守をあげたほか、櫓に加え「廣間」や「出任所」を造営したという。これは中城郭の量的拡大、軍備増強や近代化、政治・儀式空間の独立化もしくは拡大として解釈できる。

本丸中の段の発掘では、この秀家の普請は文禄年間を中心と考えられ、本格的な高石垣、金箔おしのものを含む大量の瓦とこれを掲げる城郭建物・御殿建物の登場、すなわち第Ⅰ期に対して大きな飛躍を遂げた第Ⅱ期の構造の成立として具体的に確認することができた。これらの構造は、複雑な郭の改造過程を経て、中の段現役構造の地下に續てが埋設していたのである。さらに、今回の発掘成果も含めれば、秀家期の本丸は、確かに典型的な織豊期城郭の城に達しているいっぽう、後の段階に比べれば本段・中の段相当部は狭くて軍事的達成度も不十分、下の段や内堀に至っては石垣化や郭としての整備が遅れており、決して江戸時代初期の構造と同一視できないことが判ってきた。

次に秀家の岡山城の本丸外をみてみると、文献史料では、秀家は従来は岡山城の遙か東方を流れていた旭川を、西方に振って本丸の北と東を鉤形に蛇行して巻き込む現在の形に付け替えたという。川をして事実上の堀となす軍事的な配慮として評価されるのは言うまでもないが、普請の当初には、流路は城の北西で二分され、西流は石山と天神山の間を抜けて南に延びていたものを、洪水対策として旧分岐部に石をもって堰（＝石閂門の由来）を施し、西流を内堀として整備し、さらに中堀を掘削して上・中・下ノ町（福岡町）を郭内「三之曲輪」に取り込んだという。このことは江戸時代に受け継がれる主要な郭のアウトラインが形成されたことを意味するが、旭川や堀の掘削の実状は、それが完全任意のレイアウトに基づくのではなく、元からあった旭川の分流河道や河道跡・後背湿地の位置に規定され、それをむしろ巧みに活用して整備したという側面が強いものであった。この事は、本書に掲げた発掘成果のほか、本丸西側内堀での発掘成果^④、二の丸外の内堀西縁のシンフォニービル用地での後の堀側に急激に落ち込む古墳時代初頭の遺物包含層の存在、現旭川西岸の県庁増築部用地^⑤での城下町関連遺構面の基盤をなす円礎層の存在など、考古学的データによってかなり具体的に判ってきた。後の後楽園や東西の中島も、恐らくはその河道に基づく微高地に違いない。そのほか秀家は外側の内堀に面する西門（直家期の大手門）の改造を行ったとみられるほか、南辺内堀に面する南門（大手門）を建てたとの記述があり、秀家の段階で大手は西から南に改変されたとも解釈されている。

ところで直家期・秀家期の城下町は南辺内堀のさらに南方の、後に南側の三之曲輪域となったところまで広がっていた。『黄蘋古集案』に収められた文禄2年（1593）とみられる秀家の指示書では、内堀の南方にある天瀬地区での武士以外の居住を禁じており、この地の武家地（恐らく下級武士街）としての計画的整備が窺えるが、ぎゃくに秀家の普請以前すなわち直家段階では武家・商人が混交した街の形成があったことも判る。天瀬の町の占さは、天瀬遺跡とされる弥生時代以来の集落が展開す

る微高地があつて安定した土地であったことが大きな要因であろう。一方、西では直家期に小西行長屋敷があつたという福岡町、後に西側の三之曲輪城となつたところも注目される。ここも、天神山からの尾根状地形が南に延びて安定度が高かつたとみられ、同様に町の形成が古いとみられる。つまり、外側の内堀に画される二之丸〔外郭〕は、城の中核部である岡山・石山から南に離れた旧町（天瀬）、それに西に離れた旧町（福岡町）との間を面として充填し、土地利用条件の善し悪しに関わらず統一的な街区空間として創設されたものと評価できる。かくして、秀家期以降の二之丸〔外郭〕域では各地で花崗岩バイラン土による造成上が分厚く確認できるのである。

このほか、『黄蘋古箇集』の先と同じ文書では旧町での古い建物の破却を含め、新町・旧町あまねく商家の階建化を奨励しており、城下町の町並み形成への強い計画性が読み取れたり、岡山以外での酒造を禁止した文書があつて、領国内での商工活動の城下町への集約化が進められたことが窺える。また、旭川の中洲である東西の中島は、有力商人である阿部定全や那須半入に屋敷地として与えられ、三町上手の借橋の代替として京橋が架けられ山陽道を通過させたという記述もあり、かなり江戸時代の状況への接近が認められる。

しかし、本丸内や石山地域での秀家の構造に対して後の変更が激しいという事実や江戸初期の二之丸〔外郭〕域における地盤重上げ造成の頻繁さ、あるいは大坂城など考古学的に判明しつつある同時期の城下の構造などに照せば、秀家期での二之丸〔外郭〕・三之曲輪・天瀬地区の構造や景観を、後の池田忠雄期以降の絵図に示された状況と同一視する事はできない。例えば、文献史料に後の改造が窺える城門はいうまでもなく、堀の位置や走向も概略としては定まっていたとしても、具体構造は変動した可能性があるし、郭内の地割りの方位軸の踏襲性は認めたとしても街路位置そのものは動いた可能性がある。また郭内の屋敷地としての達成度や充填密度それに利用形態（荒無地・畑地・各種工事に伴う飯場や工房など）が存在する可能性、各種公的施設の配置状況など）、武士と町人の棲み分けの徹底度などの実態も今後さらに追求されなければならない。逆に古い直家段階にも堀などは想定できるから、それとの踏襲性や断続性の吟味なども必要となってくる。

慶長5年（1600）、関ヶ原の戦いで西軍についた宇喜多秀家は敗走し、備前美作は秀吉の妻おねの実家である木下家に出自をもつ小早川秀秋に与えられた。翌年、秀秋は岡山城に入り、すぐさま岡山城の整備に着手している。最大の普請は外堀の掘削で、秀家の岡山城の北と西側を大きく取り巻き、三之外曲輪を創設して郭内面積を一気に倍増させている。外堀は二十日間の突貫工事で完成させたとの伝承をもつが、本格的な石垣は伴っていないようで、幅の広い土塁を城内側に形成している。南側の天瀬地区などは直接外堀によって画されるに至り、南部の外堀は秀家の内堀を活用したともみられ、東辺も恐らく部分的にはあろうが旧河道と重複する事実が確認できる。外堀に面する五箇所では後に統く位置に門が設けられたという。また中核部での改修もおこなわれ、本丸内ではその北西部に大納戸櫓（見附櫓）を亀山城から引いて建てたと伝えるほか、石山門は富山城から移転し、その他の櫓や重臣屋敷の門や台所にも他城から運んだものがあるという。本丸中の段の発掘では秀秋が大がかりな改修を行ない、大納戸櫓に相当する位置に確かに櫓を建てた可能性が窺える一方、いまの大納戸櫓の櫓台の成立は秀家から一段階遅れる事が判明し、幕末まであった大納戸櫓をそのまま秀秋期の構造とするには疑問が提示されるに至っている。また石山門も土台石垣が新しく秀秋当時のものとは到底考えられない。いずれにせよ秀秋は幕命による領内諸城の城割りと改修工事の突貫性を受け、流用材などもかなり活用しつつ、在城が短期間のわりには大規模で多岐に渡る岡山城の改修を行ったことは確

かである。それは、軍事的には西を強く意識したものであり、防長に選ばれた毛利氏の報復を恐れた結果との見方もある。

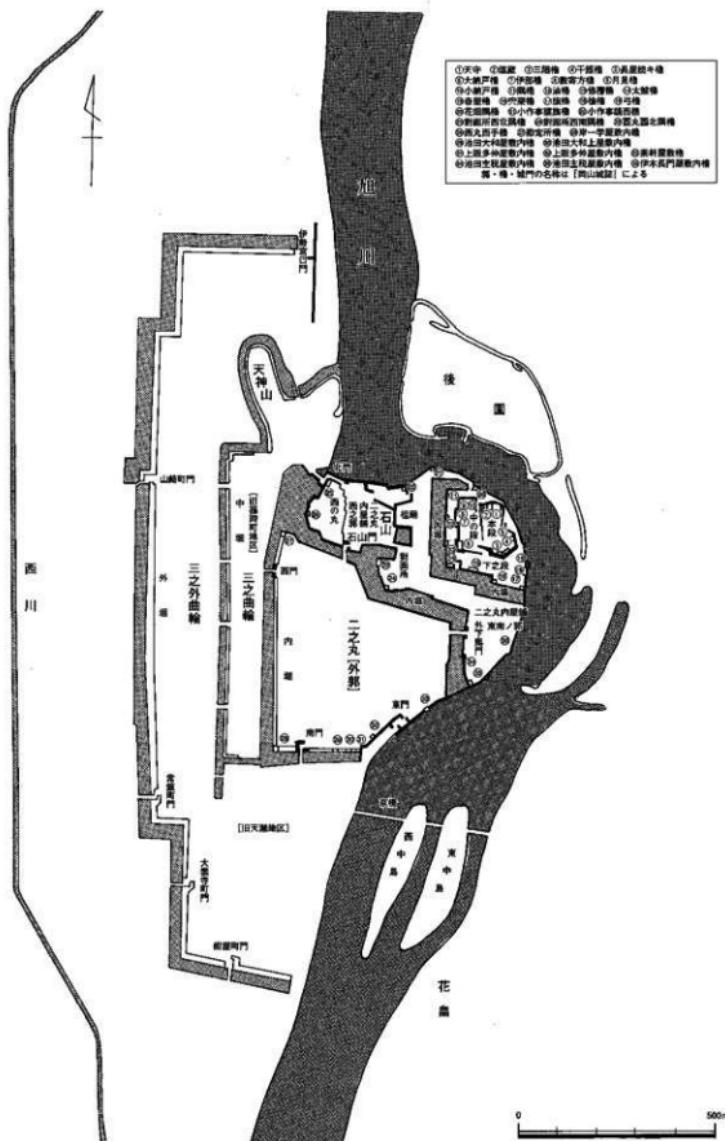
慶長7年（1602）に秀忠は急死し、翌慶長8年（1603）備前は姫路城にあった池田輝政と徳川家康の娘の富子の間に生まれた池田忠繼に与えられたが、忠繼は幼少であったので、兄の池田利隆が岡山城に入りて国政を代行した。彼は実際は藩主ではなかったので、本丸本段には住まず、石山の西端に西の丸を造成して、そこに住んだという。文献史料から池田利隆期の岡山城改造は西の丸が中心とされてきたが、実は本丸でも相当な改造を行なっている。今回の発掘の成果からすれば、特に下の段や内堀の整備の主体者として利隆の果した役割は絶大であったようである。利隆の在城期間である慶長半ばから末とは、まさに他国では各大名が競ってポスト開ケ原の最新鋭の近世城郭を築城している時であり、宇喜多秀家・小早川秀忠の構造を更新する工事の推進は、むしろ理にかなっている。

慶長18年（1613）に利隆の父、池田輝政は死去し、利隆は家督を継ぐために姫路に帰り、替わって本来の藩主である忠繼が岡山城に入ったが、大坂冬の陣への参戦を経て元和1年（1615）に死去した。このため淡路の由良城にあった弟の忠雄は加増して備前を与えられ、岡山城に移ってきた。この忠雄こそが後に統く岡山城の具体構造を完成させた城主である。本丸内では中の段の月見櫓や表書院のうちでも藩主公邸（政務空間）部の要である南座敷を建設したことが史料から窺え、発掘調査成果によつて追認された。史料ではこのほか、二之丸〔外郭〕の西門をやや南に動かす改造、南門を大幅に西に移して本格的枠形を造る改造が知られる。本丸内の考古学的成果も踏まえれば、改造の頻繁さを属性とする城門は、忠雄によって確定した構造が予想以上に多そうである。また、忠雄には旭川東岸南部の遊興地で実状は郭の趣も兼ね備えた花畠の建設を伝えているし、西川の掘削も伝えられる。西川は外堀のさらに西にあって、流路は狭いが城下を限る最も外側の堀としての意味も合わせもつ。

寛永9年（1632）、忠雄は死去し、その子の光伸と姫路から鳥取へ移されていた池田光政の間で国替えが行われた。光政以降は、古くから隠し郭としても評価されている後園（後楽園）が、17世紀末から18世紀初頭にかけて本丸北東の掘手に造成されたのを別にして、城の縄張りや軍事的構造は基本的に幕末に至るまで現状維持が図られた。ただし、洪水による崩落石垣の原状復旧や石垣の防護工事、櫓類の上屋の部分改造や補修は行われている。状況が一転するのは明治に入ってからで、本丸の大守・月見櫓、西の丸の西手櫓、二之丸〔内郭〕の石山門を除く櫓や本段御殿や表書院といった多くの郭内建物の破却に統き、本丸の内堀を除く各所の堀は次々に埋め立てられていった。

岡山城の縄張りを信憑性をもって具体的に示す最古の絵図は、忠雄期に作られ寛永9年（1632）の国替え時の光政の家の星敷地を貼紙で割り付ける『岡山古図』（岡山大学池田家文庫蔵）であるが、光政段階に入る正保年間（1644～1648）に作成された『備前国岡山城絵図』（国立公文書館蔵）や慶安年間（1648～1651）頃の『岡山城下之図』（岡山大学池田家文庫蔵）と大局においては大差ない。しかし細部を比較すると、『岡山古図』では本丸では月見櫓が建つ中の段北部の表現がなく、二の丸〔外郭〕の西門は後の位置よりやや北にあって、南門は後より東にあって枠形が未形成である。また『岡山古図』の西川は、特に南部が後の絵図とは一致せず古い時期の状況を示している。つまり『岡山古図』では、忠雄が行った改造のうちこれらの部分に関しては完成前の姿であり、この図の作成が忠雄段階のうちでも古い時期のものであって、寛永9年直前ではない事が判る。

寛永年に完成した岡山城は、旭川に向かって突き出す東端部に三段構成の本丸を構え、その西側の石山には西の丸や池田家祖廟の郭（二之丸内屋舎）、本丸の南西には対面所の郭、石山のさらに北西



第3図 完成した岡山城の構造 (1/12500)

には天神山の郭がある。これら岡山城主要部は南東から北西に分布する旧丘地形を下地に立体的に展開するのに対し、その北西から南に広がる武家屋敷街や町家街は、堀で空間を分離された平坦地である。本丸や上級武家地を含む二之丸を区切る内堀は三重である。内堀外には商人町（三之曲輪）が広がり西は中堀で区切られる。中堀の外は再び武家屋敷（三之外曲輪）があって外堀に囲まれ、外には寺町や再び町屋と武家屋敷が広がり、西川が城下の西限をなす。南では町家の外に武家地を配す三之曲輪の南部が外堀に面され、堀外は西川と旭川に挟まれて城下町が細長く延びる。本丸周辺の上級武家地を内側に、武家地・町家地が再びにわたって反復する岡山城独特の城下町の構成は、宇喜多秀家段階なりのマスタープランが既に完成を遂げていたため、これが固定化され、後の城主は不足する武家屋敷や町家の敷地を外方の郭に求めて、二次市街が付加された結果であろう。

外堀と旭川によって画される範囲は南北1.8km、東西1.0km、外堀外を含む城下城の南北長は約3.5km、西川と旭川に挟まれた東西最大長は1.3kmを計る。南北に細長く延びているのは、大局として旭川の流路やその前身河道によって形成された微高地の分布に規定されたからとみられる。明治になって書かれた『岡山城誌』によれば、天守および付属する塙蔵を別として櫓門の数は34基もの多数にのぼり、うち19基が本丸、残り絶ては二之丸にあって、内堀の外には無い。

絵図に示された城下の街路は絵図間での変動があまりなく、江戸時代を通じて固定的で、微妙な振動はあるが殆どが現代の市街地街路に踏襲されている。二之丸〔外郭〕での発掘調査ではこの事の裏返しとして、街路を検出しにくいが、中国銀行本店用地では絵図と対照可能な屋敷境の堀の存在から街路位置の現代への踏襲性が傍証できたし、県庁増築部では排水溝の走向から絵図と一致する街路の存在が窺える。二之丸〔外郭〕の発掘調査で確認されて注目されるのは、厚さ数十cmから1m余りもの砂の堆積である。この砂は、流失した侍屋敷が439軒あったことなどを史料に伝える承応3年（1654）7月の旭川大洪水によるものとみられ、そうした被害を被った武家屋敷の構造をそのまま埋め込んでいる。この洪水によって二之丸の生活面は一気に上昇したが、街路や屋敷割りは直上に見事に復旧されることになる。二之丸〔外郭〕では、慶長年間頃を中心として宇喜多秀家期から承応の洪水直前までの掘建柱建物や礎石建物、井戸や大小のゴミ穴といった遺構が重層して良く残り、大量の瓦や陶磁器、木製品などの豊富な遺物を伴っている。

(乗岡実)

注

- (1)『富山城跡第2次調査報告』岡山市教育委員会 1969
- (2)『史跡岡山城跡本丸中の發掘調査報告』岡山市教育委員会 1997
- (3)岡山市教育委員会が主宰する中国銀行本店建設事業埋蔵文化財調査委員会が1989年に実施。
- (4)岡山市教育委員会が主宰する表町一丁目地区再開発事業埋蔵文化財調査委員会が1990年に実施。
- (5)『岡山城二の丸跡 中国電力内山下電所建設に伴う調査』同事業埋蔵文化財調査委員会 1998
- (6)『岡山城内堀』岡山市教育委員会 1998
- (7)『岡山城二の丸跡 岡山駅前再開発工事に伴う発掘調査』岡山県教育委員会 1991

参考文献

- 木畠道夫『岡山城誌』1891 ○『岡山県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第九冊 岡山県 1932
- 『岡山市史』第三 岡山市役所 1937 ○巣鴨政右衛門『岡山城と城下町』別冊岡山文庫4 日本文教出版 1972
- 『岡山城史』岡山市編 山陽新聞社 1983 ○『岡山県史』近世 I 岡山県 1984
- 加原耕作『岡山城』山陽新聞サンブックス 山陽新聞社 1994
- 三浦正幸ほか『岡山城』歴史群像名城シリーズ12 学習研究社 1996
- 片山新助『よみがえる岡山城下町』山陽新聞社 1996

第II章 調査経過

第1節 調査に至る経過

史跡岡山城跡保存整備事業に係る発掘調査は、この事業の当初の実施計画では本丸中の段を施行対象地としていたために、その成果を踏まえた中の段における歴史的環境の復元整備の完了をもって、一応の終了を迎える予定であった。しかし、その整備自体の施工は、平成9年3月に刊行している『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』で、経緯と顛末を記しているような状況の下に、実現を見るに至らなかったものの、国庫補助事業による保存整備事業は、中断することなく継続して施行できる状況がもたらされた。このため、整備内容策定の前提となる発掘調査は、本丸跡一帯の整備に備えて引続いて実施することとなり、中の段に難航して下の段での実施の運びとなった。

史跡岡山城跡保存整備事業の実施に至る経緯は、『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』で詳述しているように、岡山城跡が1987（昭和62）年に史跡指定を受けたことにより、岡山市教育委員会が平成元年度から本格的な取組みを始めた。平成元年度から3年度にかけての文化庁記念物課の担当調査官と岡山県教育委員会文化課の担当職員の指導による準備期間を置いて、平成4年度から国庫補助事業による保存整備事業が実施されることとなった。この間、昭和63年度からは岡山市の国への重点要望で、史跡岡山城跡の保存整備事業実施が本格的に要請され、文化庁及び岡山県への施設的実施の要望が図られた一方で、平成3年度からは教育委員会文化課（当時）を主管課にした保存整備事業の予算化が図れ、整備の基本検討資料となる指定域（後楽園地区を除く）の地形測量図の作成、国庫補助事業による整備事業実施の前提となる「史跡岡山城跡保存管理計画」の素案検討等の準備作業が進捗した。平成4年6月に「史跡岡山城跡保存管理計画検討委員会」を委嘱して同管理計画の素案の検討協議を踏った後、「史跡岡山城跡保存管理計画」の策定を行い、同年度末に公表刊行に至った。この管理計画では、保存整備事業の施行対象地を、史跡指定地の内から特別名勝であって岡山県の管理下にある後楽園と、民有地で他の目的に使用中の二の丸（旧本丸）跡を除き、岡山市有地であって都市公園となっている本丸跡に設定している。本丸地区でも、本段が観光施設に利用され、下の段が体育施設と催事場に使用されている公園としての管理運用の実態から、当面の史跡環境整備の施工地を本丸中の段に設定している。

平成4年度から着手した国庫補助事業による史跡岡山城跡保存整備事業は、5ヶ年計画により本丸中の段の歴史的環境の復元整備を意図し、その検討資料と遺構の実態を把握するため、発掘調査を先行して実施することになり、中の段中央に所在する戦後建物の鳥城公園施設無料休憩所の撤去との関係で、その実施が平成4年度から7年度にまで及んだ。中の段の歴史的環境整備は、平成7年10月に「史跡岡山城跡整備委員会」が設けられ、そこでの検討協議を経て幕末時の景観の復元を図ることとなり、平成7年度末に発掘調査と岡山城関連史料調査の成果に基づいた整備の基本計画と実施設計の策定にまで至り、平成8年度からの施工の段取りとなった。しかし、平成7年度末の岡山市の平成8年度予算確定期に至って、整備内容が市長のコンセンサスを得られず、国庫補助事業による史跡環境整備の予算化が見送られる事態となり、中の段の史跡整備が実施不可能な状況に立ち至った。

史跡岡山城跡の国庫補助事業による史跡整備が実施不可能となった状態を受けて、この事業の担当課である岡山市教育委員会文化課（現文化財課）は、史跡岡山城跡保存整備事業が平成8年度以降も

国庫補助事業として継続できる方策を検討し、文化庁記念物課の担当調査官に要請して協議を重ねた。その結果、中の段の歴史的環境整備は内容を当面保留状態にし、北部に地盤造成を暫定的に施工する内容に変更するとともに、北西部石垣の破損箇所の保存修理と発掘調査報告書の作成については、策定した計画どおりに実施するということで、平成8年度以降も国庫補助事業を継続できることになった。ただし、継続の条件整備として、史跡岡山城跡本丸域全体の史跡整備計画を平成8・9年度に単独市費で検討策定するとともに、こうした変更を史跡岡山城跡整備委員会で了承を得ることになった。そして、平成8年7月の第4回の同委員会で了承を得ることになった。

「史跡岡山城跡保存管理計画」に基づいた中の段の史跡整備は、策定した歴史的環境の復元整備が凍結状態となった一方で、国庫補助事業による史跡岡山城跡保存整備事業は、文化庁記念物課の担当調査官の理解と指導に基づいて、本丸域全体を対象とした「史跡岡山城跡保存整備計画（第Ⅱ期）」の策定を前提として、平成9年度以降への継続が図られることになった。こうした状況を受けて、岡山市教育委員会は、将来の史跡環境整備の基礎資料となる城郭構造の把握を意図して、当面実施可能な下の段一帯の発掘調査と、保存修理のための石垣現況調査及び石垣台帳作成を、平成9年度から実施することにした。平成9年が岡山城築城400周年の記念の年に当たり、城跡の表部分（南・西側一帯）で記念の催事が取り行なわれることから、発掘調査は、平成9年度には下の段の裏部分（北側一帯）から始め、3ヶ月をかけて下の段全体の調査可能地を実施するに至った。

下の段の発掘調査は、中の段の発掘調査を継承した形態を採り、岡山市教育委員会が直接に施行し、社会教育部（現生涯学習部）文化課（現文化財課）が主管課となって、文化財係（現文化財課）が担当して実施した。実施にあたっては中の段の発掘調査と同様に、岡山市教育委員会が「史跡岡山城跡保存整備発掘調査対策委員」を専門研究者に（同一メンバー）に委嘱して、委員の指導と教示を仰いで万全を期している。平成9年度からの発掘調査では、文化庁の指示により、「埋蔵文化財発掘調査の通知」の提出を行わず、「史跡現状変更許可申請書」を毎年度に市長名で申請し、許可を受けて実施し、完了後に「史跡現状変更完了届」と「埋蔵（文化財）発見届」及び「埋蔵文化財保管証」を所管行政機関に提出している。

史跡岡山城跡保存整備事業の当初計画と実施状況は、次頁の表のとおりである。 (山宮徳尚)

史跡岡山城跡（本丸中の段）保存整備事業実施計画（当初案）

年度	予算額（千円） (国庫補助対象額)	単独市費	国庫補助	説明
4	9,700 (5,000)	・西側石垣の後世登道の撤去 ・「史跡岡山城跡保存管理計画」の策定と発刊図作成	・北部の発掘調査 ・西側北部石垣の実測と復元図作成	・中の段は、東側の本段が城（濠）主の日常生活の御殿（勝手方）であったのに対し、岡山藩藩政（公事方）の庁舎の表書院の建物が林立していた。月見櫓が残存。
5	19,200 (14,000)		・北半の発掘調査	・対象地約2000m ² で、小庭園跡や建物の礎石を検出。
6	62,000 (56,000)		・南部の発掘調査 ・歴史的環境の復元整備計画策定 ・本丸堀の全石垣立面の実測と石垣破損箇所の調査	・対象地は1500m ² で、南玄関等の遺構を追及。 ・歴史的環境の復元整備計画は表書院の構造と配置や小庭園の半立体的表示。
7	106,000 (94,000)	・烏城公園施設無料休憩所本丸食堂の撤去 ・内堀西側部分の構造調査	・歴史的環境の復元整備着手 ・西側北部石垣破損箇所の復元修理 ・発掘調査報告書の作成 ・内堀西側部分の復元整備と調査及び浚渫 ・石垣破損箇所の保存修理工事 ・月見櫓の自動防火設備設置	・立体的表示(間取り、廊下、土間、壁、柱間等)と小庭園の復元整備による史跡環境整備→2年推進。 ・内堀西側部分6900m ² を排水し、堆積物の除去と調査と復元整備。 ・本丸内民有地の公有化の検討。
8	131,000 (126,000)		・歴史的環境の復元整備完工 ・内堀東側部分の復元整備と調査及び浚渫 ・石垣破損箇所の保存修理工事 ・月見櫓の自動防火設備設置	・石垣破損箇所は主に孕み出し。
計	327,900 (295,000)			
9	[未定]		・管理施設の整備と充実 ・第Ⅱ期保存整備計画(本丸下の段～帯を対象)の策定	・平成4～8年度の5ヶ年をⅠ期とする上記実施内容を踏まえて平成9年度以降も継続して保存整備をⅡ期事業として実施予定。

史跡岡山城跡保存整備事業実施経過

年度	執行額 千円 (国庫補助対象額)	単 独 市 費	国 庫 补 助 (史跡岡山城跡保存修理事業)
3	2,093(市)	・指定地平面測量図1/500 ・担当調査官の現地指導	
4	9,504 (5,000・国2,500・県833) ・市6,171	・「史跡岡山城跡保存管理計画」 ・中の段西外側後世登坂道の撤去	・中の段北部の発掘調査(411m ²) ・中の段西側北部石垣の修復復元図作成策定
5	18,790 (14,000・国7,000・県2,333) ・市9,457		・中の段北半の発掘調査(2,000m ²)
6	21,029 (15,000・国7,500・県2,500) ・市11,029		・中の段南部の発掘調査(1,500m ²) ・中の段の史跡環境整備計画策定
7	41,021 (15,000・国7,500・県2,500) ・市31,021	・史跡岡山城跡整備委員会の設置 ・中の段詳細測量図(1/100)作成 ・内堀西側の排水と堀底調査 ◎(休憩所=食堂等建物撤去)	・中の段中部の発掘調査(1,000m ²) ・中の段歴史的環境復元整備の基本計画と実施設計の策定
8	210,328 (21,122・国10,561・県3,520) ・市196,247	・史跡岡山城跡整備委員会の開催 ・月見格のライトアップ ・中の段北部間取り芝付け展示 ・築城期石垣露出仮設展示 ・内堀浚渫と廻底調査 ・内堀浜水復旧(旭川取水) ・大納戸修復元再生建築調査 ※築城400年記念事業が実施され 出す	・中の段の発掘調査報告書の作成 ・中の段北部の地盤造成(暫定整備) ・中の段西側北部の石垣保存修理 ※昨年度に策定した中の段歴史的環 境復元整備は当面凍結
9	42,000 (20,000・国10,000・県3,333) ・市28,667	・岡山城跡残存石垣の悉皆調査と台 帳作成 ・内堀水質浄化装置の仮設設置 ・「史跡岡山城跡保存整備計画 (第二期)」(案)の策定 ・中の段西側北部石垣の修復 ・築城期石垣露出仮設展示の復旧 ※築城400年記念の年	・下の段北部の発掘調査(850m ²) ・本段と中の段南側石垣の現況調査、 石垣台帳の作成
10	36,139 (24,000・国12,000・県4,000) ・市20,139	・中の段大納戸構石垣の実測と保存 修理工事実施設計 ・内堀水質の暫定的浄化	・下の段全域での発掘調査(800m ²) ・本段と中の段の石垣の保存修理必 要箇所の実測と工事実施設計
11	26,276 (24,000・国12,000・県4,000) ・市10,276		・下の段全域での発掘調査(830m ²) ・中の段西側石垣保存修理の着手 (44m ²)
累計	407,180 (138,122・国69,061・県23,019)・市315,100		
12	34,820 (予算額) (32,400・国16,200・県5,400) ・市13,220		・下の段発掘調査報告書作成 ・中の段西側石垣保存修理(解体)の 施工(326.536m ²)

第2節 調査の体制

〔発掘調査〕

発掘調査主体者 岡山市教育委員会教育長 戸村 彰孝（平成12年8月まで）
玉光 源爾（平成12年9月から）

発掘調査対策委員 稲田 孝司 岡山大学文学部教授
狩野 久 前岡山大学文学部教授・岡山市文化財保護審議会副会長
加原 耕作 前岡山県立博物館館長・岡山市文化財保護審議会委員
工業 善通 前奈良国立文化財研究所
西川 宏 山陽学院大学国際文化学部講師
細見 啓三 前奈良国立文化財研究所・岡山市文化財保護審議会委員
間壁 忠彦 倉敷考古館館長
水内 昌康 前岡山市文化財保護審議会会長

(五十音順・所属役職は平成12年度)

発掘調査担当者 岡山市教育委員会文化課課長 富岡 博司（平成9年度）
米村 博（平成10・11年度）
岡山市教育委員会文化財課課長 出宮 徳尚（平成12年度）
岡山市教育委員会文化課文化財専門監 出宮 徳尚（平成9～11年度）
岡山市教育委員会文化財課調整主幹 三宅 一正（平成12年度）
岡山市教育委員会文化財課文化財専門監 根木 修（平成12年度）
岡山市教育委員会文化課課長補佐 根木 修（平成9～11年度）
岡山市教育委員会文化課（文化財課）主任 神谷 正義
岡山市教育委員会文化課（文化財課）主任 乗岡 実
岡山市教育委員会文化課（文化財課）主任 羅久井和恵（庶務）

(平成12年度に文化財課が設置され、当該事業を所管している。)

発掘調査作業員 青木敏夫 石原才子 植松秀夫 大西千鶴 岡崎 仁
岡嶋隆司 岡本勝美 岡本久美子 小野真由美 川部幸二
古中大輔 近藤正之 佐々木龍彦 佐藤令子 佐藤睦子
澤谷美佐夫 渋鎌喜代子 中山政太郎 難波像一 橋本 義
橋本寿男 藤井裕之 松本 晃 水内汲子 三宅一美
村上静男 木井一史 山口正康 吉村順次 脇本元典

発掘調査事務員 井上尚子 田中美穂 花出八重子

出土遺物整理作業員 大西千鶴 岡本東美 田中美穂 谷口光子 都井京子
(含、報告書作成) 信江清美 八木留利子 山元尚子

調査にあたっては、岡山市文化財保護審議委員や史跡岡山城跡整備委員の先生方、文化庁記念物課の木中真調査官（現主任調査官）には現地視察のうえ、多大なご指導ご教示とご助言を頂いた。また、岡山県教育委員会文化課の文化財担当職員の方々をはじめとして、全国各地の数多くの研究者や文化財関係者の方々も現地にお越し下さり、諸々のご教示やご助言を頂いた。記して深謝いたします。

なお、発掘調査地は岡山市の都市公園である烏城公園として運用と整備管理されているため、所管課の岡山市都市整備局公園緑地部公園整備課（現緑政課）及び公園管理事務所の各職員の方々には多大なお世話とご支援を頂いた。また、岡山市経済局商工観光部観光物産課や岡山市観光協会岡山城天守閣の職員の方々にも、施設使用や便宜供与の諸々の面で多大なご協力を頂いた。こうした岡山市の烏城公園に直接的に携わる各関係機関の方々にも深謝致します。

史跡岡山城跡保存整備に係る下の段の発掘調査の報告書を作成するに当たって、ご指導ご教示とご協力、ご支援を頂いた多くの方々に、改めて厚く御礼申し上げます。
(出宮)

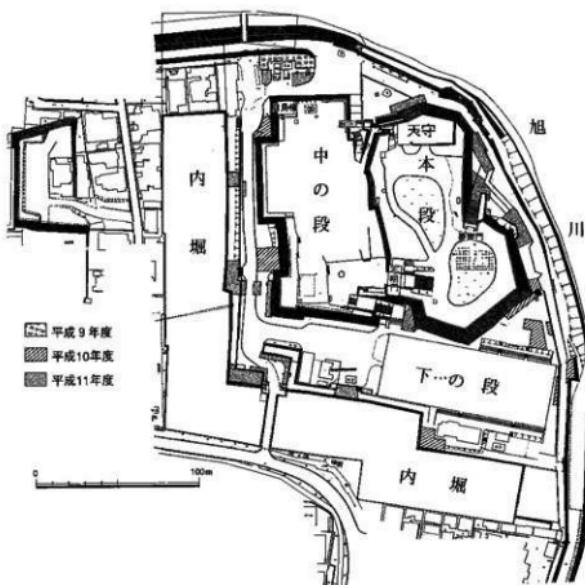
第3節 発掘調査の位置・方針・経過

1. 発掘位置

岡山城の本丸は基本的に二段造りで、いわゆる一二三の構えをもつ。このうち本丸の最高所を含むのが本段で、やや東に偏ってあり、南東に張り出している。本段の北端には天守があり、南東部は櫓や蔵が群在していたが、郭内北寄りは城主私邸としての本段御殿（大奥）の敷地であった。本段の西に高さ5mほどの石垣を隔てて南北に延びるのが中段である。中の段は高さ10m内外の高石垣によって南・西・北を囲まれ、約7300m²と本段に匹敵する面積をもつ。いまは北西隅に、国の重要文化財（建造物）に指定されている月見櫓だけが残るが、江戸時代には高石垣上に櫓が林立し、郭内は表書院と呼ばれた御殿が建っていた。表書院は岡山藩の政庁で、大広間や城主の執務室など城主の公邸機能を備えて、本段の御殿と並立していた。中の段では、その全域を対象に平成4年度から7年度まで発掘調査を実施した。発掘では、江戸時代の絵図に示された櫓や表書院周辺の礎石・基礎石組・排水溝、穴蔵、井戸、泉水などの遺構を多彩に検出したほか、その下層で江戸初期から安土桃山時代に遡る石垣や生活面が重層的に埋め込まれているのを確認し、郭が拡大的に改造・整備されていった状況を把握するなど大きな成果を上げることができた。発掘調査報告書は平成8年度に刊行している。

今回の発掘調査は下の段が対象である。下の段は本段と中の段と高石垣で囲まれて低い位置にあり、それらを取り囲む帶曲輪的な部分の総称である。南から西は内堀、北から東は旭川に面し、その側にそれぞれ高さ数メートルの石垣をもつ。いま、下の段内部は起伏に乏しく、一連の平坦地に見えるが、本末は天守台裏を中心とした北中部から北東部の一画が1段、3~4m高く、下の段自体が二段造りとの見方もできる。曲輪の幅は、特に南東で広く60m以上、北東で狭く最少4mと場所によって変動がある。また北西部は、昭和9年（1934）の旭川大洪水を踏まえて本丸側を削り込む形での河川改修など、近代の改変を大きく蒙っている。いまの西側内堀の北縁は後世のもので、本来の内堀は現在の旭川堤防をやや超える位置まで北に延び、さらに東側に鉤折れして廻り込んでおり、その堀の北岸と旭川の間には下の段に続く平坦地が広がっていたのである。

下の段は必然的に外から本丸に至る第一の防備線をなすもので、各方位とも石垣線に変化を持たせた要衝を軸に隅櫓や多門櫓が配置され、三方からのアクセスルートに即して各城門があった。うちでも南西部にある内下馬門は、堅固な石垣によって囲まれた方形をもつ本丸大手門である。江戸時代の絵図などによれば、下の段の郭内建物として、門と組み合う番所、各種の蔵、それに春屋や厩舎などが各所に分散して配置されていた。下の段全体として、御殿を主体とする本段や中の段との機能分化が窺えるが、一段高い北側中央の花畠と呼ばれた個所に限っては御殿的な建物があった。ここは天守背後にある城主の遊興空間としての「山里曲輪」的な部分で、江戸前期内に旭川の対岸に整備された後園（後楽園）は機能面でその延長線にあり、実際のアクセスルート面でも通じた部分である。



第4図 発掘調査位置 (1/3000)

2. 調査方針

今回の発掘調査は、下の段の全域を対象に置くこととしたが、予算や調査体制・安全確保に限界があること、公園管理事務所・鳥城テニスコートや旭川堤防などの施設があって現に機能していること、それと関連する上下水道や電気配線や縁石なども含め安易に撤去できない埋設物が縦横にあること、通路・駐車場の確保、樹木の保護など公園・観光施設としての利用やその保全への配慮が必要なことなどから、その全域を面として、またフリーハンドで発掘することは到底およばず、現実には極めて限定的な部分に大小不定形の複数発掘区が分散するトレンチ方式による発掘に留まらざるを得なかった。三ヶ年度におよぶ発掘の延べ面積は2,480m²で、現況での下の段の面積の22,153m²で割り算すると、発掘した部分は11%ほどに過ぎないことになる。

発掘の目的は、いうまでもなく史跡整備を前提とした、地下の遺構の有無とその内容の確認であるから、発掘区は無秩序に設けたのではなく、将来の遺構整備の候補地を見越して、元禄13年（1700）に完成した御城内御絵図（岡山大学池田家文庫蔵）などの絵図類に櫓や城門、蔵、井戸が示された場所を中心とし、加えて将来的解体修理も念頭に置いて本段・中の段側の高石垣の基底、その他の重要な考古学的データの獲得が予想される位置にトレンチを設けることを方針とした。櫓・城門・蔵・井戸については、現況で発掘可能な位置・状況にあるものに限れば、その總てについて多少ともトレンチを及ぼせた。このことが、下の段の発掘調査を三ヶ年度をもって一応の完結とした理由である。とはいって、下の段南東部の旗櫓や鉄砲蔵や井戸、南部の厩屋などは、テニスコートや公園管理事務所

建物との兼ね合いで、東部の中水門は旭川の現護岸保護のため、北部の花畠御殿部は公園通路や駐車スペースの問題から、まったく発掘ができなかった。これらは条件が整えば、追加の発掘調査が可能かつ必要となって来る。また、本段・中の段の各高石垣の基部も、今回は部分発掘であるので、石垣が解体修理の運びとなれば、改めて全面発掘調査が必要である。このたびの発掘は、限定的な確認調査に過ぎず、大部分を面として発掘できた中の段の発掘調査とは事情が異なっている。

明治時代以降のものは別として、原則的にその地点で確認された最初の遺構の保存と理解を最優先として、以深の掘り下げは行わなかった。ただ、近現代の搅乱が広範に、また深く及んで江戸前期以降の遺構が既に損なわれていたり、本来から存在しない場合もあり、そうした地点を中心に、さらに掘り下げを行い、江戸前期前半より古い下層遺構を重層的に検出できた場所もある。上位の遺構の保存に反しない限り、下の段の総合的な理解を目指して、古い時期の遺構追求にむしろ積極的に取り組んだのである。このため、各発掘区またその各部分ごとに、発掘調査で到達した現地盤面からの深さや層位はばらつきがある。

三ヶ年度に及ぶ発掘調査の現場作業は、予算執行上の制約のほか、作業員の人員確保、野外作業の季節的効率性なども勘案して、発掘後の埋め戻しを含めて年度ごとに完結させた。すなわち、各年度とも11月から翌3月末までが、発掘作業の工程であった。

3. 発掘調査の経過

○平成9年度（本丸第V次）[発掘面積850m²]

下の段の発掘としては初年度である。当年度は下の段北部から東部の掲手方向を対象とし、現場作業は平成9年11月25日に着手した。

先ず下の段東部の六十一雁木下門にトレチを設定し、早くも現表土の直下で石敷や列石が確認され、城門遺構の一部との期待が高まったが、戦災による廃棄物を含む造成土の上に構築されたものもあって、状況は複雑を極めた。それでも12月4日までには、幕末まで機能していた門の礎石や石敷が搅乱を受けながらも残っており、加えてその下層に古い路面や階段が別に埋め込まれていることが確認できた。

天守台石垣下に発掘区を設定したのは12月3日で、六十一雁木下門付近から当面の作業主体をここに移した。六十一雁木下門付近の発掘区はさらに北に拡張する計画であったが、その場所を年末に本段で催される岡山城築城400年記念ファイナルイベント会場の設営・撤収に使うクレーン車の駐車位置として確保する必要があったためである。天守台石垣下の調査区では、空襲で焼失した天守に葺かれていたとみられる被熱瓦を大量に含む新しい造成土に加え、石垣構築から幕末に至る造成土が予想以上に厚く、ようやく12月16日に現地表下2.5mもの深さで天守台石垣の基底を検出した。その西側の本段石垣を擁護する外被石垣の基部も、現状では敷石に見えたが、1m余りの高さをもつことも判った。

年内の作業は12月25日までとし、1月6日に再開した作業では、天守台下でのさらなる掘り下げや実測作業を進めるいっぽう、六十一雁木下門周辺に戻って、先の発掘区の北への拡大や門脇石塀の東側付根に新たなトレチを設定した。1月19日には、門脇石塀に切られる石組樹が検出され、六十一雁木門が宇喜多秀家より遅れる時期に成立したことが確定的となった。また、六十一雁木下門の北方でも、豊島石製の排水溝を有する幕末までの遺構面に掘り下げが到達し、1月27日には絵図に示され

た石組井戸を検出した。その一帯でも造成土を挟んで下層遺構が存在し、石組排水溝や備前焼の据え甕群、それに竪穴遺構や柱穴などが順次確認されていった。2月2日頃からは、六十・雁木下門の北西方でもさらに北に寄った位置に調査の主眼を移した結果、旭川に沿って建つ多門櫓の城内側には高さ2mもの石垣があり、れっきとした櫓台であったことが判るなどの成果があり、2月10日には多門櫓の北隣で江戸初期に埋められて絵図には示されない素掘りの井戸があることが判明した。この井戸は危険なため途中で掘り下げを断念したが、瓦や陶器、食物残渣など豊富な遺物が出土した。

2月12日には六十・雁木門調査区の南に続く坂下門調査区にも着手し、3月7日までに坂下門内の階段、門礎、本段石垣を擁護するための腰巻石垣の基部、門東側石壁の上部の状況などが明らかとなっていた。

3月8日からは、作業の主体を西北部に転じ、月見櫓下の馬場口門～春屋の調査区に着手したが、近代の造成土が1mを超えて深く、ようやく3月14日に至って門内の番所の基礎石組の一部が見えたのを始めとし、3月22日までには遺構の全貌をつかむ事ができた。

3月15日には一般市民を対象とした現地説明会を開いて約150人の参加者があり、翌3月16日には発掘調査対策委員会を開いてご指導を仰いだ。3月23日には、通路と安全の確保の上で後回しにしていた天守台真北の高石垣シノギ角直下に最後の発掘区を設定し、3月28日までに地山に据えられた根石の状況などを明らかにした。前後して、別枠の業者仕立てを主体とする各発掘区の埋戻しを急ぎ、3月31日付けで今年度の事業を完了した。

当年度の発掘は、遺構面が予想外に深くて掘り下げに多大な労力が必要なうえ、検出遺構が多彩で細部検出作業や遺跡の判断と実測に手間がかかることに加え、天候不順と発掘作業員の人数確保の問題もあって、特に2月・3月は調査員はもとより作業員さんを含めて土曜日曜返上の極めてハードな日程であった。

○平成10年度（本丸第Ⅵ次）[発掘面積800m²]

下の段の発掘としては一ヶ年度目である。ドの段の南東部を主体に、西辺部の一部も対象とし、発掘作業は平成10年11月18日に着手した。

最初の調査区は南側の内堀に面する宍粟櫓の櫓台に設定したが、掘り下げ開始まもなく表土下で敷石が検出された。作業の進行とともに、敷石は櫓台頂部の全面におよび、内には礎石であったものも含まれる事、それに北側には櫓から郭内平坦部に降りるための階段が近代の造成土に埋め込まれている事などが判明した。こうした全貌を明らかにするのに12月2日までを費やした。

翌12月3日からは発掘の主力を下の段西辺の金蔵調査区に移した。ほどなく金蔵の壁の基礎と思える石組を発見し、その延長を追求するいっぽう、12月15日からは下の段西辺北部の敷寄方櫓下に新たな調査区を設定し、中段石垣に沿う石組溝を検出した。さらに12月24日からは下の段南東部の蔵想定部の掘り下げも開始した。金蔵と敷寄方櫓下の調査区では年内作業の最終日とした12月28日までにはほぼ掘り下げを完了した。

翌1月5日に再開した発掘作業は、下の段南東部が主体となった。昨年中に着手していた南東の蔵想定部では1月6日に蔵の北辺とみられる石組を検出し、その延長を追求することとした。1月7日には南に続く近代石垣に沿って発掘区を設定し、櫓台の遺構発見を目指したところ、1月12日に至って櫓台の南辺下部とみられる石垣を確認、櫓台内部には石材が充填されていることが判明し、翌13日

には南に続いている多門櫓の郭内側石垣が近代石垣線の地下に重複して残り、郭内から多門に登るための階段も残っていることも確認できた。

1月14日には本段高石垣下でも発掘を開始した。本段石垣の根石は、東隅部では現況でも露出する岩盤にじかに載っているのに対し、西側では予想をはるかに上回って現地表から3mもの位置にあり、作業が難航したが、2月12日までに所期の目的を果たしうる位置までの掘り下げを終えた。この間、西側では高石垣構築直後とみられる生活面に伴う金箔おしの獅子口瓦が出土し、東隅部の岩盤前では高石垣構築直前までが旭川の流水が及んでいた状況が明らかになるなどの成果があった。

1月25日には小雨のなか本年度第1回目の発掘調査対策委員会を開催した。2月15日からは調査の主眼を南東の蔵付近に戻し、検出石組の延長の追求と併せて、さらに深部を掘り下げたところ、2月19日にはかねてからの石組の下層で別の石組を発見し、蔵が一帯での地盤のかさ上げに応じて建て替えられたことが明らかとなった。下層石組の延長追求と付近一帯の層位的理縦をを目指してさらにサブトレンチを掘り下げ、3月3日には下層石組のさらに下で金箔おし瓦を複数含む瓦溜りを発見し、宇喜多秀家期の生活面を捉えることができ、遺構として検出済みの蔵や弓櫓・櫓櫓は宇喜多期にはまだ成立していなかったことが確定的となった。

蔵の石組周辺の作業と併行して、2月22日から本段石垣東隅部に続く石壁想定部、それに蔵の東部で旭川に向かって張り出す弓櫓の櫓台頂部を掘り下げ、3月2日までに本段石垣の東に続く石壁の全貌と、弓櫓の礎石3個の遺存が明らかとなった。

以後3月18日までは下の段南東部の御蔵周辺を中心に、今年度に設定した各調査区でのさらなる掘り下げや細部点検に費やし、実測作業もベースアップを図ったのである。その間、3月6日には一般市民を対象とした現地説明会を開催して約150名の参加者があり、3月10日には本年度第2回目の発掘調査対策委員会をもった。

業者受けで別仕立ての埋戻しと併せて、3月23日からは央票櫓調査区での人力による埋戻しを開始し、3月26日に現場作業を完了した。

○平成11年度（本丸第Ⅶ次）【発掘面積830m²】

下の段の発掘としては三ヶ年度目である。下の段の南西部から西部を対象地として、11月22日に発掘作業を開始した。

最初の発掘区は西側の内堀に臨んで建っていた油櫓の櫓台に設定した。櫓台の東辺郭内側は土塁状となってその裾に石組が設けられているが、上墨内に埋め込まれた本来の東辺石垣を検出し、11月30日には七墨状の地形と裾の石組は近代のものであることが確定した。また、この櫓台南寄りの内堀側石垣には旧隅角を直線部に改造した跡ともみられるメジが観察できることから、櫓台内の対応位置を掘り下げたところ、12月1日に至って深部で埋没石垣を検出し、確かに内堀のプラン変更があって、油櫓はその改造後に成立したことが判明した。

12月2日からは、櫓台内埋没石垣の延長追求を目的に、油櫓東の郭内にもトレンチを設定したところ、礎石状の配石3個を検出した。そこは絵図では建物の記載がなく、層位と遺物の年代観からして絵図以前の建物を示す可能性が考えられるが、遺構保存の観点からその位置でのこれ以上の掘り下げは不可能となり、古い段階での内堀ラインの手がかりを得るために、トレンチを南北に伸ばすなどした。櫓台内に埋没した石垣の延長はけっこう発見できず、櫓台の東辺地で再び折れを持ち、しば

らくは北上したものと判断されるに至ったが、層位的にさらに古い段階には、この位置が確かに堀内であったことが判明した。この作業は、12月17日頃まで断続的に行なった。

いっぽう、12月2日には内堀石垣の折れ部にあたる修復橋の橋台の発掘にも着手しており、12月7日には北に続く近代の土壘に埋め込まれた橋台東辺石垣を検出、12月9日頃からは橋台頂部の礎石の発見があいついだ。

12月17日には中の段に建つ大納戸橋の橋台西辺石垣の基部の発掘も開始し、石垣に先行する古い段階はこの位置も堀内に当たることや、そうした軟弱地盤ゆえに石垣最下段の下に捨石を施した部分があるものの胴木の類は施されていないこと、石垣南隅には石垣構築から遅れる段階に水溜め用とみられる石組樹が付加されていることなどが判明した。

年内の作業は12月27日までとし、正月休み明けの1月6日からは、修復橋やその東方郭内の発掘と併行して、下の段南西隅の石墨上の発掘に着手した。ここは太鼓櫓と内下馬門の上屋南側が載った場所で、1月12日には太鼓櫓の東部で、1月14日には太鼓櫓と内下馬門境とみられる位置で、それぞれ礎石列を検出できた。

1月17日には、南側内堀に臨む直線部に建っていた春屋櫓の橋台部の発掘に着手し、翌18日には橋台の東辺とは別でその内側に、櫓の東辺跡が載ったとみられる石組を検出し、1月22日までに橋台の全貌を明らかにした。その1月22日には岡山市文化財保護審議会が、また1月28日には本年度第1回目の発掘調査対策委員会が開催され、それぞれ現地指導を仰いだ。

1月24日には発掘地を下の段西北部の馬場口門～春屋周辺に転じた。平成9年度の発掘では排土置場として掘れなかった位置である。1月26日には番所の東辺を示すとみられる石組を検出したが、近代の造成上が分厚く堆積し、当年度分の全貌を振り終えたのは2月7日で、同日からは西側の春屋に隣接する井戸の予想位置の発掘に着手し、2月10日には先ず井戸を取り巻く石組溝を、2月15日には上部を破壊された石組の井筒本体の検出に成功した。

2月16日には、再び調査区を南に転じて、鉄門下の本段石垣下にトレンチを設定して基底の岩盤の状況を明らかにした一方、春屋櫓の東に続く石墨の郭内側にもトレンチを設定して、ほどなく石墨石垣の根石や拵形石組を検出した。

また2月17日からは、いよいよ内下馬門の拵形一帯にも発掘区を設定し、2月21日には石墨石垣基底に沿う石組溝を、そして2月24日には待望の内下馬門の門礎をはじめて検出し、3月2日頃までを費やして、その延長の確認に努めた。

2月29日には史跡岡山城跡整備委員会が開催され、文化庁の本中真主任調査官も含めた諸先生の現地指導を受けている。

3月3日からは、修復橋の郭内で金蔵門の想定地に新たにトレンチを設定し、3月10日までに金蔵門が予想を上回る立派な石壁と漆喰張りの路面を備えていたこと、さらに修復橋側の石墨石垣の基底の状況や隣接して江戸初期に埋められて絵図には示されない素掘り井戸があることなどが判明した。

3月11日には一般市民を対象とした現地説明会を開催し、約150人の参加者があり、3月13日には本年度第2回目の発掘調査対策委員会を行なった。

3月14日からは、これまでに設定した各発掘区での細部点検と実測に併行して、トレンチの埋戻しに着手し、3月29日には当年度の現場作業を終了した。他の年度より埋戻しの期間が長いのは、埋戻しを人力に頼らざるを得ない石墨上の調査区が多く、別仕立ての業者受けによる埋戻しにできる部分

が少なかったためである。

○検出遮構の実測

検出遮構の実測は、1/20スケールの手書きとし、必要に応じて、1/10の部分図や平板測量による小スケール図を作成した。平面図の作成のためには、下の段を5つに別ったグリッドを設定し、任意に杭などを打ち、水糸を張って基準とした。グリッド割りは、第5図に示した通りで、平成11年度に単独市費事業として、これを国土座標に置きかえるための測量と基準点の設置を行った。将来は、中の段も含めて発掘データの国土座標での一元管理を目指しているが、諸般の事情から本報告書での標記は、発掘時のグリッド割りをそのまま用いている。

南東ブロックは除くが、国土座標への変換が計算可能なように、各グリッドと国土座標との関係を次に示しておく。

(乗岡)

西ブロック ○発掘グリッド：NS=0.00, EW=0.00m

　　国土座標：X=-148307.026

　　　Y=-36262.797

○発掘グリッド：S=34.00m, E=-1.00m

　　国土座標：X=-148340.984

　　　Y=-36261.784

○発掘グリッド：S=140.00m, W=-11.00m

　　国土座標：X=-148447.003

　　　Y=-36273.721

北ブロック ○発掘グリッド：NS=0.00, EW=0.00m

　　国土座標：X=-148332.318

　　　Y=-36186.535

○発掘グリッド：NS=0.00m, E=-26.00m

　　国土座標：X=-148325.243

　　　Y=-36161.515

東ブロック ○発掘グリッド：NS=0.00, EW=0.00m

　　国土座標：X=-148372.809

　　　Y=-36132.501

○発掘グリッド：NS=0.00, E=23.00m

　　国土座標：X=-148383.478

　　　Y=-36112.145

南ブロック ○発掘グリッド：NS=0.00, EW=0.00m

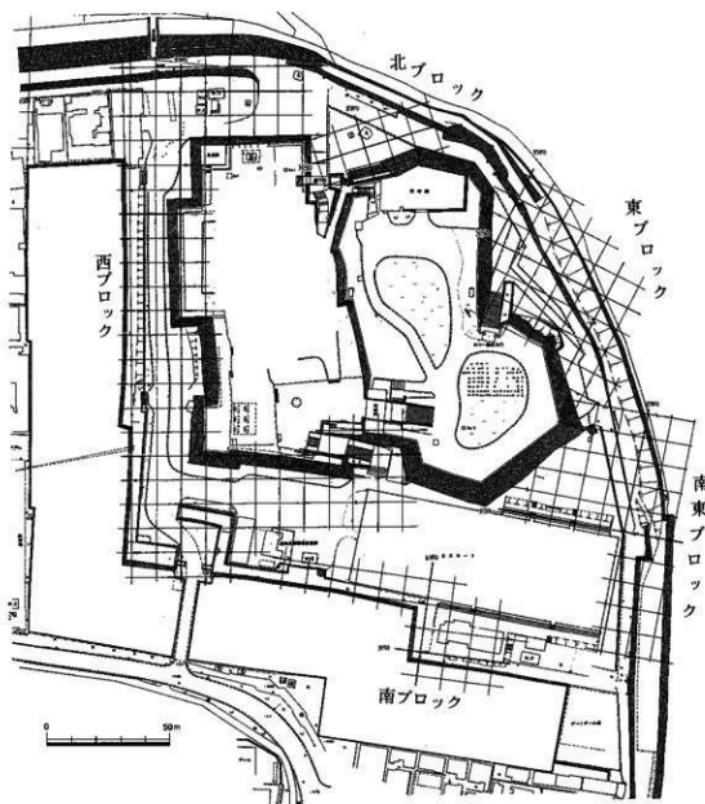
　　国土座標：X=-148542.199

　　　Y=-36165.893

○発掘グリッド：N=22.00, EW=0.00m

　　国土座標：X=-148520.494

　　　Y=-36162.359



第5図 下の段のグリッド割り (1/2000)

第III章 遺構

第1節 基本層序と発掘区割り

三ヶ年度にわたる調査で確認された遺構は、複雑多岐な内容を呈し、遺構間の関係について容易に理解を下しにくい部分が多くある。これは、城郭という遺跡の特性にもよるが、場所によっては予想を上回る数の遺構や遺構面が重層している事実に加え、先行する遺構が統く郭の改造時に破壊され、元の構造で残っているとは限らないこと、保存を前提とする調査の立場から下層位のものほど狭い範囲でしか遺構追求をなしえないことにも一因がある。したがって不確定な部分も多いが、調査時にはできる限り各構造の変遷や層位に対する認識を深めることに注意し、本報告の記述にも盛り込むよう心がけた。

今回の発掘は発掘区が広範囲に分かれ、層と層の同時代性が直接に確認できなかったり、場所ごとの様相の偏差が大きく、一塊の郭の変遷と対応させて基本層序が理解された中の段とは違って、下の段全体にわたる統一的な基本層序の提示は難しい。しかし、概ね次のように理解できよう。

まず、A層は現地表を形成する明治以降の造成土である。その最上部は戦後の公園に入れられたマサ土（花崗岩バイラン土）であるが、下部はガラス瓶などを含む戦後のゴミ埋立土や戦災の後片付による焼土や焼けた瓦を含む汚染土が主体である。厚さは、場所によって違い、例えば西側の金蔵門調査区付近では20cm内外であるのに、東側の坂下門調査区では300mを超えている。

その下のB層は、明治の城郭破却ないしは中学校地造成に伴う造成土で、暗褐色灰色の細砂を主体とする。幕末までに作られた大量の瓦や陶磁器を含み、檜など城郭建築のものとみられる壁や床張りの漆喰などを伴うことも多い。この層も厚さは場所によって異なり、みいだせない地点もある。

B層の下面、あるいはB層がない場所ではA層の下面で検出できた城郭遺構を、上層遺構とし、関わる埋上や堆積土をC層と呼ぶ。上層遺構は、基本的に明治維新時に機能を停止した遺構といえ、その内容や位置は江戸時代の各絵図とよく一致する。この遺構面の下のD層は、16世紀末から17世紀初頭までの遺物を主体的に含み、江戸時代中期・後期などの遺物は含まないから、この層に伴う初期の遺構は江戸時代前期前半まで遡ると判断できる。つまり、下の段の上層遺構は、中の段の上層遺構（第V期の遺構）に対応する。

D層は、16世紀末から17世紀初頭までの瓦ほかを多く含む、花崗岩バイラン土～暗褐色灰色微砂の造成土で、一部はその間に起きた旭川の洪水による堆積砂を含んでいる。場所によって厚さや内容がずいぶん異なるが、下のほか、層中にも複数の遺構面・生活面が確認できる場合が多い。それら、D層に関わる遺構を一括して下層遺構と呼ぶ。下層遺構は、16世紀末から17世紀初頭の間に造られ、その間に機能を終えた遺構で、中の段の下層遺構、つまり中の段の変遷過程でいう第II期・第III期・第IVa期・第IVb期の遺構に対応する。D層下面の生活面は金箔おしのものを含むコピキAの瓦を伴うことがあり、中の段第II期と対照させて考えられるが、中の段第III期に必ず埋まったとの保証はない。また、D層中の生活面に伴う遺構は中の段のどの段階と併行であるかは特定が難しく、厳密には中の段第V期初頭に及んでいた可能性なども残る。

なお、石垣は構築当初の対応生活面が下層の内にありながら、上部構造はいまも露出して石垣として機能している事がほとんどである。たいていの石垣の下部は、何時期かに分かれながらD層に埋め

られ、統いて上層遺構（C層）が展開し、さらに近代の造成土が入れられており、見かけの石垣高が次第に低くなっていることが判る。

E層は、中世後半から16世紀末までの土器・陶磁器やごく少量の瓦は伴うものの、金箔おし瓦など以降の瓦を含まない砂質・シルト質の暗色造成土や自然流水による堆積砂である。E層は、時期や性格によって細分できるが、下の段の何か所かではこの層によって埋められた素掘りの堀跡などが検出された。これらは、高石垣や瓦の大量使用以前の城郭構造といえ、中の段の最下層、第Ⅰ期の遺構に対応する。

以下の節では、地点ごとに検出遺構を記述するが、その順序は下の段南西部の大手筋にあたる内下馬門調査区、鉄門下調査区から始め、下の段を右回りに廻ることとした。したがって、記述には各調査区の発掘年度などは反映されない。

各調査区では、まず現状や絵図から窺える周辺の状況、それに検出遺構の概要を示し、個別遺構の記述では上層遺構を先に記すのを原則としたが、各層位間にわたる遺構の切り合い関係などは、そのつど言及するよう努めた。またトレンチの名称は、調査時の名称をそのまま用いた。それは、調査の次数（V～VII）に年度ごとの設定順番号を統一したもので、部位による掘り下げの到達度の違いやトレンチの拡大による一本化などから、平面図上では別のトレンチにみえても、同じトレンチ名をもっている場合や、その逆の場合がある。なお、遺構図で用いた細い一点鎖線は、検出ないしは精査できた遺構・生活面の限界範囲である。したがって、平面図ではトレンチの下端線や搅乱壙の輪郭を示すことが多く、発掘の対象地として掘り下げを開始した範囲（トレンチ上端）よりは内側に表現される。この線表現がアーバ形に走行する場合、たいていは保護を囲った樹木の根がある場所である。また、この線表現は立面・断面図では発掘区の底を示すことが多い。

発掘調査時に最も参考にしたのは元禄13年（1700）の袋書きがある『御城内御會図』（岡山大学池田家文庫蔵・整理番号T 5-1）で、以下では元禄絵図と略称する。これは、本丸全体の縄張りや建物の柱位置などが極めて詳細に示されたものである。そのほか、主に中の段を描いた『御書院御絵図』（岡山大学池田家文庫蔵・T 5-22）も、下の段の南部と西部の表現があり参考とした。これは、元禄絵図よりも新しく、寛保4年（1744）をはじめ安永6年（1777）などの注書きがあり、1800年代に入っても貼紙などが加えられたとみられるもので、寛保絵図と略称した。岡山大学池田家文庫には、本丸本段・中の段の建物平面を示した『御本丸御絵図』（T 5-19）や無題の絵図（T 3-344・T 3-70）などの絵図もあり、下の段の状況も僅かに窺える。また、『牙城郭櫓實測圖』（岡山大学池田家文庫蔵）は、本丸内の城郭建物の俯瞰や柱配置を示した数少ない絵図で、下の段の櫓や城門の一部も収録されていて大いに参考になる。さらに、岡山城全体を記した絵図も城郭構造を中心に本丸の状況を示すものがあり、特に寛永9年（1632）直前の状況を示した『岡山古図』（岡山大学池田家文庫蔵）や『正保城絵図』（国立公文書館蔵・岡山大学池田家文庫蔵）は注目される。下の段の南と南西については、内堀の外から写された明治初期の占写真（原版は岡山大学池田家文庫蔵）も参照できる。なお、場所や建物の名称は、先の絵図類のほか明治24年（1891）の木畠道大著『岡山城誌』の記述によった。

第2節 内下馬門調査区

1. 概要

下の段の南西部、内堀に臨む位置にある。内下馬（内目安）門は本丸大手の櫓門で、その上屋は西に続く太鼓櫓や南に組み合う高麗門などとともに、明治12年（1879）に本丸内で行われた岡山民立博覧会の直後に取り壊された。一帯ではその後も中学校の校門が設けられ、鳥城公園となった現在は門扉こそないが、正面玄関としての役割を果たしている。

現況は、枠形を区画する見かけ高3.5mほどの石垣だけが観察でき、枠形内は園路を除いて樹木が繁っている。枠形の南には園路左右に割石積みの小石垣があり、城門石垣に取り付くが、これが校門跡である。その南は枠形からの平坦地が内堀に向かって台形に張り出しが、その形を区画する石垣の木体部分は城郭時代の構造を保っている。内堀の南対岸へは近代になって渡り土手が造られたが、江戸時代は内下馬（目安）橋と呼ばれた木橋が架かっていた。

絵図や古写真などを参照すると、目安橋の橋詰めには土崩に挟まれて南向きの高麗門があり、枠形の奥は、内下馬門の上屋の櫓部が南側石垣から北側石垣南西隅にかけて渡され、階下に枠形に向かって東に開く門扉があった事が判る。南側石垣上には、内下馬門上屋に統いて西に三階櫓の太鼓櫓があり、さらに北に続く石垣上には多門櫓があって、大手筋の防備を高めていた。いっぽう、枠形の北石垣や東石垣は、枠形側に上層はあるが建物の姿はない。内下馬門に入った西正面には絵図に番所が描かれているが、そこは公園管理のためのゴミ置き場となっていて、発掘できなかった。

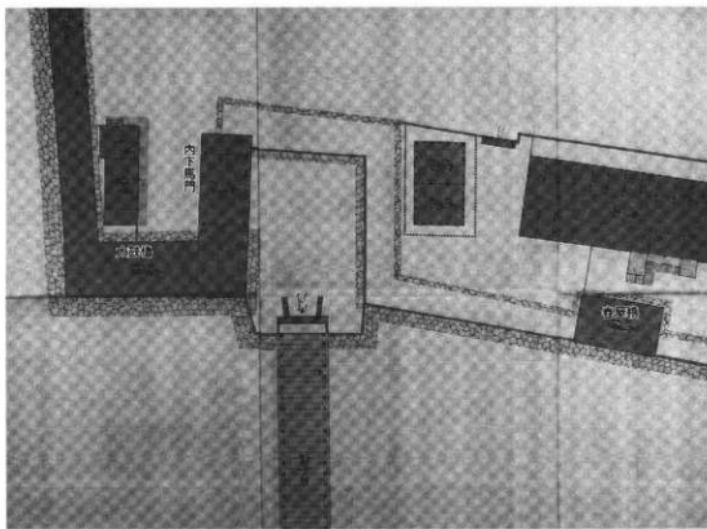
枠形内では現地表下0.7m前後に江戸時代の遺構面が埋め込まれており、西寄りで内下馬門の門櫓6個を、石垣に沿う位置で石組溝を検出した。この溝は絵図には示されず、雨水を内堀に流すためのものである。枠形の南側では、高麗門の控柱用とみられる礎石1個が残る。南石垣の頂部では、表上下まもなく太鼓櫓や内下馬門上屋に関わる礎石などを検出した。

2. 内下馬門枠形

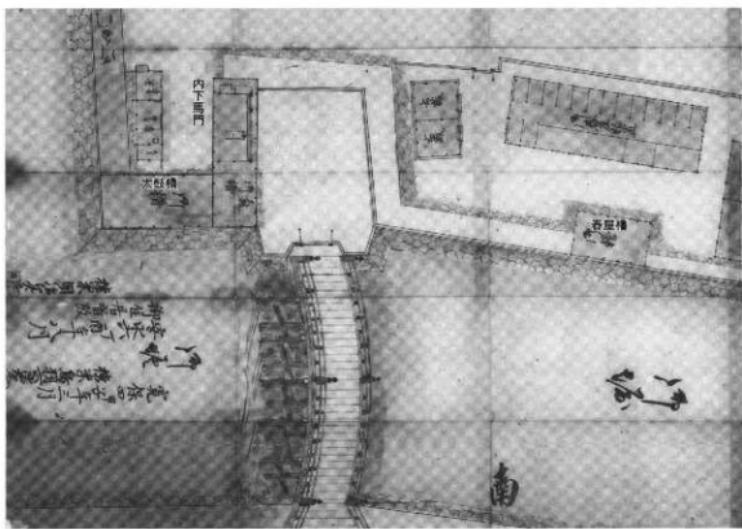
a. 内下馬門の門櫓

元禄・寛保の両絵図に示された内下馬門の門廻りの柱は、西辺の門扉ラインに3本、北辺と南辺に限り西奥の背後に各2本の計7本があり、うち6本分の礎石を検出した。各礎石の上面は、標高4.0m内外によく揃えて配置されている。北列の西端礎石の場所は、園路を確保するために掘り下げができないなかったが、これも元の位置で残っている可能性が強い。礎石は総て花崗岩で、上面を平滑に調整しているがホゾ穴などは観察されず、側部は自然面を残して、矢穴はない。石材の長辺はいずれも1.0mを超える。門扉が付く東辺の北から2石目は少なくとも1.7mはある。本丸大手門にふさわしい大きさの礎石である。東辺南端の礎石には、上面の高さを揃えた石材が南石垣との間に配されている。また南辺西端の礎石の上にはあたかも柱本体を囲むように石組がある。少なくとも城門の最終段階には、柱の西に土を入れられて礎石面より0.3mあまり高くなり、柱に土砂が接するのを防ぐために設けられたものとみられる。

門扉があった礎石東辺部での南北石垣間の距離、つまり復元される門の長さは9.9m（一間6尺5寸=197cmとして5間）である。南北石垣とも頂部はほぼ本米の高さを保っており、礎石面からの高さは南石垣側で4.0m、北石垣側で4.4mを測る。この数値は、ただちに門の軒下高を示さない。ちなみ

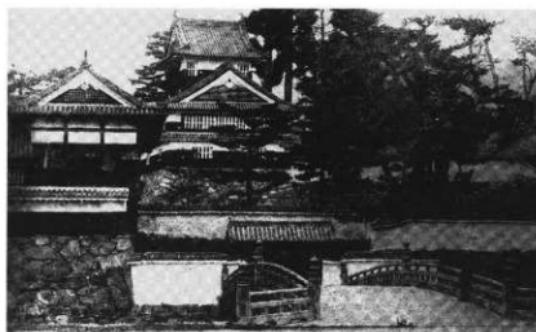


1. 御城内御絵図(元禄)



2. 御書院御絵図(寛保)

第6図 内下馬門周辺の絵図 [岡山大学池田家文庫蔵]



1. 南からみた目安橋と内下馬門(左)

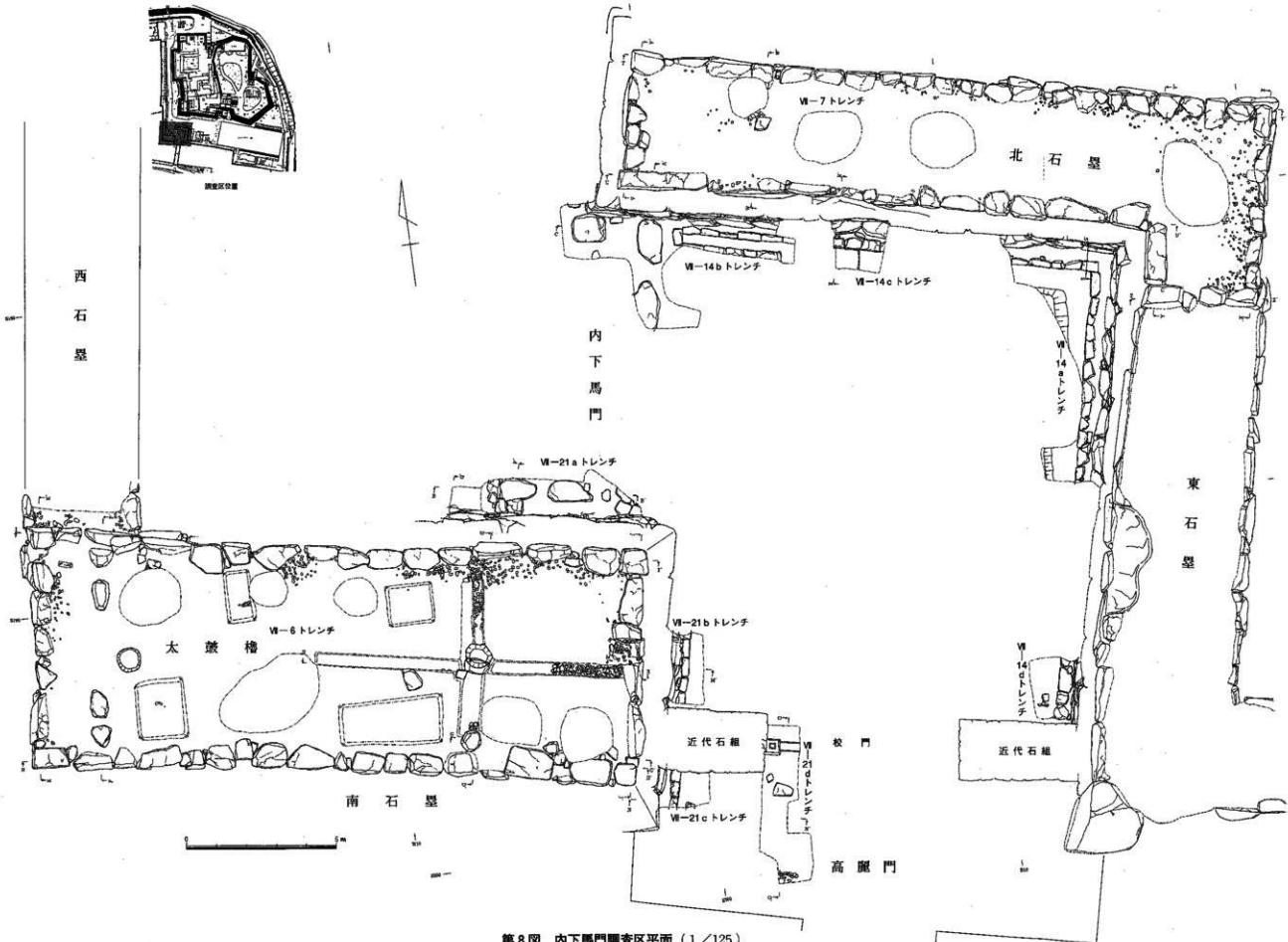


2. 南東からみた内下馬門(右)と太鼓櫓



3. 太鼓櫓(右手前)と多門櫓

第7図 内下馬門周辺の古写真 [岡山大学池田家文庫蔵]

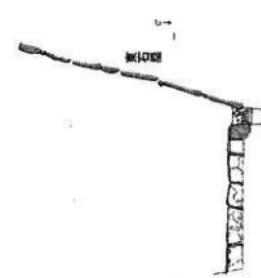


第8図 内下馬門調査区平面 (1/125)



1. 東邊門壁断面

2. 南邊門壁断面



3. 北邊門壁と石組溝立面

第9図 内下馬門 (1/100)

に、古写真に写った内下馬門の門前の庇は、南石墨の天端からさらに太鼓檜での1階相当ぶんも上に付く。各礎石とも広い上面のうちどの部分に柱が載っていたかは、摩耗痕などからは観察できなかつたが、遺構平面図に方眼を切ったトレーシングペーパーに重ねて検討してみると、一間6尺(182cm)の方眼より6尺5寸(197cm)の方眼がのほうが合いそうで、そうすると東西方向の各柱は心々各1間(197cm)、門扉ラインの南端柱と北端柱は心々4間半(887cm)とみられる。門扉左右の門柱心々は3間半(690cm)ないしは3間(591cm)で、むしろその中間あたりの方が落ち着きがよい。絵図では上の二階檜部の柱が門柱の外側に平行して等間隔に描かれているが、その柱間を基準にすると、左右の門柱間は、元禄絵図ではほぼ3間分、寛保絵図では3間半に読み取れ、絵図の作者の理解に混乱を生じさせるほど半端な数値が実体であった可能性もある。

北辺の門檻と石墨との関係は、この内下馬門を最も特徴づける。つまり、北辺の門檻は全体が西に偏って、絵図に表現されている状況にもまして附上の檜部の北石墨への架かり方が浅かったことになる。門扉ラインの北側延長線は北石墨西小口石垣頂部の僅かに東に過ぎず、門檻石の西側2つ目は中心が石墨小口石垣と揃った位置、木発掘の西端礎石に至ってはさらに1間も石墨から離れた位置となる。つまり、内下馬門を潜った者は、石墨の隅ではなく、にわかに路面から立ち上がる門柱をコーナーに北に折れ進んだことになる。そもそも門檻北辺は石墨西端より東に収まって、上屋北辺は完全に石墨上に載るのが合理的と思える。そうするためには、北側石墨はあと3mは西に延びていなければならなかつたのに、事実はそうなつていなかつたのである。

以上は、檜部を水平に渡すためには同高であるに越したことがない石墨頂が南石墨と北石墨で40cmもの段違いをなすことや、後述する南石墨上での渡檜部東壁が東小口石垣より東にはみ出していた可能性などと合わせて、内下馬門に関わる変則的な構造で、土台をなす普請構造が上の作事面の建物と完全には整合していない状況とも言える。

b. 高麗門

内堀への張り出し部の西寄りにⅦ-21dトレンチを設定して掘り下げたところ、江戸時代の生活面に作って、長辺0.6mほどの礎石とみられる石材を検出した。太鼓檜や内下馬門檜部の南辺が載る内堀石垣頂部のほぼ東側延長線にあり、その位置関係から絵図と対比すれば、高麗門西側の控柱に相当する。南に予想される門扉西脇の主柱の礎石はトレンチの内では発見できなかつたが、第11図4に示されるように検出礎石から南2m程を中心に搅乱が及んで小石材が散在し、礎石の抜取り跡の可能性がある。高麗門の東側礎石については、烏城公園の石碑などがあつて発掘できなかつた。なお、Ⅶ-21dトレンチの北寄りでは、先の礎石より上面を0.5mほど高く据え、ホゾ穴を持つ中学校の門檻を検出した。

c. 石組溝と石墨石垣基部

石組溝は二系統ある。北側のものは内下馬門の門扉ライン北端礎石から東に0.7mの位置から始まり、北側石墨と東側石墨に沿って延びている。南側の溝は発端部を発掘できていないが、北の溝と同じく門檻のすぐ東とみられ、南石墨東小口に沿って南に延びている。両溝の終点である内堀への吐水口は、張り出し部石垣の近代の重上げによって閉鎖されているが、溝は石墨角に従つて折れ、張り出し部の付根に抜けていた可能性が高い。

両溝とも石材は、随所に矢穴を残す花崗岩の割石で、多くが方形に加工されている。その長辺は45~85cmで、これを溝の軸方向に取り、次の長辺は40~50cmでよく揃っていて、溝の高さに取り、短辺は

25~45cmで背後の厚みにとる。つまり石材を垂直に立てることによって、側壁は1石だけで造られるが、その面は極めて平滑で、垂直である。内下馬門の門前側では、石材の方形度が高く、溝の側線も整った直線をなす。溝の内法は30~35cmで、1尺に設計されたものとみられる。底は土床で、塗喰張りはない。これまで中の段や下の段で発掘した石組溝のうちで最も整美である。

両溝とも、石垣側の石材は完全に残っているが、広場側は多くが抜き取られている。溝を埋めるのは暗褐灰色細砂・微砂で、そのまま枠形全体を0.5mほど重ね上げする造成土となっている。この一連の上層から膨大量の瓦が出土した。明らかに明治の城郭破却時の堆積で、石材は建物解体の直前に城外に持ち去られたのである。溝の内外から出土した瓦は、位置からして内下馬門の上屋や太鼓橋に葺かれていたものを主体とするに違いない、その製作年代は、16世紀末の宇喜多秀家段階のものから幕末のものまで含まれるが、圧倒的に17世紀前葉の前田氏段階のものが多い。

溝に石材を据えるための掘り方は、石垣石垣との僅かな隙間で第9図3と第13図3の土層断面のように深さ20cmほどに観察でき、裏込石は伴わない。石垣石垣の最下段下角は高さ3.6m前後であるのに対し、溝の石材下面是3.45m付近に達し、10~15cm深いことになる。石垣石垣の最下段下角から下方20cmほどまでは、黄褐色バイラン土と暗灰褐色微砂による互層が堆積し、枠形を造成し石垣を築くための置土と判断され、石組溝の掘り方はこの層中には収まることになる。造成土のさらにはグラウイ化した微砂・シルトが続き、軟弱な場所を埋め立てて、樹形や石垣が造られたことが判る。石垣最下段に隣接する造成上にはこぶし大の円礫が散在するが、胸木や捨石などの特別な下部構造はなさそうである。

石垣と石組溝の前後関係を考えると、石垣最下段に密着する造成土を溝の掘り方が切ることから、溝が遅れることは間違いない。しかし、その前後関係は工程上のもので、両者は当初から一体のものとして計画的に造られた可能性が高そうである。なぜなら、排水構造は枠形当初からあって然るべきものであるし、石垣石垣構築当初の生活面は、石垣基底の埋まり方から、溝の掘り込み面とするには低く過ぎ、溝石材の上面の高さで整合する。また、石垣が上まで完成した後の時期に、あらためて石垣の根をここまで深く掘ることは、石垣保全のために避けるべき行為であったに違いない。さらに、この石組溝は石垣の根固めとしての役割も期待できる位置と構造と規模をもち、石垣と同時に造られたと考えてはじめて合理的に説明できる。

石垣石垣基底の高さや前面造成土の堆積は、南側石垣でもほぼ同様で、内下馬門内のⅦ-21 a トレチ西壁を示した第11図7では、a面が明治の破却直前の地表面、標高4.0m前後のb面が石垣構築当初の地表面である。またc面は、石垣石垣を築くために花崗岩バイラン土で造成された工程上の面で、ここでの石垣最下段下角の標高は3.55mである。d面以深は灰青色微砂・シルトが堆積する。

d. 樹形広場

枠形内の当時の地表高は、石組溝の上面高が参考になる。第9図3に示されるように、内下馬門前では標高3.95mで、門壁上面より5cm低い。枠形北東隅では3.85m、南東隅近くのⅦ-14 d トレチで3.75mである。また、南西部のⅦ-21 c トレチでは3.85mある。樹形広場は西から東へ、また北から南に向かって緩やかに傾き、その高低差は最大で20cmほどあった事になる。

広さをみると、高麗門と内下馬門と各石垣石垣によって閉鎖される空間は、東西13~15m、南北22~23mの長方形で320m²ほどに計算できる。また石組溝の存在による損失を差し引いて、事実上の広場の面積を見積もると275m²ほどとなる。

3. 南石壘

a. 石壘上

石壘の天端は、外形で東西20.1~20.6m、南北7.4~8.0mある。西には北からの石壘が取り付くが、その天端より1m程高く、壇には石組がある。各辺とも半ばが括れ氣味で、いわゆる輪取り氣味になる。天端石がほとんど残っていて、その標高は石壘各辺ともほぼ8.0mに揃っている。ただ、先の平面での輪取り傾向と関連してか、角部が半ばに対して僅かに高い傾向がある。

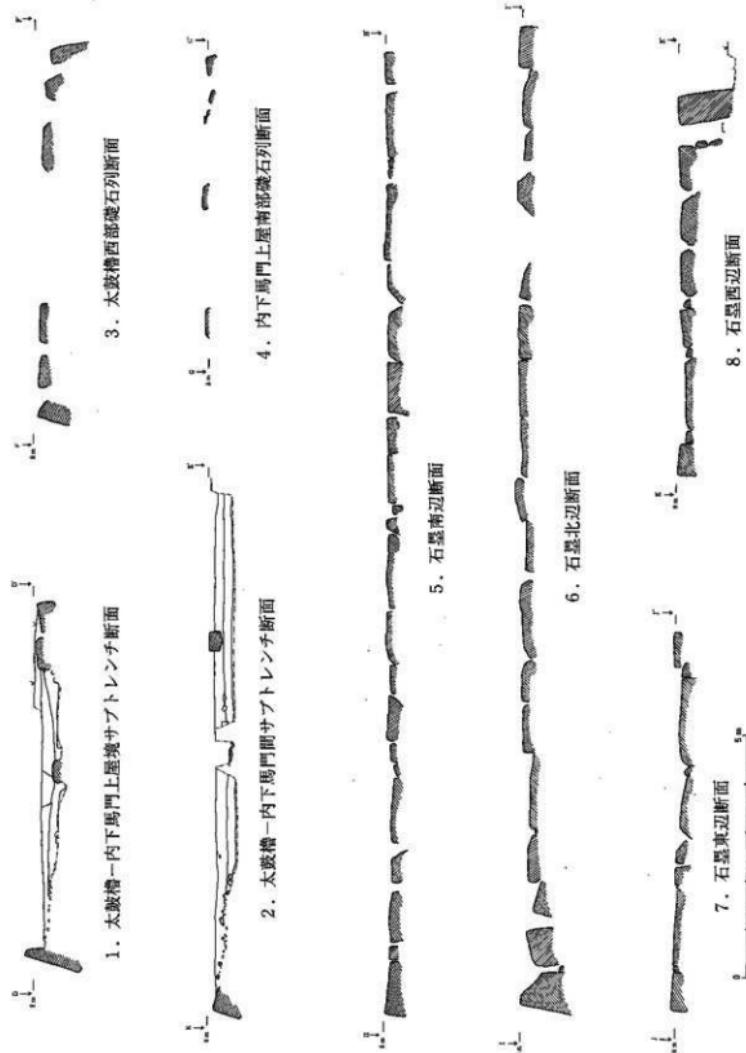
石壘東辺から5.5mほど西は、内下馬門の渡櫓部と太鼓櫓の境で壁が南北にあったとみられる。破却前にこの両建築を南の内堀側から写した古写真（第7図1）があり、その境界線は石垣を手がかりに特定できる。その想定線上、石壘南辺から1mほど北で長辺65cmほどの礎石とみられる石材を検出した。自然石に近い花崗岩の扁平材で、上面の標高は7.95mで石壘の天端とほぼ揃っている。その北の石壘中軸附近では、ほぼ同じ高さに直径0.9mほどの土壙が発見された。この土壙は埋土中の遺物細片からして近代に掘られたものであるが、礎石の抜き取り穴の可能性があり、2mほど西で発見された転石が据えられていたのかもしれない。南の礎石との心々距離は280cmほどである。さらに、その土壙から僅かに南にずれた深い位置で、長辺80cmの礎石状石材を検出した。上面の標高は7.6mで、南の礎石に対し40cmも深いが、仮に組み合つとすれば心々は250cmである。北辺側では、礎石を発見できなかつたが、石壘の裏込円礎とは別に各礎が散り、南辺と同じような位置と高さで、礎石があつた可能性が強い。真ん中の上壙と石材の評価は難しいが、いずれにせよ、石壘直上とは別に3つの柱が建っていたとみられる。なお、南の礎石の東2個所には、上面が平滑な石材が配されており、礎石であった可能性もある。

石壘の西寄りでは、南北に4つの礎石を検出した。石材は最大のもので長辺1.0m、やはり花崗岩で上面はかなり平滑であるが、全体として自然石である。上面高は、石壘天端石とほぼ一致する。柱を復元的に考えると、西辺石壘上に想定できる櫓の西壁から、ちょうど1間（197cm）西で平行し、櫓の南壁から、半間、半間、2間、半間の間隔で並ぶ。礎石列の西が太鼓櫓内の廊下となっていたとみられる。礎石列の中央は、もとから礎石がなかった可能性が強い。また、礎石列中央の東に近代の土壙があるが、礎石の抜取り痕かどうかは判らない。

石壘上では、以上その他には礎石やその抜取り穴を発見できなかつたが、未知の礎石があった可能性は残る。検出できた礎石の位置は高く、もし同高に礎石があったとしても抜き去られたとなれば、その痕跡は草木の根による腐食や近代の搅乱と競合して、すでに消滅した可能性もあり、特定が困難な状況となつてゐる。

b. 石壘上の建物の問題

建物を考えると、ここでも1間を6尺5寸（197cm）とした場合が最も合理的に理解できる。まず太鼓櫓の南北方向をみると、南辺石壘と北辺石壘の上に壁を想定した場合、その心々距離は基本的に3間半で、元禄絵図・寛保絵図とも内下馬門との境界ラインが3間半に示されるのと一致する。ただし、その境界ラインで石壘内に3本の柱が建つことは絵図の通りとしても、南壁を起点に1間間隔で並ぶ状況は、中央の柱位置として土壙・石材のいずれをとっても、検出遺構の柱間は長短があつて一致しない。いっぽう、太鼓櫓の西壁は、元禄絵図のみに柱表現があり3間で示されるが、恐らく3間半の誤りである。付近の石壘北辺は北に膨れる傾向があつて実体は4間ぶん近く、発掘礎石列での南壁から3間半目は石壘上ではなく、その南の礎石の方である。したがつて、太鼓櫓と北の多門櫓の建



第10図 内下馬門南石墨 I (1/100)

築境は、段石組の位置と嚴密には一致せず、多門櫓からみた場合、太鼓櫓の數十cm手前に段があった事になる。この余剰帶は、一段低い多門櫓から太鼓櫓に入るための階段もしくはスロープ部として活用されたに違いない。つぎに、太鼓櫓の西壁を起点に東西方向をみると、発掘礎石列が1間目にあるが、内下馬門との境界礎石ラインまでは7間半弱で整数とはならず、不自然な数値である。しかし、元禄絵図の南壁と寛保絵図の南北壁はまさに7間半程に示されて、実体と合っている。

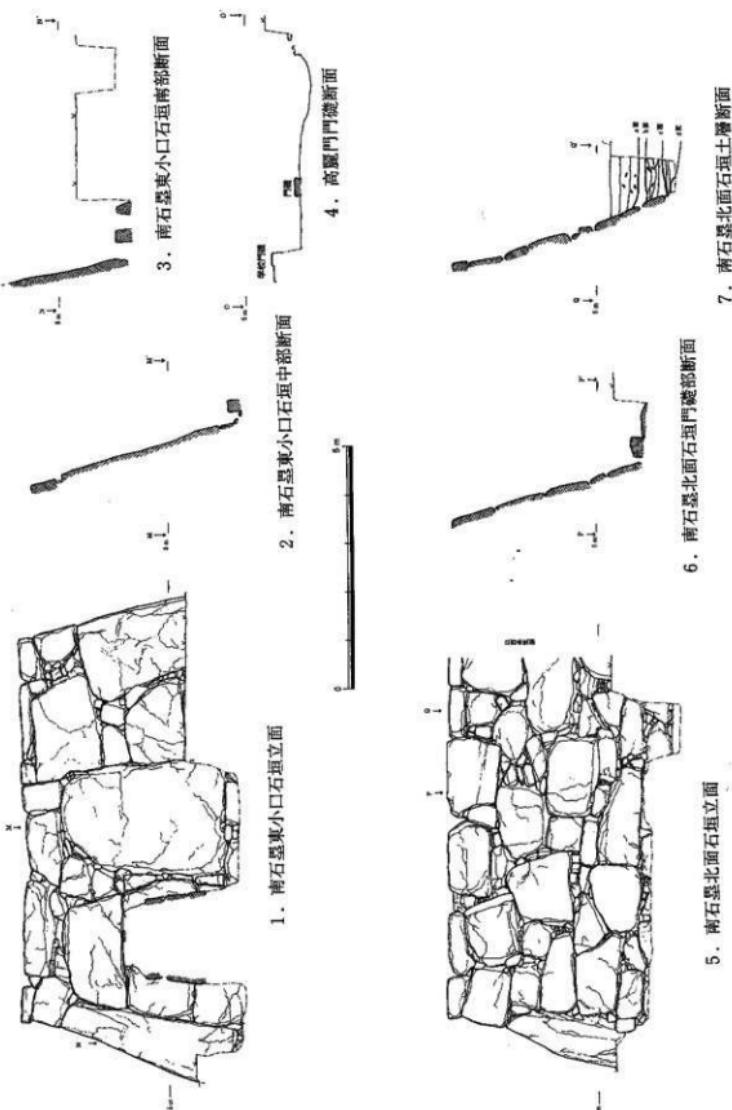
問題は、もはや不動と考えられるこの境界礎石ラインを基準とした場合の、内下馬門渡櫓部の東西幅である。これは両絵図とも3間で示される。石墨の東小口石垣の直上に壁を考えた場合は、礎石ラインから520cm程の位置が適切であるが、一間6尺5寸の3間は591cmであるから、その位置は石垣上面端からさらに40cmほどはみ出してしまう。しかし、事がそうであった可能性が高い。真南からこの部分を写した古写真（第7図1）では、内下馬門渡櫓部の南壁上部に露出する柱が確かに3間等間隔に並んでいる。その下部に注目すると、石墨南辺の石垣上には、土壇状に見える壁が西の太鼓櫓から続いて、石垣の東端角できちっと終わっているのに対し、内下馬門渡櫓部の南東角柱は、それより東に降りている。そのみ出し幅は石垣の石材の大きさから換算すれば、まさに40~50cmである。

にもかかわらず、石墨西端の太鼓櫓の壁上想位置を起点に、石墨東端石垣上で壁が載るに最適な位置までの距離を割り出せば、10間（1970cm）という数値が見事に浮かび上がる。つまり南石壁は、もとは南北3間半、東西10間ぶんの建物を企頭に造られた可能性がある。太鼓櫓と内下馬門渡櫓部が同時に計画的に建てられたのであれば、両者は整数の間数で分けあって、境の柱も整数位置に建てられてもよかったです。古写真に写った建築意匠の年代感とは逆転するが、両者の建築時期が違うとした場合、石墨によく整合する太鼓櫓より、石墨に対して無理がある渡櫓部の方が新しく考える要素が多い。石墨上の東西10間建物は古写真に写った太鼓櫓から続く土壇状の壁の存在からも象徴的であるが、渡櫓部は石墨上にいっぽいにあった太鼓櫓を後から割り込んで建てられたもので、太鼓櫓の東部1階を生かして、それに被せたものであったのかもしれない。そうなれば、太鼓櫓東辺の礎石ラインは、太鼓櫓当初のものではなく、渡櫓構築に伴う太鼓櫓の改造時に渡櫓側の事情で新たに設定されたものとして、位置や柱間の不自然さも説明しやすい。なお、渡櫓部が太鼓櫓よりも後に建てられたとすれば、石墨構築当初には古写真とは異なった内下馬門の前身建築があったことになる。

c. 石墨石垣（第11図）

郭内側の石垣の高さは、最下段下角まで掘り下げたV-21aトレント西で4.5mあるが、構築当初の生活面は基部を0.4mほど埋めるため、その時点での見かけの高さは4.1mである。立ち上がりの傾斜は平均的にみて75度、東小口や北辺でも小口寄りでは直線的であるが、北辺の西寄りでは上2石ほどの傾斜が強まる。いっぽう内堀側の南辺石垣は、下半に水が溜まっているが、内堀の浚渫時の調査所見から最下段下角の標高が-0.8m付近に想定できるから、高さは8.8mと見積もれる。堀底からの断面図は作成できていないが、平均的にみた立ち上がりは70度以下で、反りを持つ。

郭内側の石垣は3~7段積みで、石材は花崗岩が主体である。矢穴や明確な割り面は観察されず、いっけん野面であるが、少なくとも石垣面側はかなり平滑で、一部は粗いハツリ調整が施されている。最大の特徴は、石材の見かけが大きく、それを石材自身の大きさに加え板状のものを立てることによっている点である。東面中央の鏡石は高さ3.8m、幅2.3mの大きさをもつが、これは横に置かれたとみられる最下段の築石3個に載っている。石墨東南角や東北角も巨大な角柱石を立てている。なお、内下馬門内に当たる石墨北辺石垣では、石材がやや小形となる。間詰石は築石と同材質で、比較的まと



第11圖 內下馬門南石壘Ⅱ (1/100)

まる個所もあるが、築石同士の擦り合せが緻密なため、小形のものが日につく。

深部の裏込は不詳であるが、東面石垣背後のサブトレーンチでは、薄い造成土下にこぶし大もしくはそれ以下の円礫が、石垣面の背後4.0mまで及ぶ。裏込端は、やや大きめの円礫が二列、石垣に平行して並べられていた。少なくとも石墨の上部は、石墨全体に石材が充填されている構造ではない。

4. 北石壘・東石壘

a. 石壘上

北石壘の天端は標高8.1～8.55mで、内下馬門櫓部が載る西小口側が高い。その外形は東西21.5m、南北の基本幅が4.3～4.5mで、東側は同高的天端が東石壘側に2.5mほど続き、段差1.0mほどの石組で東石壘の天端と繋がれる。北石壘天端の東辺長は6.8m。内下馬門の櫓部が載った西小口付近では、礎石を発見できなかった。西辺から4.3mほどの位置で、長辺50cmほどの礎石状の花崗岩石材1個を検出したが、性格は未確定である。

東石壘の天端は、平均的に標高7.2mで、南端のみが立石材との関係で7.45mまで達する。天端の外形は北石壘との境の段石組下端を起点に南辺まで約17m、東西幅は4.0～4.4mである。

b. 石壘上の建物の問題

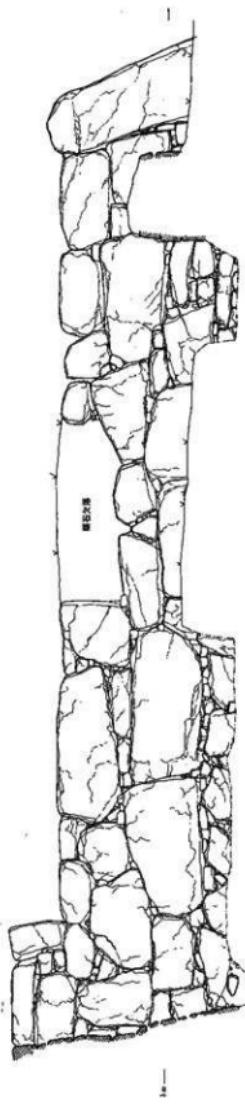
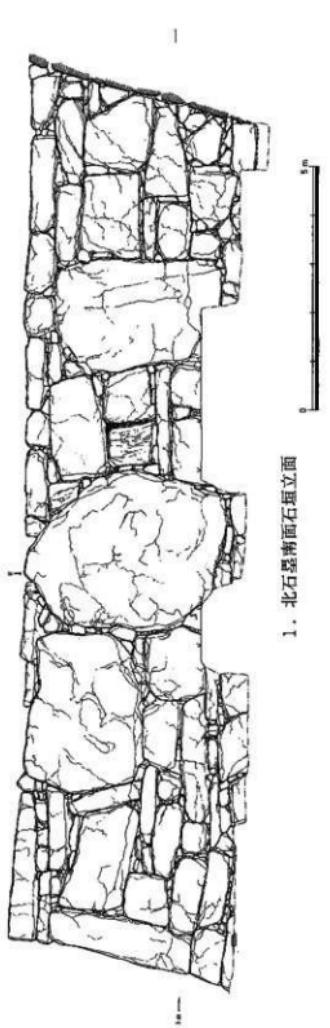
絵図や古写真では、北石壘と東石壘の上にあったのは、西端の内下馬門櫓部と拝形側に立つ土塙だけである。しかし北石壘は、東石壘に対して石組段を隔てて高く、またこの拝形で最も高い土台であることからすれば、少なくとも石壘構築時の構想には建物が急須におかれたかもしれない。北石壘の南北幅は、1間6尺5寸で幅2間の多門状の櫓を建てるのに理想的な幅である。この幅の櫓は、岡山城本丸の各所に実在していた。また、北石壘の東西長は、仮に石塀いっぱいの建物を考えると10間半強で半端となるが、石壘東辺を起点に10間の建物を考えると、石壘西端にできる余剰部には、絵図や古写真に示された形での内下馬門櫓部がなんとか載って共存可能であるし、内下馬門の前身に関わる構造が載ったとの想像もできる。北石壘上の仮想10間建物の西壁は、南石壘で仮想した初期の太鼓櫓の東壁とはほぼ一直線に並び、石壘下の発掘門扉ラインはそれより僅かに西奥で平行することになる。

c. 北石壘南面石垣（第12図1）

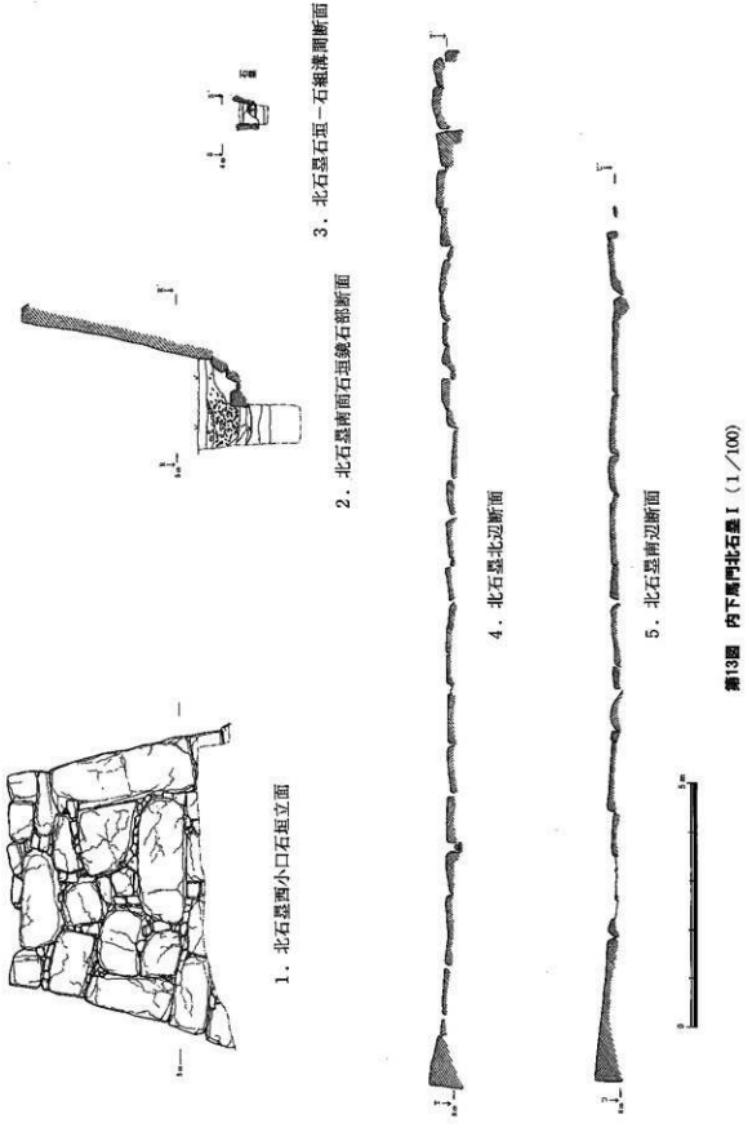
高さは、最下段下角まで掘り下げたV-14aトレーンチで4.65mある。立ち上がりの傾斜は75度前後、上部に反りをもつ部分がある。3～10段積みで、石材の特徴は、基本的に南石壘と共通する。

南石壘、あるいは同じ北石壘・東石壘でも背面側の石垣以上に大きな石材を含み、拝形正面への巨石配置に強い意識が働いていた状況が読み取れる。中央には、岡山城で最大の巨石が組み込まれている。この鏡石は、見かけの高さ4.1m、幅3.4mあるが、第13図2に示されるように天端付近での厚みが30cm、石垣中位の間詰石が抜けた部位での厚みが40cmほどで、石材中央の最大厚こそ計測できないが、板状とみられる。石垣構築当初から、ここに鏡石を据えることを計画していたようで、石垣最下段と二段目を周囲より前に築き、それを上台に背後に立て掛けるように鏡石を固定している。その結果、石垣最下段石材は石組溝の石材と完全に密着する。土台部の張り出しにもかかわらず、鏡石の下端線は周囲の3段目より奥に引き気味で、そのまま石垣頂をなす鏡石の上端は周囲と一致するから、鏡石がなす傾斜は88度となり、周囲の石垣よりも垂直に近づいている。この西と東にも、長辺3mを超える鏡石があるほか、西端の石壘角では、長さ3.0mの巨人な角柱石が立てられている。

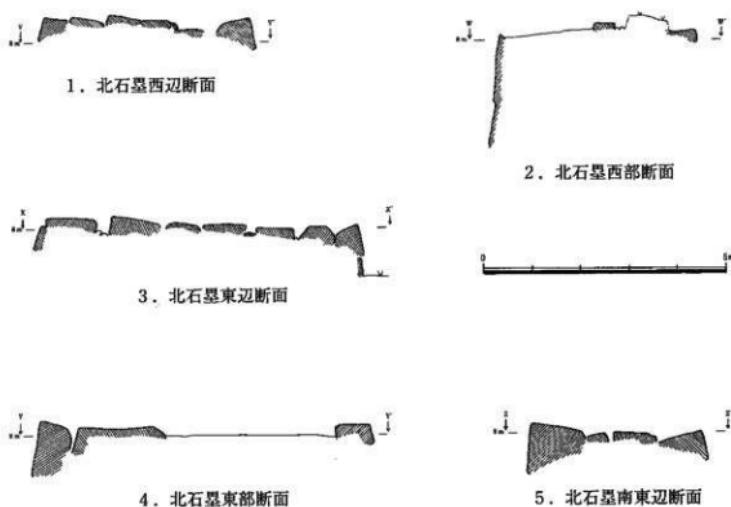
一般部の築石は、見かけが横に長く薄いものは確かに横積みであるが、四角いものは、間詰石の脱



第12圖 内下馬門北石壁、東石壁石垣 (1 / 100)



第13圖 內下城門北石壁 I (1./100)



第14図 内下馬門北石垣II (1/100)

落部で観察すると立石が多く含まれる。これは樹形内外の他の石垣石垣と同じであるが、最大の特徴は、樹形内外のどの石垣石垣よりも築石の横メジが水平で整っていることにある。先の4つの巨石は、大きいだけでなく、この横メジを崩す存在として際立っている。ここでの横メジは巨石を浮き立たせる演出材料として、意図的に強調されたかにも思える。これだけの巨石を組み込みながら、その間にメジを通すのは、他の石垣でメジを通すこと以上に至難であったに違いない。この石垣は、まさに見せるための石垣であるが、同時に最も手間をかけて造られた石垣といえる。

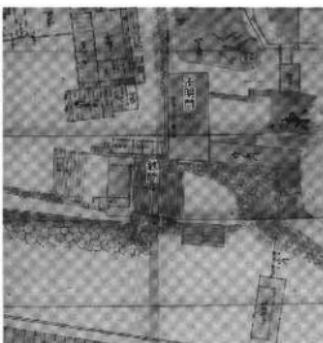
d. 東石垣西面石垣 (第12図2)

高さは3.5mほどである。顯著な鏡石はみあたらぬが、北石垣南面、南石垣東面と並んで、全体として築石が大きい。見かけは方形で横積に思えるものが主体であるが、やはり立石を含む。南端にて掛けられた角柱石は、南石垣東小口の南端角柱石と、高麗門部を挟んで組になり、内堀側からの視覚的效果を高めている。

第3節 鉄門下調査区

1. 概 要

下の段南部の中の段・本段側を占める。下の段から城の中枢に向かう際の大手筋で、いまも観光登城路となっている。中の段石垣と本段石垣が北に括れ、そこから西に階段が登るが、その上寄りの踊り場にあったのが鉄門である。上屋は明治維新後に取り壊されたが、門礎の一部が露出する。階段は豈島石製で、江戸時代の構造を引き継ぎ、補修を受けながら現在に至っている。階段の下は広場となるが、その南にも低い階段があり、全体として梯形状となるが、絵図では城門は示されていない。発掘の結果、広場部で地山の岩盤を検出したほか、その前面に古い段階の堀の跡を確認した。



第15図 鉄門下周辺の御書院御絵図(寛保)

〔岡山大学池田家文庫蔵〕

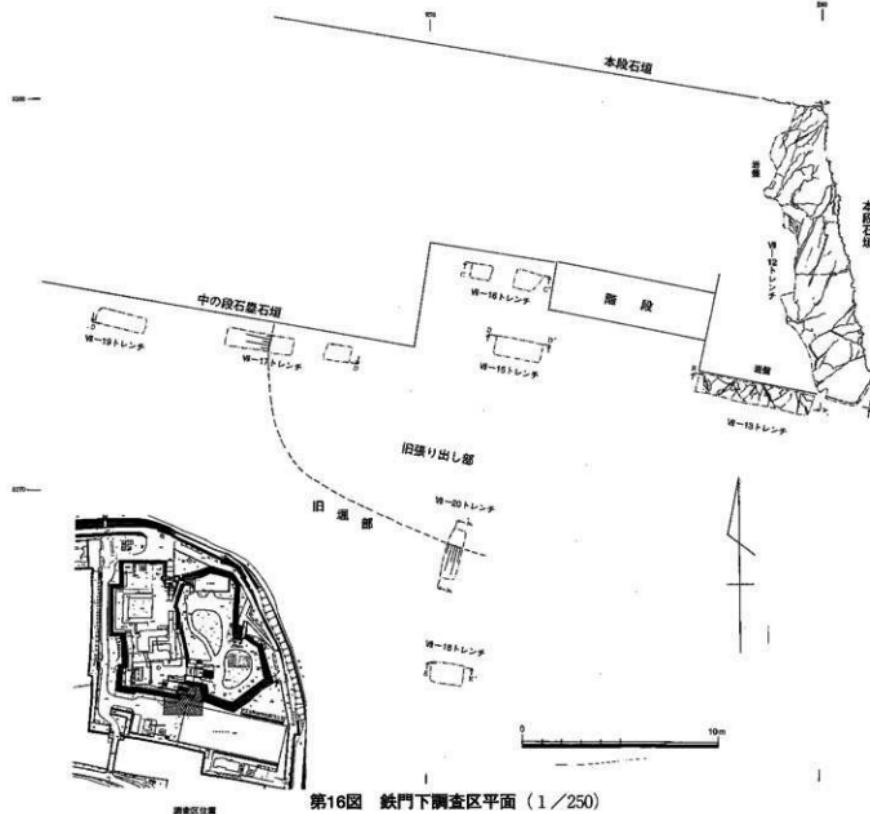
2. 階段下の広場

本段石垣の下では、各トレンチとも、表土下まもなく地山を検出した。とくに、広場の東部は全面が未風化の岩盤で、一部は発掘前から既に露出していた。そのうちVII-12トレンチの北東隅は、岩盤が最も高くして7.6mの標高をもち、南と西に向かって緩かに下っていく。本段石垣の最下段は岩盤にじかに載っている。岩盤は本段石垣南西隅部で6.9mの標高をもつが、その南2mほどのところで急な段差をもち、5.7mにまで落ちている。この岩盤段は風化の状況から自然のものであるが、その高低差は西隣の通路部にある階段(現状・絵図とも5段)に対応する。旧地形に即して本段石垣の南西シノギ角の位置や階段の構築が決められた可能性が窺える。岩盤は基本的に花崗岩質であるが、VII-13トレンチの西寄りには流紋岩質の部分がある。

階段の西に設定したVII-15・16トレンチでは5.3~5.6mの標高で地山を検出した。ここでは風化が進行してバイラン質となっている。上には厚さ10~20cmのバイラン質造成土が入れられ、東に対する自然地形の低さを補っている。階段の東でも岩盤が深い位置には造成土が入れられ、階段の前面から側部を5.4~5.6mの高度に整えている。

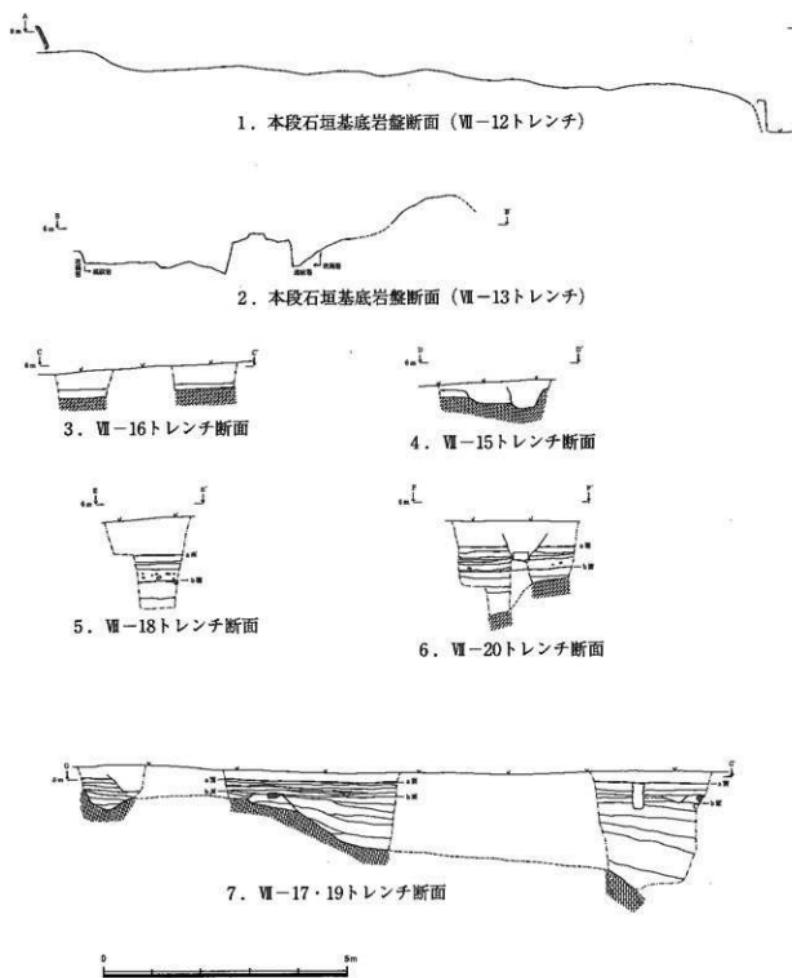
3. 最下層期の堀跡と張り出し

先の階段下から西に離れた位置にVII-17・19トレンチ、南に離れた位置にVII-18・20トレンチを設定した。各トレンチとも表土下には近代の造成土が30~60cm堆積するが、その下にa面を検出した。a面は明治維新まで踏襲された生活面で、ほぼ5.0mの標高でよく揃っている。その下のb面までは、厚さ20~40cmのバイラン質の造成土が堆積する。これは僅かに入る瓦片などからすれば江戸時代初頭のものである可能性が強いが、うちに複数の生活面が挟まれている可能性もある。いずれにしても、b面が一体を平地に造成して最初の生活面と判断できる。



第16図 鉄門下調査区平面（1/250）

バイラン質の地山は、VII-17トレンチの東寄りとVII-20トレンチの北寄りではb面ないしはその直下に検出されたが、そこから西あるいは南に急激に落ち込んでいく。その落ち込み方は人為的な掘り込みと観察され、とくにVII-17トレンチでは肩部に土壘状の高まりが設けられている。また、掘り込みの上に堆積し b面を造る土層は、上方では暗灰色微砂でバイラン土を含むこともあるのに対し、下方では暗灰青色にグライ化した微砂・シルトで今でも湧水する。その埋土に含まれる遺物は少ないが、最新は16世紀末頃の陶磁器や瓦片である。大量の瓦を伴う宇喜多秀家期（中の段第二期）以前に城郭構造として堀があり、それを埋め立てて b面が形成されるに至ったと判断できる。トレンチの位置や数の制約から未確定な要素が大きいが、後に鉄門となる広場から南にかけて台形に張り出す平坦地が造り出され、堀はその西と南、そして恐らく東にも広がっていたようである。それらは、大局とすれば旧地形を生かしながら地山を整形したものである。遺構としては確認できなかったが、この平坦地には中根郭への登り口の前広場として城門があり、構造変遷をたどりながら、最終形態として鉄門が成立した可能性も展望できる。



第17図 鉄門下調査区各断面 (1/100)

第4節 修復檜～金蔵調査区

1. 概 要

下の段西辺の南寄りを占める。下の段の西辺は、内堀側に石垣をもち、その天端は現状で郭内から2.3mほど高くなっている。石垣が内堀側に張り出す場所が修復檜の檜台である。修復檜は絵図などによれば南北6間、東西3間の三重檜（正保城絵図では二重）で、南の太鼓櫓との間の25間に幅2間で二重の多門櫓が続いている。修復檜の郭内側は絵図では石垣表現が途絶えているが、発掘で確認できた石垣は二度に鉤折れする複雑な走行をもつ。檜台上では礎石が検出された。またその深部で占い階段の石垣の郭内側石垣を確認し、檜台が遡るものであることが判る。また修復檜の北は、南の石垣より幅が広く郭内側は礎石をもつ土手になっていたが、埋め込まれた郭内側石垣を発掘した。

修復檜の東下の郭内には、金蔵門と呼ばれた東向きの仕切門があり、絵図には門脇から東西の石垣に取り付く壠状の表現がある。付近を発掘したところ、門礎は残っていなかったが、門の漆喰張り路面や門脇の石垣を検出した。絵図から窺えるイメージを超えて堅固な構造である。

金蔵門の東方、中の段の南西隅に建っていた大納戸檜の檜台西辺石垣の基部にもトレンチを設定し、石垣基底の状況を観察したほか、その南端で絵図には表示がない石組柵を検出した。

中の段石垣が東に後退する一帯は、堺で敷地が区画されて金蔵が建っていた。元禄絵図では、この蔵は南北4間、東西10間に柱を配置した外形があり、内部にさらに柱を備えた南北二つの区画があって、それぞれに「御蔵」の注記がある。とくに南側の内区画は壁表現が二重である。また、寛保絵図では、小規模で正方形に近い黄色表現の建物2棟が南北に先ず示され、それより大きく細長くて「大蔵」と注記された緑色表現の建物2棟が貼紙によって示されている。したがって絵図からは最低2回の建て直しがあった可能性が窺える。発掘によって蔵の下部構造とみられる石組を検出したが、周辺の石垣との位置関係からすると、発掘石組は寛保絵図の貼紙後の南側の蔵に対応する可能性がある。石組の東で石組排水溝を検出した。なお、金蔵の西方は、元禄絵図では特別な表現がないが、寛保絵図では「畠」と金蔵門に付随する「番所」と便所が示され、北に続く細長い郭内には「馬場通」の注記がある。

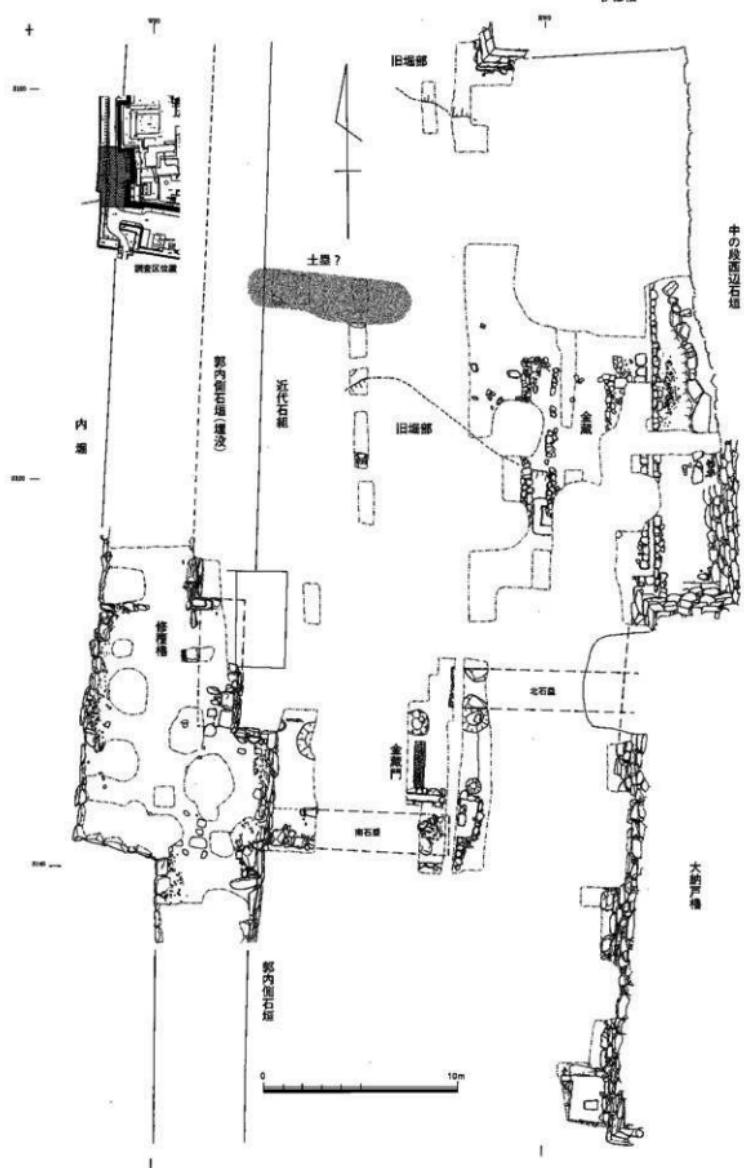
金蔵の北西では、伊部檜檜台石垣の出角部にもトレンチを設定し、基底の状況を観察した。

このほか、郭内を深く掘り下げたトレンチでは、複数の生活面を確認し、絵図には示されない井戸や石組などの下層遺構、最下層では下の段としての造成以前に機能した壠の跡を検出した。

2. 修復檜の檜台と石垣

a. 上面（第20図）

石垣の天端石は欠損部があるが、もとは内堀側で標高7.3mほど、郭内側で標高7.1mほどに揃っていたとみられる。檜の南と北に続く石垣の天端との段差はない。南に続く石垣の天端の基本幅は2.3mであるが、檜台との付根ではやや狭んでいる。内堀側石垣の張り出しは長さ4.2mあるが、人角の内角は255度、出角の内角は100度と石垣各辺が直角に交わらずに歪んでいる。出角の北はそのままの軸線で檜の北端を越えて延びている。いっぽう、郭内側の石垣は、南の石垣部から北の石垣部に至るまでの間に二重に、しかも各々が直角に折れている。これらの天端長を南からたとえば、最初の出角は内堀側人角の対面位置から6.6mほど北で、そこから次の出角までが2.0m、次の出角は公園の階段

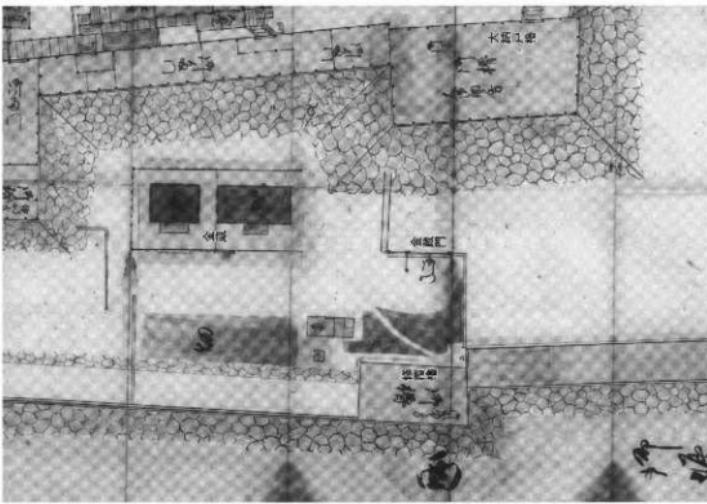
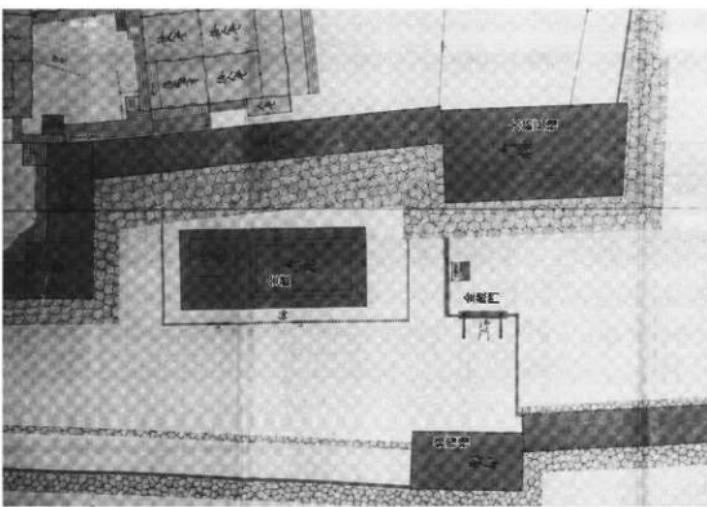


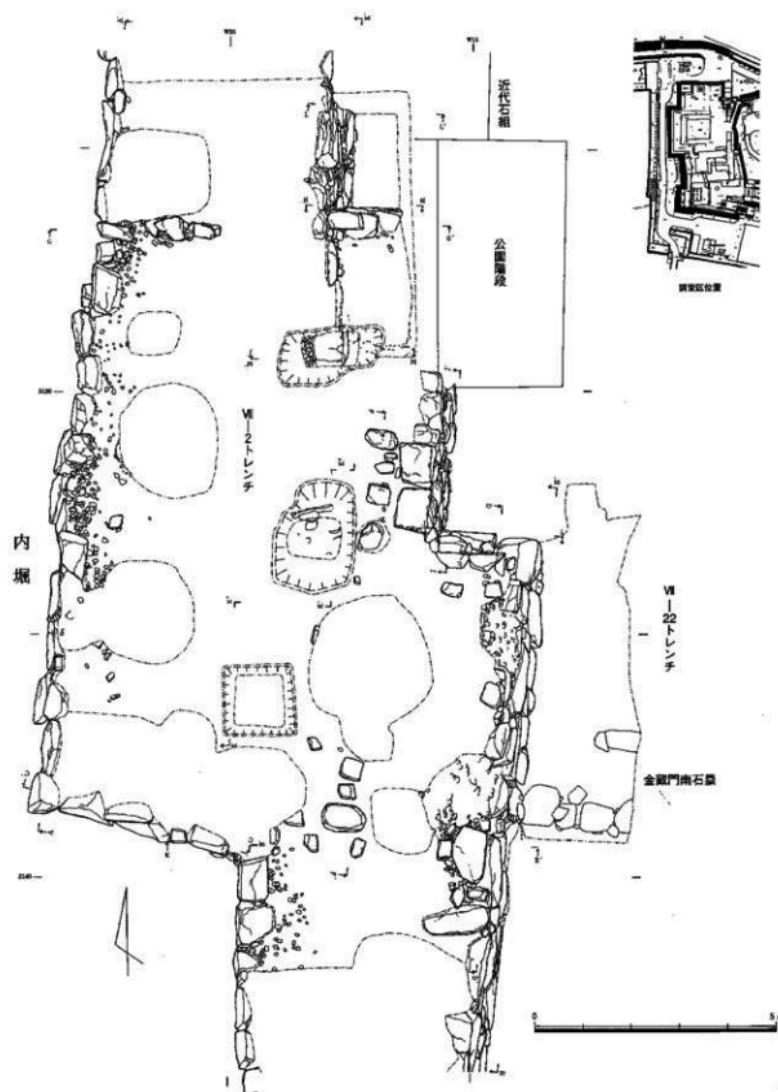
第18図 修復棟～金蔵調査区平面 (1/250)

2. 御書院御繪図(寛保)

第19回 修繕棧～企藏周辺繪図 [岡山大学池田家文庫蔵]

1. 御城内御繪図(元禄)





第20図 修復橋遺構平面 (1/100)



1. 檜台西辺断面



2. 南石堤西辺断面



3. 檜台南辺断面



4. 檜台東辺礫石等断面



5. 檜台南辺礫石等断面



6. 檜東辺礫石断面



7. 檜台北辺断面

第21図 修復橋各部断面 (1/100)

があって発掘できていないが、予想位置までが6.4m、そこから最後の入角までが2.0mである。

檜台の北辺として石墨上を東西に横切る石組を検出した。この石組は長辺80cm以下の石材を一列に横に置くもので、内堀寄りの長さ2.6mぶんが残るが、本来は郭内側石垣の北の入角まで延びていた可能性が強い。修復檜の北壁は、この石組から郭内側石垣の北小口に載っていたと判断される。石組の中心軸から、檜の南西角が載ったとみられる内堀側出角の天端までは、1間6尺5寸(197cm)として6間でうまく理解でき、絵図などに示された檜の南北規模6間と一致する。いっぽう檜台の東寄りでは、第21図6に断面を示した南北に延びる礎石列を検出した。この礎石列は、大きめの石材が心々で半間間隔に並び、その間にさらに小石材が配される個所もある。礎石列の中軸線は、檜の西壁想定線から3間の距離にあり、絵図などに示された檜の東西規模3間と一致する。最大の礎石は南端にある長辺90cmのもので、真西には別の礎石が検出されたことも合わせると、この礎石上に檜の南東角が載っていたとみられる。そうすると檜の南壁は、内堀側の石垣線より北に振り、けっこう西壁に対して直角であったと判断できる。

修復檜の南壁礎石のすぐ南では、石墨を横切って東西に小形の礎石状石材が4個並び、南に続く多門檜の北壁を示すものかもしれない。多門檜の東壁は石墨の郭内側石垣直上にあったと判断でき、修復檜の東壁からは約2.5mも郭内側となり、隣接する建物どうしの関係としては整合性に欠けるようにも思えるが、絵図に示された状況とは一致する。

修復檜の東壁は一貫して修復檜の郭内側石垣の上には載らず、檜台の外形は檜の外形と一致していないが、修復檜の南東では、とくに南北5.5m、東西2.5mほどの空間ができ、檜台上でありながら檜の壁の外となる。絵図では、この部分に面する修復檜東壁の南から2間目と多門檜北壁の東寄りは壁が二重線による表現となり、それぞれの檜の入口があったことが示されている。檜間の通行はこの屋外部分を介してなされたものと思われるが、その北寄りで石垣に平行して礎石とみられる石材を3個発見した。礎石は、既に失われたものもあったかもしれないが、修復檜入口の前面に、あるいは室外部分全体を覆って庇があり、それを受ける柱のものであった可能性がある。

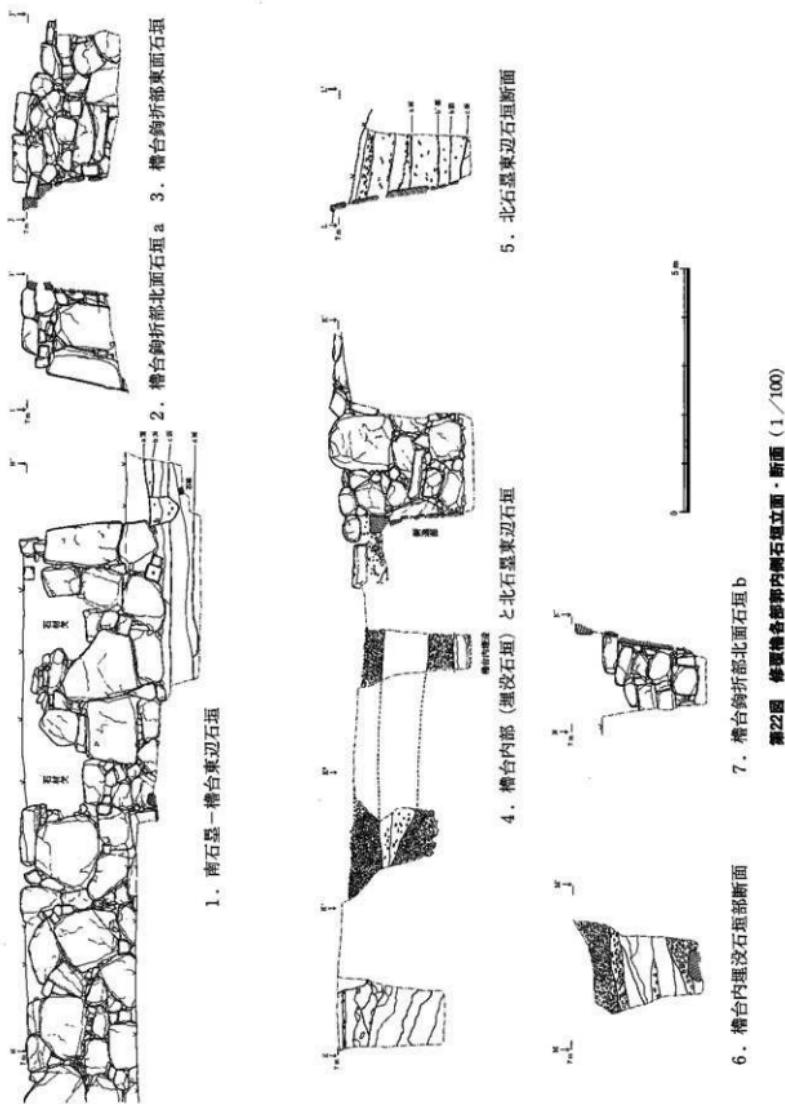
修復檜の北側石墨は、絵図では内堀側石垣の上の扉だけ多門檜の表示はないが、石墨の犬端幅は4.5mと南の石墨と大差なく、幅2間の多門檜が建つだけの幅はもつ。

b. 石垣（第22図）

内堀側石垣の築石は、矢穴をもたずに自然面を残し、一部にアラハツリによる面調整が施された花崗岩で、長辺1.0m前後のものを主体とする。横に置かれるものもあるが、最大面を石垣面に向いた立石がけっこう含まれ、石垣上部はごく弱いが反りをもつかかもしれない。この石垣は、内下馬門周辺の内堀側石垣に連なるもので、特徴も共通する。修復檜南の入角部は、1996年に行った西側内堀の構造調査の際に基底部を発掘しており、石垣高は修復檜側で7.3m、南の多門檜側で7.7mといえる。

郭内側石垣は、南の入角から北の入角までの部分と、南北の石墨と直に繋がるその他の部分とで、構造が大きく異なっている。後に述べるように、入角間の石垣の背後には、当初は石墨に連なる石垣があり、入角間は石墨を檜台として改造した時に付加された新造部である。

郭内側石垣の当初部は、立面が第22図1・2・4に示される。最下段下角の標高が南の石墨側で4.1mであるのに対し、北の石垣側では4.4mと高くなっている。石垣としての立ち上がりは、高さ2.7~2.9m、傾斜は80度内外である。石材は、自然面でありながらも面が平滑な花崗岩で、矢穴は確認されない。築石は見かけの長辺が1.0~1.5mと大形であるが、立石が多く含まれ、南の出角も各柱



石が立っている。この状況は南に続く内下馬門付近の石塀石垣と共通する。築石間の擦り合わせは良く、間詰石は内下馬門付近より多めで粗雑感が増すが、やはり小さなものが多い。南の出角付近の基底には転用石が含まれる。一辺30cmの立方体で、石垣面側に円形の受穴をもつ花崗岩切石である。

関わる上層について記せば、第22図1・5のa面は明治維新まで踏襲された生活面で、とくに北石塀側は、幕末までの大量の瓦と少量の陶磁器を伴い、修復橋を壊した時のものとみられる土砂によって大きく埋め込まれている。a面とb面との間は暗褐色の微砂に暗黄褐色のバイラン土をまじえ、江戸時代前期前葉の瓦片を含む、郭内の地上に伴う造成土である。b面は、石垣最下段をやや地覆とした段階で、この石垣が構築された当初の生活面と判断される。後述のVII-22トレンチの下層期素掘り井戸などはこの面から掘り込まれている。b面の下は暗黄褐色バイラン質微砂の石垣構築に伴う造成土で、c面は石垣構築に先立つ面である。このc面は、郭内の各トレンチとの連続状況から、一体を郭内平坦地に造成した当初の生活面で、VII-2 dトレンチではこの面から下層石組の構築塊が掘り込まれている。つまり、郭内側石垣の当初部は郭内平坦地が造成された当初から成立していたのではなく、それより遅れる時期に郭内地盤のかさ上げを伴いながら造られたものと判断される。その後、a面に至るまで段階を経た郭内地盤のかさ上げで基部が埋まっていたことになる。

郭内側石垣の新造部は、立面が第22図3・7に示されるが、入角では当初部の石垣面に当たって終るのが観察できる。最下段下角が標高4.5mほどにあって、当初部より微妙に高めであるが、構築当初の生活面は同じb面である。当初部に比べて、立ち上がりが85度近くと急なうえ、石材が長辺60cm前後のものが目立って小さく、間詰石も多くて、粗雑な積み方である。当初部に特徴的な立石は含まれない。また東面部最上段には、後の補修による可能性もあるが、矢穴を残す割石が含まれる。

c. 横台内地下

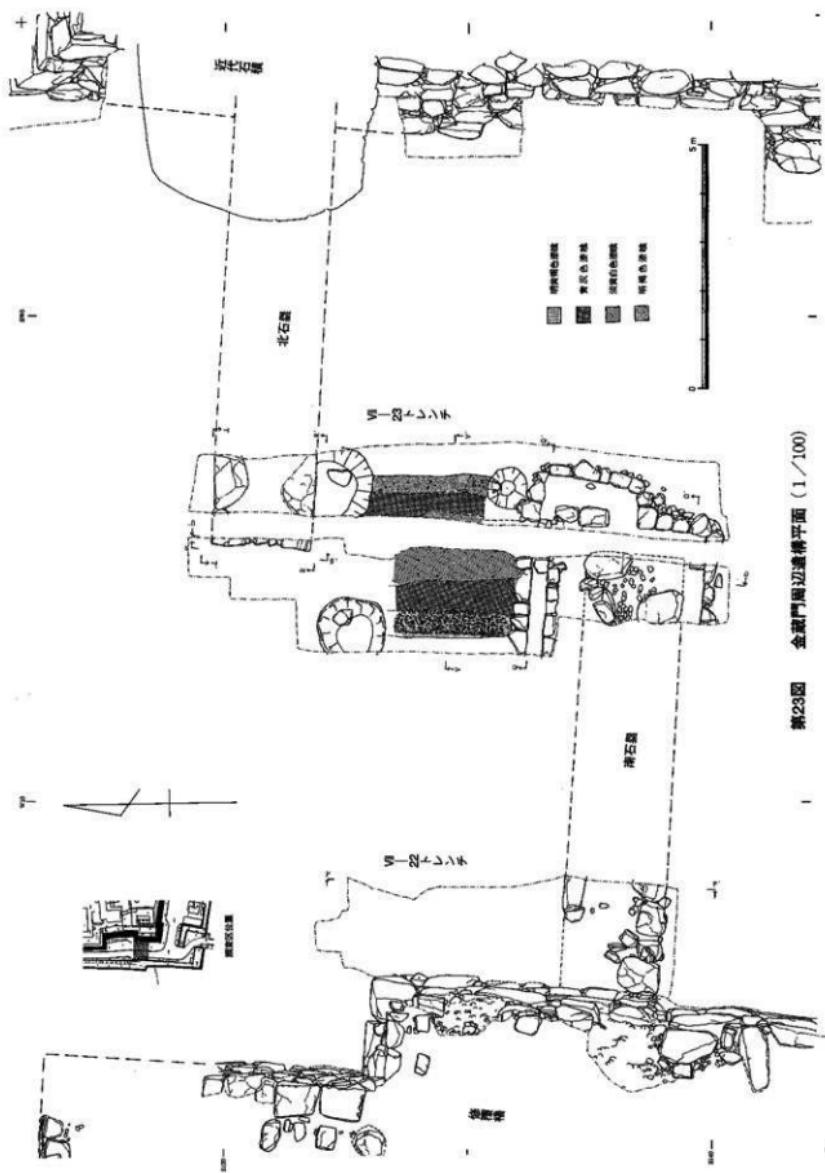
北石塀から続く郭内側石垣の延長線上に設定した北側のサブトレンチでは、長辺1mを超える石材を据えられた状態で検出した。石垣当初部の最下段とみられ、裏込に径10~15cmの円礫が充填されている。その上には径10~15cmの空石積み円礫、字喜多秀家期などの瓦を大量に含む黄褐色バイラン質造成土、径1~7cmの円礫が順に堆積していた。その南の石垣当初部入角の予想位置も深さ1.5mほど掘り下げたが、築石とみられる大形石材が石垣の体を残さずに点在し、以深の発掘を断念した。石材上は北のサブトレンチと同じ堆積である。いっぽう、最南のサブトレンチでは、北の円礫と一連の可能性がある円礫混入のバイラン土層が地表下すぐにあるが薄く、以深には、鮮黄褐色バイラン土や淡灰色微砂の互層で近世初頭の瓦片を僅かに含む造成土が堆積する。この造成土は北の円礫堆積や造成土とは繋がらず、石垣当初部の背後にあった木米の石塀内造成土と判断できる。いっぽう、北の円礫と造成土は、石垣当初部の破却後に投入された横台拡張時のものと解釈できる。その上部の特徴的な小円礫が新造石垣背後に限って認められることは、横台上面の観察でも容易に判る。横台拡張部全体に分布する空石堆積の円礫は、そのまま石垣新造部の裏込の意味をもつ。

修復橋は、東壁が載った礎石列の位置から、石塀の拡幅後にしか建ち得ないが、拡幅時の造成土に瓦が大量に含まれることからすれば、もとの石塀上に小規模な前身の橋があった可能性がある。

3. 金蔵門（第23図）

a. 南石塀

内側側石垣の出角にはば南辺を合わせ、郭内側石垣面に付加する形で始まっている。横側石垣の当



第23图 金闕門周邊構平面 (1/100)

初部に対して少なくとも工程上は遅れるが、構築当初の生活面は檜側石垣と同じ面である。檜側石垣当初部に統いて造られたか、新造部を積んで修復橋を建てる段階に造られたかは即断できない。

石垣本体の外形幅は2.0m、長さは9.0mで、最大50cm（生活面からは30cm）の高さしか残っていない。石材は最大長辺100cmの花崗岩で、自然石が主体であるが、矢穴をもたない割石も含まれる。裏にはこぶし大の円礫が残り、本来は石墨の芯全体に充填されていた可能性が強い。復元的にみると検出石材の上に別の築石が載り、石垣の体をなしていたものと思われる。石墨高は、大端が西石墨の天端に揃った場合の高さ3m弱を上限に想定でき、上にはさら上層が載ったものと思われる。

石墨に沿って石組排水溝が付属する。南辺の石組溝は、石墨本体が北側壁を兼ねているのに対し、門扉脇となる石墨北東部で鉤折れして石墨からやや離れ、北辺では南北とも側壁材を配して石墨から独立し、北の通路に対する路側帯をなしている。溝の幅は北東部でやや広く60cmあるが平均的には30~40cm、深さは30cm内外で、基本は上床である。石材は長辺30~70cmの花崗岩で、方形度が高い割石であるが矢穴はもたず、側壁は一石のみで作られて、裏込石をもつ場所もある。溝の高低差は検出できた限りの石材頂部でみて25cmあり、門内の雨水を南に流す構造である。発掘区内の南辺西部では石材が失われているが、恐らく溝はそこから西側石墨に沿ってあと30mあまり延び、いまなお機能する西側石墨の下を横断する暗渠と合流し、内堀に抜ける仕組みであったとみられる。

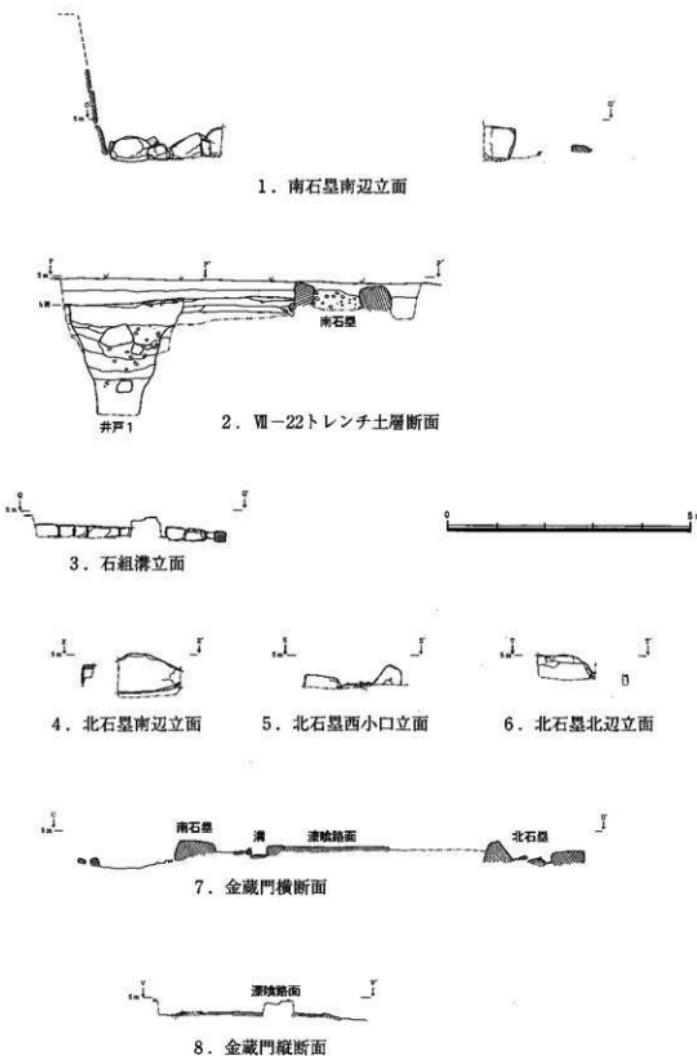
b. 北側石墨

金蔵門が付く西端付近を発掘した。外幅は南石墨と同じ2.0mで、最下段だけが残る状況なども同じであるが、石材の平滑度が高いうえ、長辺1mを超える大きなものが含まれ、築石がより精緻に組まれて、石墨外形の直線度が高い。石組溝は伴わない。東は大納戸檜檜台石垣に取り付き、それより遅れて造られたものとみられる。その付根には、近代の石積みが組まれている。

c. 金蔵門

南北の石界は小口がほぼ一直線に揃っているが、その間の5.6mに東西する門が取まっていたことになる。一帯の東西3.4m、南北3.5m以上の範囲には、漆喰を張って路面としていた。漆喰は4種類あり、端部の重なりから明黄褐色、黃灰色、淡黄白色、明褐色の順に施工されたことが判る。それは工程差というより補修の累積とみられる。漆喰西端の幅50cmには、すべり止めとして径2~7cmの円礫が緻密に嵌め込まれている。また、密度は低いが半ばや東端の漆喰にも小円礫の剥落痕が観察できる。門檻は残っていないが、抜取穴の可能性がある土壙を3つ検出した。ただ、東の2つに主柱を想定した場合、門扉ラインは漆喰端とは一致するが南側の閉塞に難があり、北西の穴に控柱を想定しても、南の対向位置は漆喰が保たれていて埋込み礎石は想定できず、問題が残る。むしろ礎石は地表に置くに等しいものであったかも知れず、そうすれば絵図の通り門扉はやはり南石墨の小口ライン（公園縁石直下）に復元するのが合理的である。絵図に従えば、南の主柱は溝を超えて南石墨角の下端に、北の主柱は墀つまり石墨南辺より半間南で、柱の心々は2間に見積もれる。

金蔵門は石墨の存在から予想外に堅固な造りであるが、門の大手は西石墨上に建つ多門櫓や東側の大納戸櫓、門内正面は西石墨上の修復橋（またはその前身橋）から迎撃するのにかなっており、その位置関係ではじめて理解できる。



第24図 金蔵門各断面 (1/100)

4. 大納戸櫓檜台下（第25図）

a. 石垣の基部

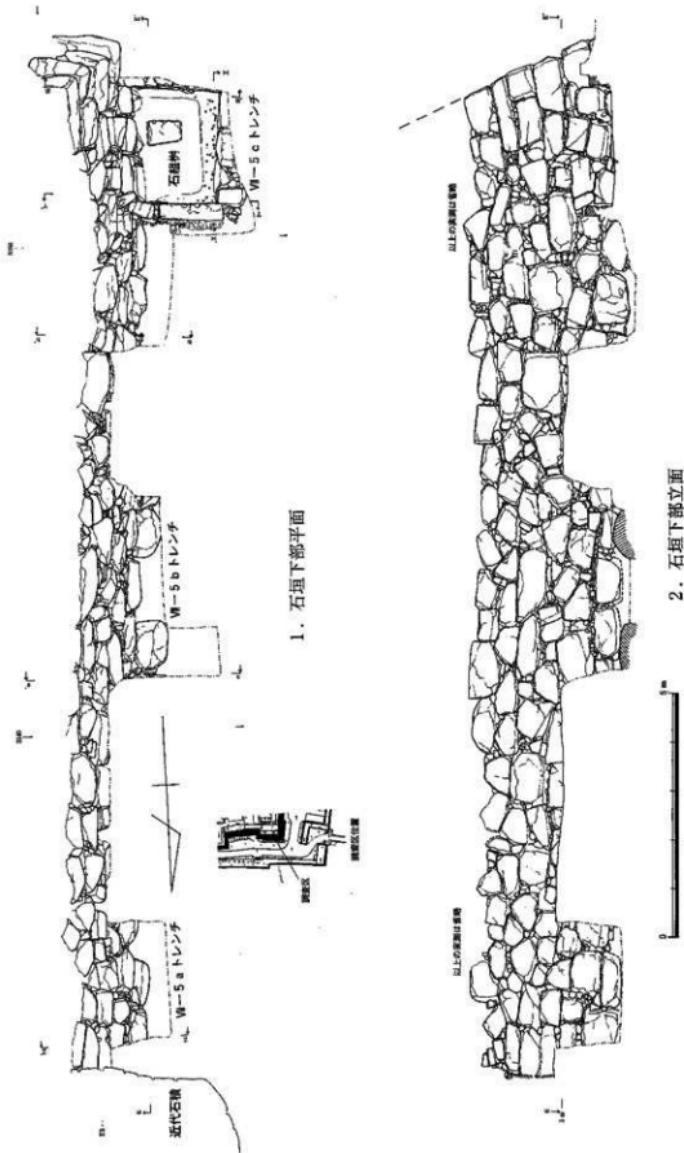
この石垣は、最下段下角が標高3.6~4.0mにあり南に向かって緩やかに下がる。そこを起点にはほぼ水平に揃った天端までの高さが10.9~11.2mある。立ち上がりは65度ほどであるが、上部は反りをもち70度ほどとなる。上部は江戸前期の枠内での積み直しを受けている可能性が強い。石垣下部は長辺50~100cmの大きさの石材を、横に積むのを基本とするが、横メジはあまり通らない。また上部も含め、石材は一部にハツリ調整を施した花崗岩の自然石で、矢穴は観察されない。

第26図4・5・6、第29図6に示したように4つのトレーナーで上層観察を行ったが、a面は明治維新まで踏襲された生活面、b面は石垣構築当初の生活面と判断される。a～b面間の造成土は暗茶褐色微砂や黄灰色バイラン土の互層で、石垣寄りでこぶし大の円礫を含むほか、全体に江戸初期（コピキB）の瓦を多く含んでいる。いっぽうd面以下は暗灰青色にグライ化した微砂で、最下層期にあった堀の埋立て上である。d面直上の堆積は黄灰色～暗灰黄色のバイラン土で、堀を埋め立てた当初の生活面を造り出す造成土と判断される。石垣を構築するための掘り込みは、5bトレーナーではb・c面から、VI-2 bトレーナーではc面から掘り込まれている。双方の掘り込みの埋土は暗灰黄色微砂や灰黄色のバイラン土で、本来のc面形成上と異なって大量の円礫を伴うほか、宇喜多秀家期以降とみられる瓦片を含んでいる。また、VI-2 bトレーナーでは石垣構築に伴う生活面の上昇はないが、VI-2 bトレーナーではcからb面への地盤のかさ上げを経ている。この石垣の構築はc面の形成つまり平坦地の造成より遅れる時期であったと判断される。5aと5cトレーナーでは、発掘限界の関係で石垣の掘り込み線を確認できなかったが、石垣基底に密着する土層は同様で、掘り込み内の堆積に相当するとみられる。

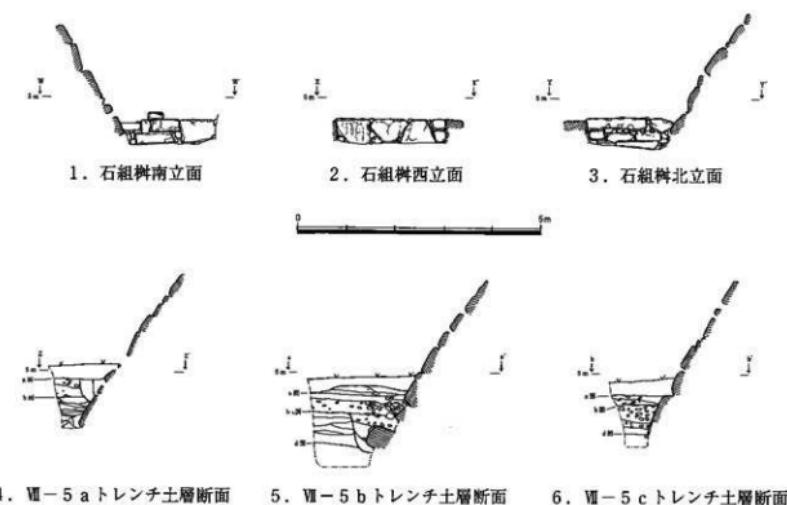
七層関係は先の通りであるが、石垣最下段のあり方は場所によってやや異なる。北の5aトレーナーの石垣最下段は、前面の円礫もまばらなうえ、少なくとも下角直下では捨石層も胴木もなく、軟弱な土砂にじかに載っているだけである。対して5bトレーナーでは、先の掘り込み内に築石と同大の石材が石垣面より競り出した位置で、飛び飛びではいるが平行に並べられ、その上に最下段が載っている。ここでは、前面の円礫も密度が高い。また、南のcトレーナーの最下段は、下角に密着する横胴木などはやはり伴わず、軟弱土に載るだけであるが、前面の円礫は高密度である。最下段石材の前端線に打たれた直径6cmの杭を1本検出したが、その尖端は石材下角と同高にしか届かず、胴木の固定や築石の固定用とは思えない。

b. 石組樹

石垣の南側出角付近で確認した。東辺は檜台石垣をそのまま用いている。樹の内法は南北2.3m、東西1.6~1.8m、深さは50~70cmで、給排水溝は伴わない。底は中央がやや深く標高3.9mほどにあって、石垣最下段下角よりは高い。側壁材は本来の天端を保つとみられ、標高4.6mによく揃っている。この高度は、先の石垣基底の土層観察でみたa面に対応し、石垣本体からは構築が遅れ、明治維新まで機能していた上層遺構と判断できる。樹内の埋土には近代の遺物も混じる。石材は花崗岩の割石で、矢穴を残すものもある。長さ1.3mの角柱石のほか、長辺数1cmの方形柱が横に積まれている。壁は垂直で1~3段構み。底の半ばは上床であるが、長辺70cmで矢穴を残す花崗岩の方形割石1個が上面を床に揃えて埋め込まれている。また、底の側壁側30cmほどの範囲には、表面に小円礫を埋め込んだ黄灰色の漆喰が張られている。側壁の背後は、裏込石を伴い、一部の築石は明褐色の漆喰で



第25図 大納戸櫓台西邊石垣下部 (1/100)



第26図 大納戸橋橋台西辺石垣下の各立面・断面 (1/100)

背後から固定されている。

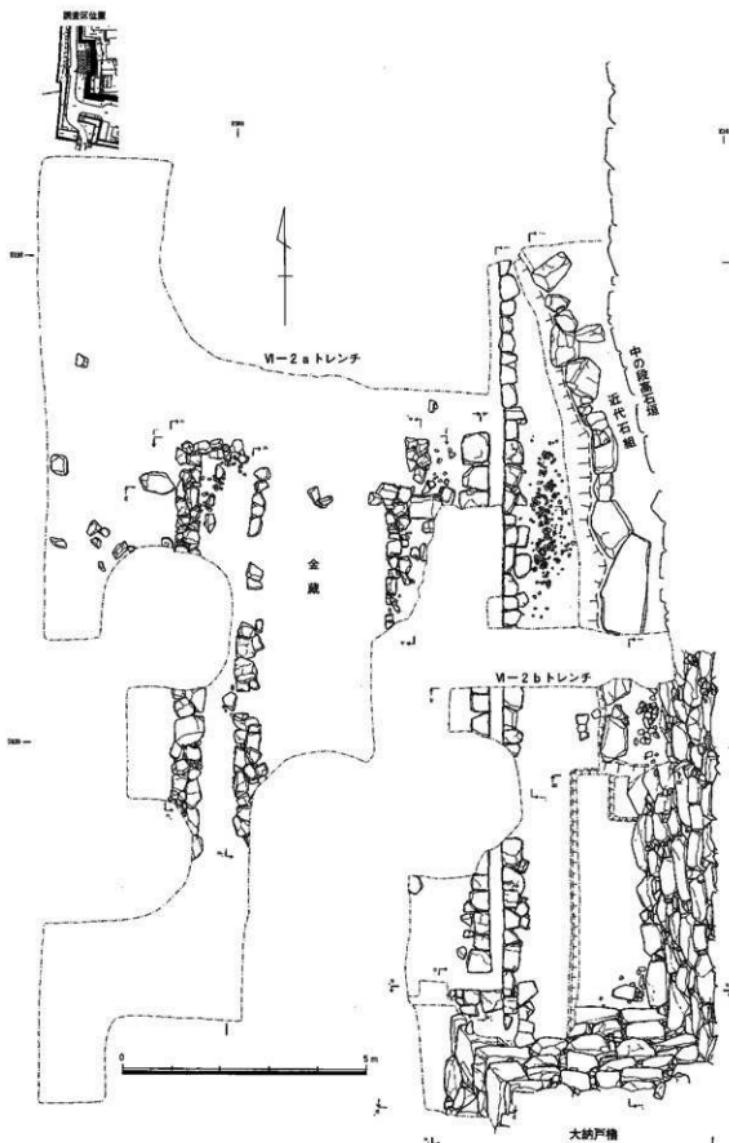
この石組枠は水溜めであったことは疑いない。ここは、旧地形や石垣基底高との関係で、中の段石垣の裏込を伝う水の集合点に当っている。乾燥期に行われた今回の発掘時にも湧水が激しく、ポンプで水を抜かなければ、絶えず枠の上縁まで溜まるありさまであった。より具体的な機能として、足洗場や散水用貯水槽などが考えられるが、結果として石垣裏の悪水の抜取口の意味ももつ。

5. 金蔵周辺（第27図）

a. 石組（金蔵基礎）

旧制中学の校舎建設による搅乱や明治の城郭破却時の造成土の下で、南北8.6m、東西5.2mの長方形の範囲に石組を検出した。石材の一部は地山にじかに載っている。石組各辺のうち、西辺は内側列と外側列とが数十cmの間隔で平行して二重である。北辺と西辺は不明瞭ではあるが、やはり二列構造への指向が観察できる。各列石組の幅は30~60cmで、その幅いっぱいが1石の場合もあるが、原則は2石が対になる。石材は長辺60cm以下の花崗岩の自然石もしくは粗割材で、矢穴をもつものはない。1段のみで確認された部分が多いが、最も残りの良かったところは2段積み、高さ45cmある。

石組は、絵図（第19図）に示された3段階の蔵のうちでは、寛保絵図の貼紙に示された南側の蔵と対応しそうで、その下部構造であった可能性が窺える。すなわち、同絵図では柱の表示はないが、他の建物との比較から南北4間（788cm）、東西2間（394cm）ほどの規模に読み取れ、それは石組の範囲よりひと回り狭いが、石組外縁からの壁位置までの引きを勘案すれば整合し、石垣との位置関係も絵図と遺構を対比して矛盾ない。問題は、石組の深さである。石組の東には後述の石組溝があり、明



第27図 金蔵周辺構造平面 (1/100)

治維新を迎えた時点に機能していたと判断できるが、層位的にみて寛保絵図以後に地盤のかさ上げを伴いながら新しく造られたものとは考えられない。そうすると、寛保絵図の貼り紙に示された蔵が建っていた時期の溝脇の生活面の高さが判るが、検出された石組の上面は、溝にすぐ隣接する東辺ですらそれより50cm近くも低いのである。石組の高さは本来60~70cmあったと考えることは不可能ではないが、その場合は地表から積み上げられたものではなく、いわゆる布基礎として溝のなかに構築された石組と解釈するのが合理的である。搅乱との競合でその溝を遺構としては確認できなかったが、石組の組み方に精緻さが乏しいことや側面があまり揃っていないことは整合してくる。なお、近代の建物基礎は、溝の中に石組を築いた上にコンクリートを載せる構造であるが、付近に建っていた中学校舎の基礎は、いま記した石組とは別のプランでかつ上位で確認できている。

b. 石組溝

中の段からの雨水を金蔵の手前で受けるためのものとみられる。高石垣と平行して南北に延び、大納戸櫓格台の出角の手前で西に折れるが、その先は残ってない。溝が機能していた段階での高石垣下端から溝の中軸までは3.2mある。溝の内法幅と深さは共に0.3mである。石材上面の標高は、5.36~5.45mで、トレンチ北寄りが最も高く、雨水は南と北に分かれて流れたとみられる。石材は長辺30~60cmの花崗岩の粗削材で、方形度が高く、一段一列に横置きする。側壁面には僅かに間詰石があり、背後は控えの石材を伴う場所もある。

溝の石材は、金蔵石組の北東隅から北で小形化して、両者の関連性が窺える。また、溝の南北ラインは、元禄絵図に示された蔵の外壁東辺、あるいは寛保絵図の貼紙に示された蔵を囲む扉の東辺とほぼ重なる位置となる。溝の東石材が礎石を兼ねていた可能性なども思いつくが、判断は難しい。

c. 中の段石垣

中の段の入角間に南北に繋ぐ石垣で、天端の長さが36.0m、発掘できた最下段下角からの高さが11.0m、立ち上がりの角度は基本が50~60度で、上部はさらに急となる。上部を中心に江戸時代の内での積み直しを受けている可能性が高い。とくに下半部は孕み出しが激しく、1999年度から三か年計画で解体修理中であり、その詳細は背後の構造などを含めて事業終了後に別に報告する予定である。以下は、今回の調査でトレンチを設定した南の入角付近でも最深部に限っての構造である。

築石は、長辺が60~130cmで、一部にハツリを施しながら自然面を保つ花崗岩である。安定感をもって横に積まれ、横メジを通す部分もある。間詰石は築石が丸みをもつぶん多く、「寧に施されている。大納戸櫓格台との入角では、築石が交互に噛み合い、両者が同時に積まれたと判断できる。

第29図3に示されるように、最下段下角は標高4.3mであるが地山には載ってない。最下段の下半は、こぶし大の円礫を混えた暗褐色灰色細砂で根固めされている。上には黄灰色微砂や鮮黄灰色バイラン土が化粧土として入れられ、出来上がったb面が石垣構築当初の生活面と判断される。a面は明治維新まで踏襲された生活面で、石組溝を作り、a~b面間には江戸前期前葉の瓦を含む暗褐色細砂が堆積し、石垣構築以後で江戸前期前葉の枠内のかさ上げが70cmほどあったことが判る。

a面の上の堆積は第29図1に示される。a面や石組溝を埋めるのは暗褐色細砂で、石垣側に厚く、大量の瓦のほか陶磁器や漆喰片などを含む。その遺物年代は、b面以下から一転して幕末期が主体で、明らかに城郭破却時の堆積である。上には石垣に平行して巨石が組まれている。さらに上の造成土も石垣側が厚く、裾には低石垣を伴っている。こうした近代・現代の土砂堆積、石組、低石垣は、中の段石垣の孕み出しが激しい部分ほど顕著で、崩落防止のための方策と考えられる。



1. 金藏西辺外側石組立面



2. 金藏西辺内側石組立面



3. 金藏東辺石組立面

4. 金藏北辺石組立面



5. 金藏北辺～石組溝断面



6. 石組溝西辺断面



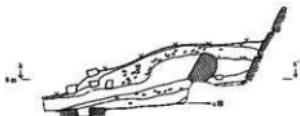
7. 石組溝東辺立面



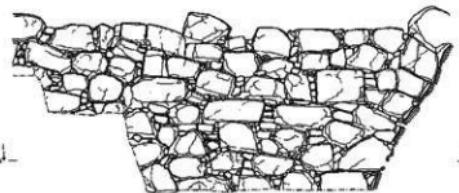
8. 近代石組立面



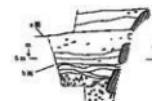
第28図 金藏周辺各断面・立面 (1/100)



1. 石組溝—近代石組土層断面

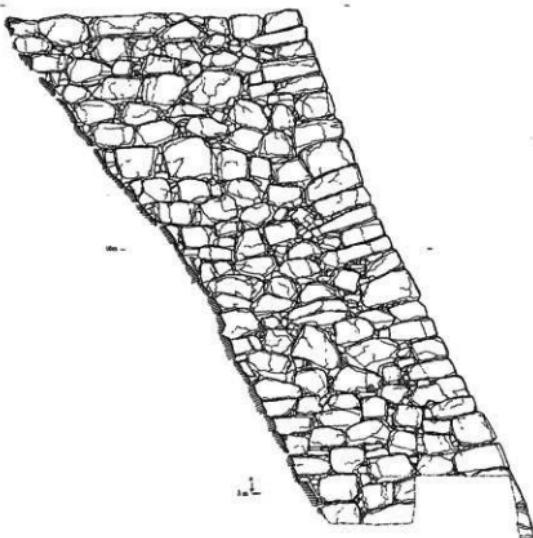


2. 中の段高石垣南部立面

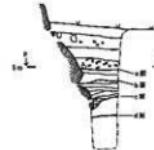


3. 中の段高石垣基部土層断面

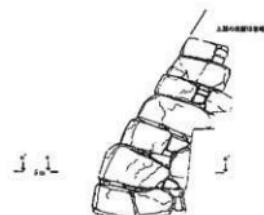
0 5m



4. 大納戸橋檣台北小口石垣立面

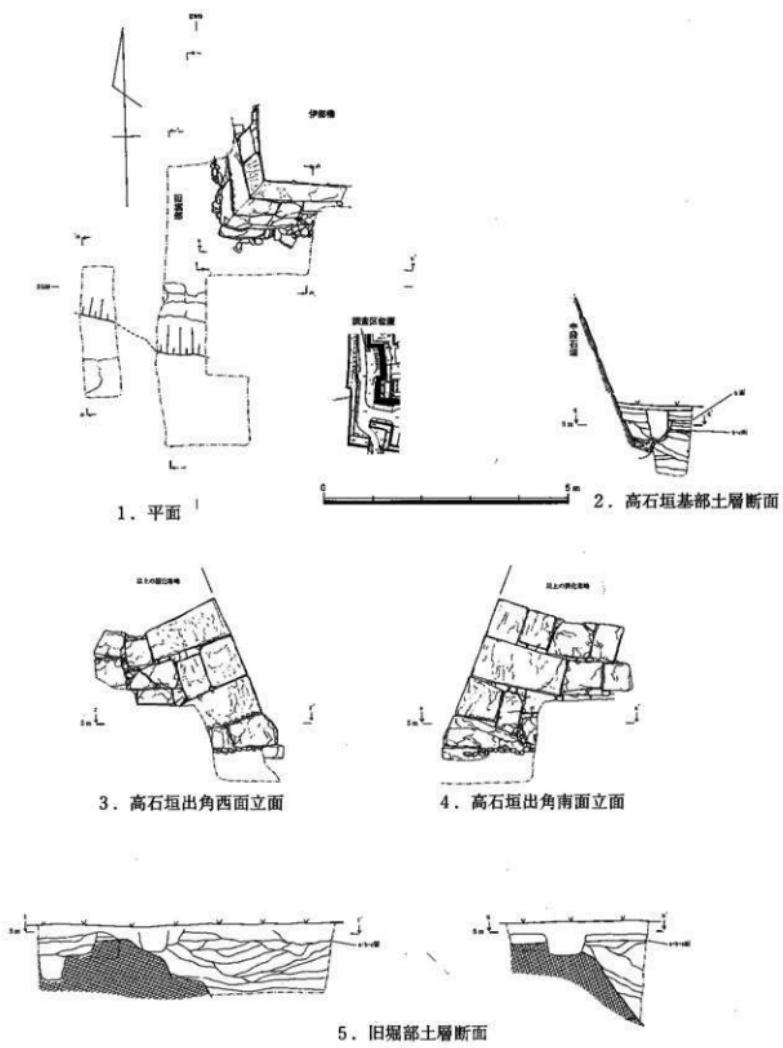


6. 大納戸橋檣台西辺石垣北端土層断面



5. 大納戸橋檣台西辺石垣北端立面

第29図 金蔵東側中の段石垣各立面・断面 (1/100)



第30図 伊部橋樁台高石垣出角付近 (1/100)

6. 伊部櫓台下（第30図）

a. 高石垣

櫓台の南西出角を発掘した。検出した最下段下角は標高4.25mにあって、石垣の天端までの高さが12.0mある。立ち上がりは70度前後で、上部は弱い反りをもつ。石材は白色の花崗岩（大島石）に統一されている。築石は總ての面が割り面で方形度が高く、隨所に矢穴を残す。一般部の築石の見かけの長辺は60~80cmであるが、角石には長さ180cm、高さ90cm、幅75cmといった大形のものが使われる。算木積みが整い、角石は下の角石のほか横2石に載るが、角脇石として明確化しているのは1石である。角石・角脇石は、一般部よりノミ調整が顕著で、石材の擦り合せが丁寧で、間詰めも少ない。角線は直線によく通り、積み上げた後に加工調整が行われたことを物語る。

土層堆積を示した第30図2では、石垣構築のためにa面から深さ0.8mほどの掘り込みがなされているのが判る。明治維新まで踏襲された生活面と同じ層位である。a面からb・c面の間の造成土は暗灰褐色微砂・細砂で単位が細かい。また、b・c面を造りだすのは鮮黃灰色バイラン土のごく薄層であるが、その下は後述の堀を埋める暗褐灰色の微砂である。

石垣の最下段は、出角の位置がもう2m南であれば地川に据えられたにもかかわらず、軟弱な土砂に載っている。前面に円礫が多少詰め込まれるといえ、築石が分厚い捨石層に載るという状況には程遠い。掘り方の底で最も深い位置にある石材は、最下の角石の下に置かれた長辺100cmの平石である。上の角石の位置と傾斜を決めるものとみられる。その上の角石は、さらに上の角石に比べて平滑度が著しく低く、方形度も低い。とくに南面は半ばが張り出し、上から続く石垣の美しい直線を乱している。この角石が楔形に近いのは、設置面が水平であるのに、上に一定の傾斜をつくるための必然であるが、加工度が低いのは、掘り方内に取まつて石垣完成後は地覆になり、角石の機能さえ果たせば面加工する必要がなかったからと判断できる。掘り方内では角脇石や間詰の加工度も劣っている。地覆部でのこうした状況は、逆に地上部では機能を超えて見た目をつくるため、費やされた労力と神経がいかに大きなものであったかを示している。

b. 最下層期の北堀

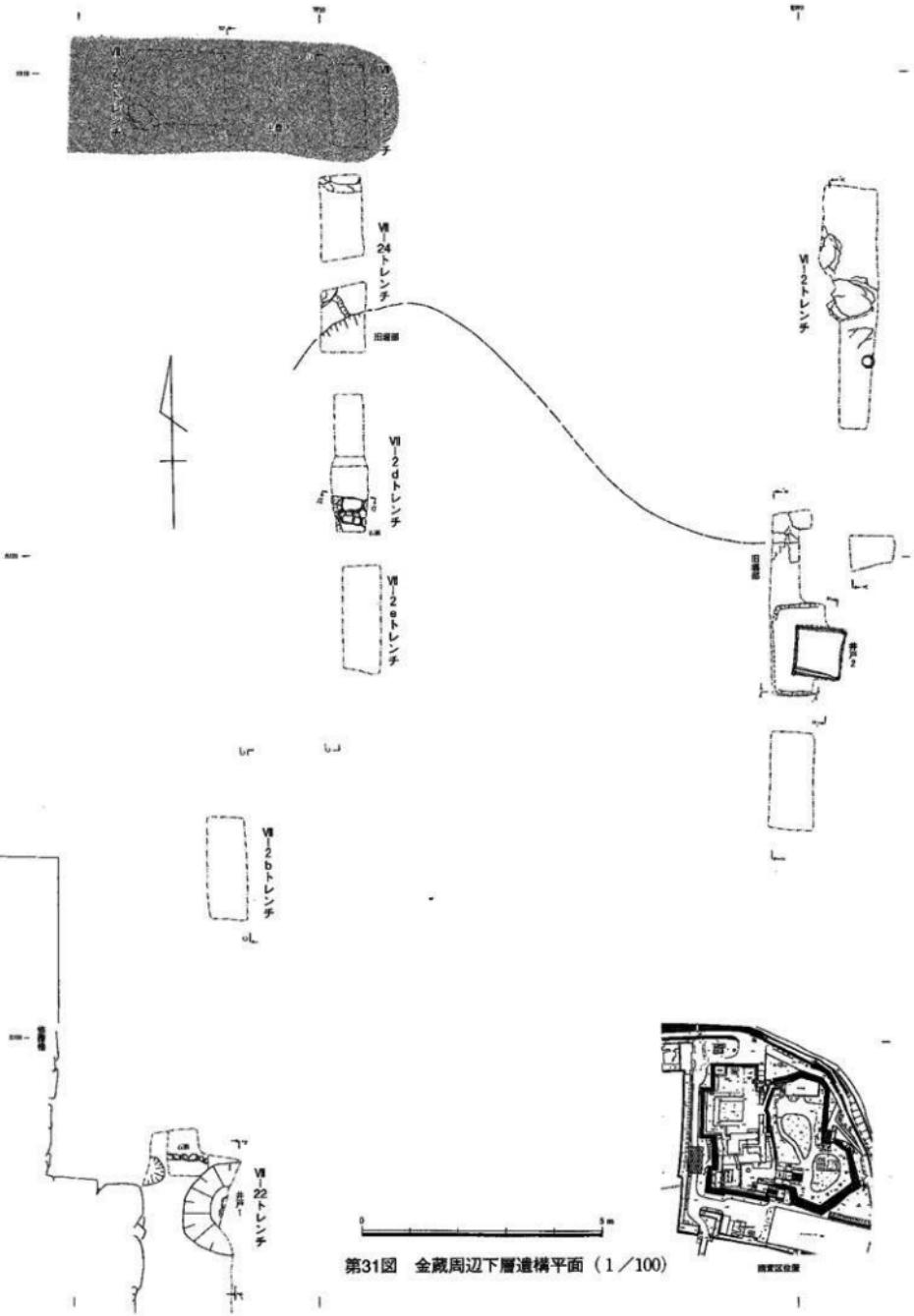
同じトレントで、地川の北への急激な落ち込みを検出した。付近の地山は、鮮明褐色の強風化岩盤で、最高4.8mの標高をもつ。第30図5の右に示した落ち込みの段差は2m以上、傾斜は60度もあり、人為的な掘り込みと判断できる。同図左の地点でもボーリング棒をさし、発掘以深が同様に落ちる事を確認している。埋土は暗褐灰色の細砂や黄灰色バイラン土で、下層ほどバイラン分が減少していく。遺物は少量で、中世以前のものが目立ち、最新は16世紀末ごろの瓦細片である。他のトレントでの状況とも合わせ、平坦地が造成される以前の堀の肩部と判断できる。なお、第30図5の地点では、堀が埋められた最初の段階から明治維新までの生活面の上昇はない。

7. 下層遺構（第31図）

先の項で記した北堀も実際は上層遺構よりも遙かに古いが、ここでは金蔵周辺の郭内で検出されたb面以深の層位の遺構と土層について記す。

a. VII-22トレントの井戸1と石組

井戸は、第24図2に示されるように金蔵門南石墨の構築より遅れて掘られた可能性が強い。また、掘り込み面のb面は、すぐ西の石墨石垣の構築当初の生活面と理解される。したがって、この井戸は



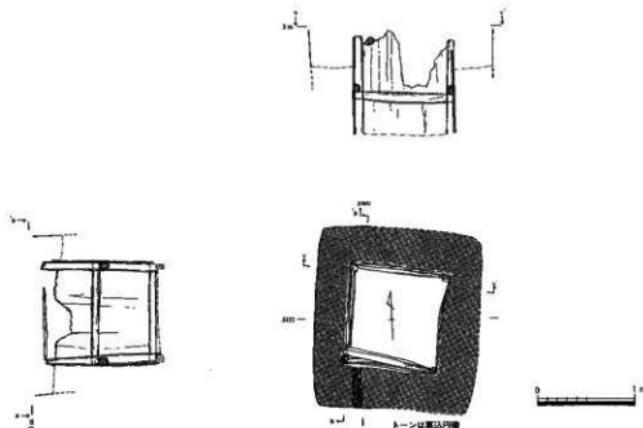
金蔵門内正面の石墨出角に近接してあったことになる。完掘できていないが、直径2.0m程で、深さ2.5m（標高2.2m）まで掘り下がったが、その限りでは素掘りである。埋土は一括投入土とみられ、暗黄褐色細砂や暗褐黄色細砂・バイラン土で大小の石材を無秩序に含み、深部はグライ化している。埋土中の遺物には、17世紀第1四半期の前池田期まで下ると思われる瓦や唐津焼細片などがある。埋土最上層は明黄褐色微砂で、井戸を埋めた後の生活面を化粧している。

井戸の北西で、長辺15cmの長方形花崗岩を一段一列で東西に並べた石組を検出した。焼けた石材も混じるが、自身が焚火穴の石組とは思えない。不詳であるが、何かの縁石かもしれない。第22図1に示されるように上面の標高は3.85mでc～d面間にあり、既に平坦地ができている（もしくは形成途上）が、隣の石墨や井戸はまだ成立していない段階の遺構である。

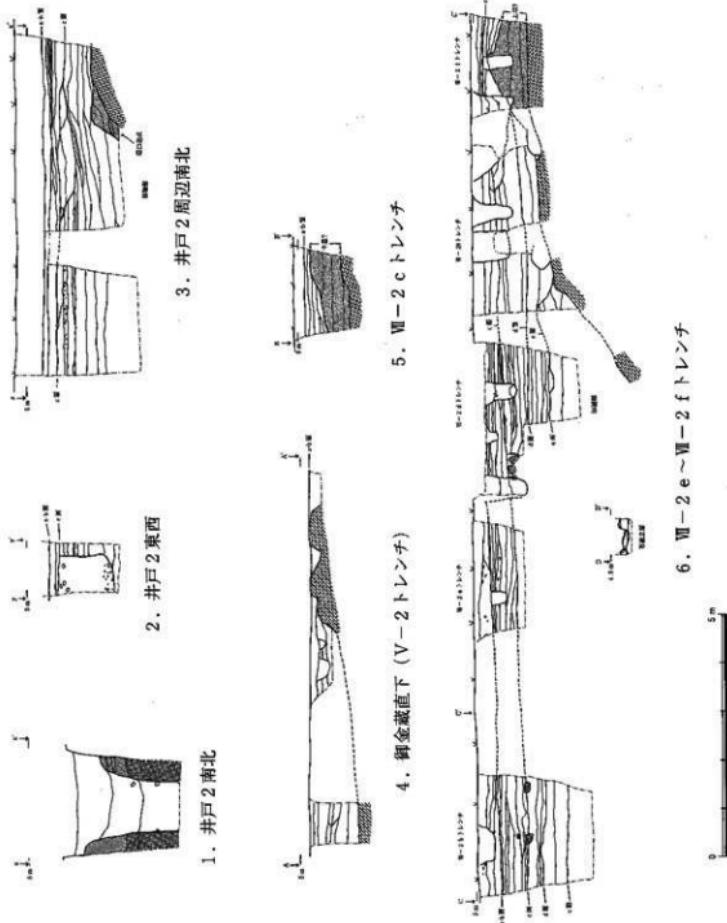
b. 井戸2（第32図）

金蔵部の南西で検出した。第33図2・3に示されるa・b面は金蔵石組が載る面であるが、それから暗褐黄色バイラン土による造成土を挟んで下のc面から、井戸が掘り込まれている。なお、第33図2に示される掘り方の底は、土層壁が掘り方斜面に当たっているため、真の井戸底よりかなり高い位置で示されている。また、同図3では井戸の掘り方は掛っていない。

井戸の掘り込み面は標高4.3mで、そこからの深さ2.5mまで発掘した。掘り方は、平面が南北2.2m、東西もほぼ同大方形で、断面は85度の急傾斜である。標高2.9m以深には木製の井筒が残っていた。四隅に8cm角の柱を立て、ホゾ穴を切って各辺互い違いに横木（8cm角）を渡して、自立可能な木枠を作り、その外側各辺に厚さ6cm以上の一枚板（幅約120cm）を垂直に立て、背後に裏込石を充填して固定する構造である。井筒の内法（板間）は100～105cm四方、横木の上下間隔は心々で50～60cmである。裏込は土砂を混えない円碌で、いまの湧水高と概ね一致する標高3.0m以深では径2～3



第32図 金蔵下層の井戸2 (1/50)



第35図 金蔵周辺下層名土層断面 (1/100)

cmと均質で小さなものであるのに対し、上部は径6～8cmの円礫が用いられている。こうした裏込は、木組として残る高さを超えて生活面近くまで及び、井筒がそこまで立ち上がっていたことが判る。井筒の高さは2mに発掘限界以深分を加えたものとなり、その立板が上から下まで一枚であったとの保証はない。井筒内の埋土は黄褐色灰色細砂・バイラン土で、深部はグライ化し、土師質土器皿の破片が1点出土したのみである。裏込中では遺物は発見できなかった。

c. VII-2 d トレンチの石組

第33図6に示したようにc面に併せて、上面を標高4.3mとする石組を検出した。最大長辺40cmの花崗岩の粗削材を、南北の両側の面を揃えて、幅55cmに組むもので、深さ30cmの溝の内に収まっている。本来は段を重ねてc面から露出していたものが、削平され、地覆部だけが残ったものと観察される。走行は東西であるが、周辺の石垣や他の郭内遺構に対しては軸が異なっている。この種の石組は土塀などの基礎によくある構造で、この石組もその可能性が高そうである。

また、同図に示された南のVII-2 b トレンチでは、c面から僅かに露出する20cm大の置石状の石材2個があり、周囲には炭を含む汚染土が薄く堆積していた。

以上の状況は、c面がある期間、実際に機能した郭内の生活面であったことを確証づける。このc面は、第22図1に示したすぐ南のトレンチのc面と、第22図5に示した西のトレンチのc面に統くことは、各々の土層関係や土質の特徴、それに高度の点でも、間違いない。第22図のc面は、西側石塀の郭内側石垣の構築に先行するから、一帯が平坦に造成された初期の段階にはVII-2 d トレンチ石組などの遺構が確かに造られたが、まだ石塀は構築されていなかったことが判る。なお、VII-22トレンチの石組は、層位的にはc面より古く、機能の特定は難しいが、これも平坦地形成より後で石塀より古い遺構である。このほか、層位の直接的連続は未確定であるが、状況として金蔵下層の井戸2も、石塀以前の可能性が高い。

d. 最下層期の南堀と土塁状高まり

まず、第33図3に示されるVI-2 トレンチで、南への地山の落込みを検出した。傾斜角は60度である。地山と同質の鮮明褐色バイラン土を置き、肩部を意図的に造り出している。

いっぽう第33図6に示されるVII-24 トレンチの落込みの傾斜は50度である。その肩部から北3mほどを据とする位置には、鮮明褐色で粗粒のバイラン土が地山の上に積まれている。高さ1.0mあるが、c面以下に埋まっている。この高まりは西隣で第33図5に示したVII-2 c トレンチに続き、c面の理解からして、堀が機能していた段階に岸の上にあった土塁の可能性が考えられる。

堀や岸を埋める土層を第33図6でみると、e面以深は均質な暗褐色灰色微砂である。その上のd面までは、同じく暗褐色系であるが細砂に加えバイラン土が混じり、そのまま岸上を覆う造成土となっている。その上のc面までの堆積は黄褐色系のバイラン上で、岸の高まりも覆ってしまう。c面以下の遺物はここでも少なく、最新のものとして16世紀代の備前焼片や瓦細片などがあった。

北の堀岸も合わせた状況は第18図に示されるが、トレンチ設定の制約などから、岸のラインの詳細は確定できていない。堀の間隔は最短部で14mほどと見積もれるが、一帯で検出した地山の高度と位置からして、南北に掘り割りが抜けていたとは考えにくい。したがって、堀の間は北西に延びる渡り土手状となり、その南寄りに土塁が載った可能性が窺えることになる。

第5節 油櫓～数寄方櫓櫓台下調査区

1. 概 要

この調査区は下の段西辺の北寄りを占める。絵図には南から内堀に沿う石墨の直線部に油櫓が示されている。その想定部を発掘したところ、近代になってから埋め込まれた郭内側石垣、櫓台を石墨一般部から区切る石組、内堀プランの変更があったことを示す櫓台の深部の埋没石垣などを検出した。また石墨下の郭内にもトレンチを設定して掘り下げ、絵図には示されない下層期の礎石列、郭の造成以前にあった最下層期の堀の埋土などを確認した。さらに、数寄方櫓櫓台下にも発掘区を設定し、高石垣に沿う石組溝を検出した。

2. 油櫓の櫓台（第36図）

a. 上面

郭内側石垣と石墨を区切る一対の低石垣を検出し、櫓台の規模が確定した。天端の外形で南北14.5m、東西4.5mである。修復櫓の北壁石組から、この櫓台の南小口石組までは54.7mの距離がある。

各辺の石材上面は標高7.2～7.9mの範囲にあるが、各辺とも天端石が失われた部分があり、本来は7.8m前後に全体が揃うか、その高さの内堀側に対して郭内側が20cmほど低かった可能性が考えられる。いずれにしても修復櫓よりは数十cm高い。南小口の石組は検出高が0.35m、北小口は同じく1.0mであるが、地覆部と天端の欠損部があり、本来の見かけ段差は0.6mほどに復元できる。

小口の石組は、南では1段しか残らないが北は2段で、石垣の体をなしている。築石は、東西の石垣と同等の大きさの花崗岩粗削材で、間詰石やこぶし大円礫による裏込も伴っている。

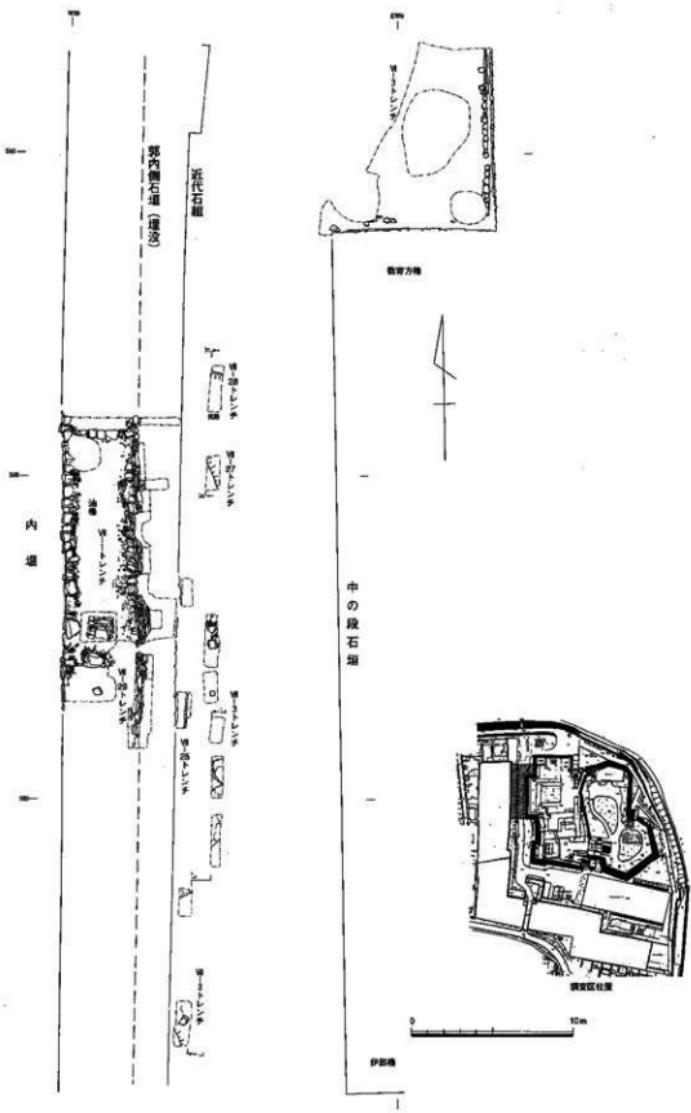
櫓台上では礎石は検出できなかった。南石墨上での礎石状石材1個を発見したが、意味は不明。

さて、櫓台の内堀側と郭内側の石垣直上に櫓の壁を想定した場合、その幅は絵図（第35図）に示された東西2間（394cm）とよく一致する。いっぽう、検出できた南北の低石垣の直上に櫓の壁を想定すると、その間隔はうまく7間（1379cm）で理解できる。ところが、櫓の南北は元禄絵図では6間半、寛保絵図では南北6間に示されている。第一に考えられるのは絵図が誤りであった可能性である。ただ、北の低石垣に櫓の北壁が載っていたとして南へ6間目の内堀側には、ひときわ大きな石材が、最も高い高度をもって残っていることが注目される。この大石は、後述の埋没石垣に関連して出角部を直線に改造した時に内堀石垣に残った縦目を上から塞ぐ要石で、長辺を内堀側に向ける。この大石を起点として東に遺構として残らなかった壁下構造が続き、そこに櫓の南壁が載って、寛保絵図の6間が事実であった可能性も考えられなくはない。その際は、櫓の南壁から南の低石垣まではちょうど1間で、その空間は櫓の入口前テラスと解釈できる。なお、両絵図とも南壁から1間半北の櫓内に仕切りが示されるが、南の低石垣に櫓の南壁が載ったとした際の1間半北は大石を越えてしまう。

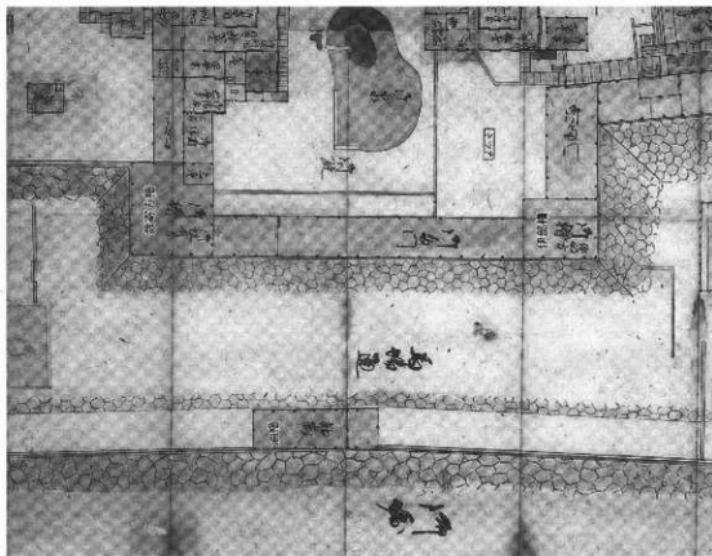
b. 櫓台内の埋没石垣（第38図4）

1996年に行った内堀の構造調査の際、油櫓の櫓台付近の内堀石垣で斜めにメジが通るのを発見した。南から延びる石垣にあった出角を埋め込んで、直線部に変更した痕跡と観察できたが、今回の発掘でそれを裏付けるため油櫓櫓台を掘り下げたところ、予想位置で埋没石垣を検出した。油櫓の櫓台は、内堀プランの改造を経てはじめて成立したことになる。

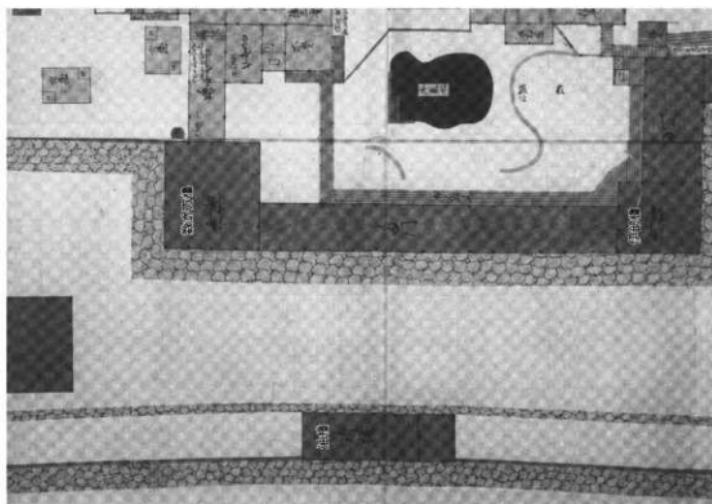
天端の内堀側大石の下には、旧出角の隅石が現地表で残るが、埋没部は段差をもって壊されており、



第34図 油槽～数寄方格格台下調査区平面 (1/300)

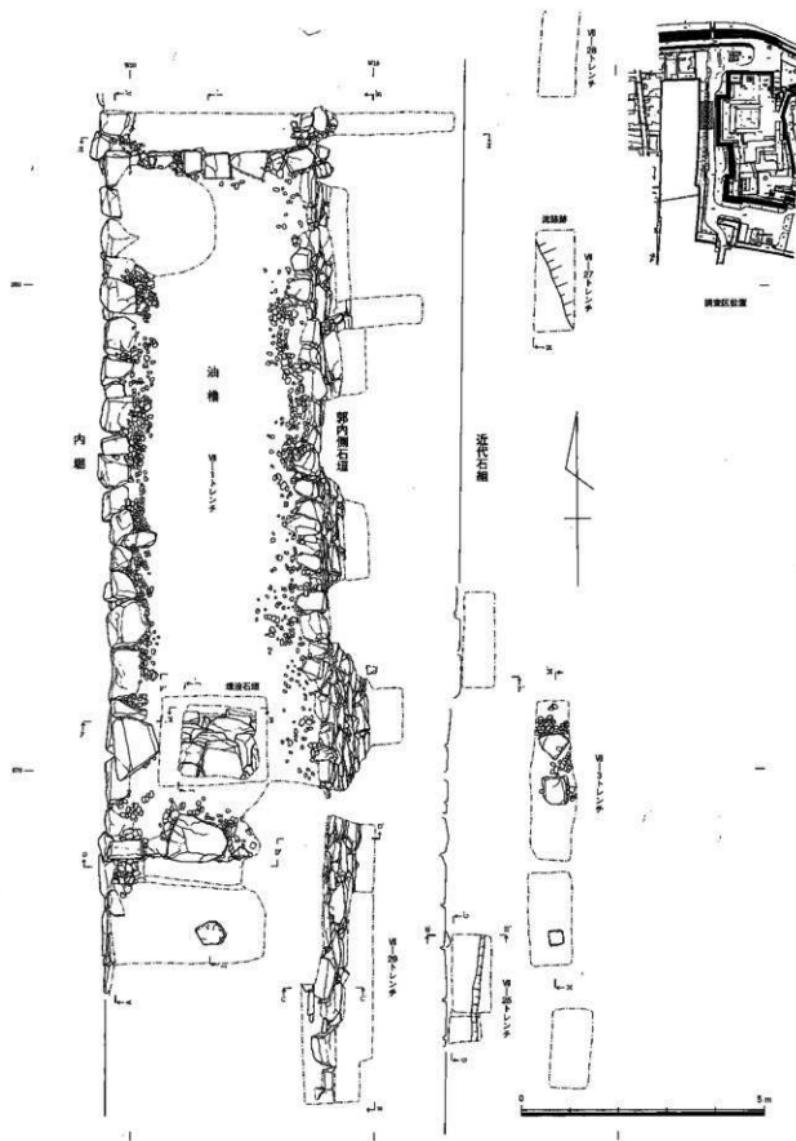


2. 御書院御絵図(寛保)



1. 御城内御絵図(元禄)

第35図 油槽～数寄方櫓橹台下周辺絵図 [岡山大学池田家文庫蔵]



第36図 油樽周辺遺構平面 (1/100)

地表下1.5mではじめて築石に到達した。高さ1.5m分まで発掘したが、その傾斜は65度で、内堀側の現役部と大差ない。築石は長辺70~100cmの花崗岩の自然石で、横積みされる。間詰石もきっちと施され、裏込はこぶし大の円礫である。旧出角の内角は90度あまりであったと判断できる。

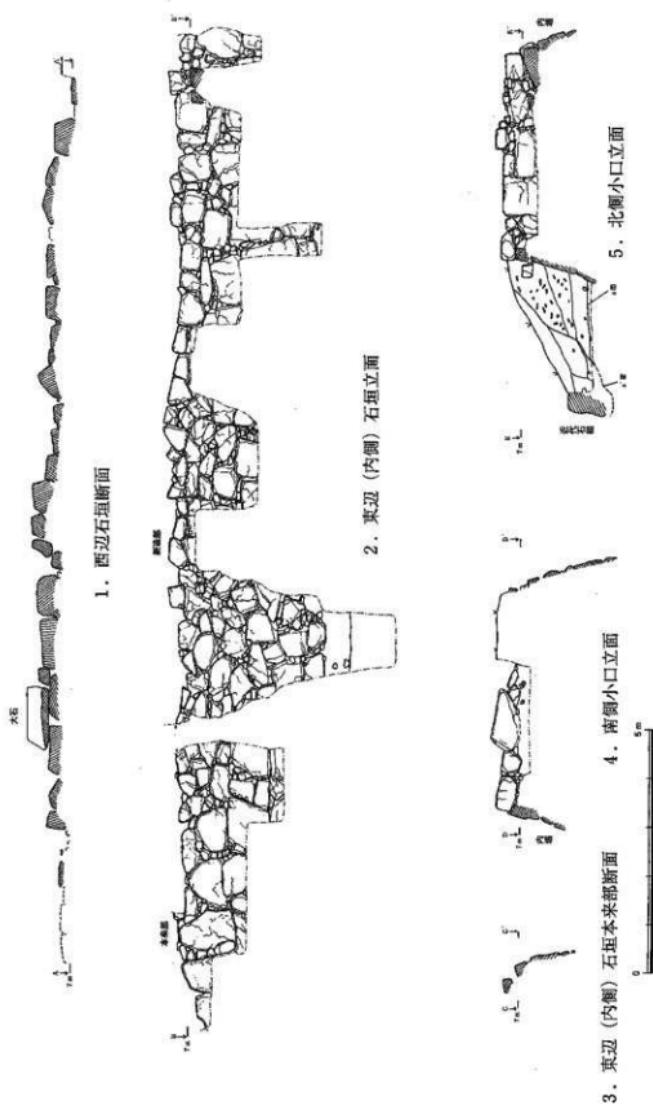
東の郭内側石垣の前面に設定したトレンチでは、郭内側石垣から下方1.5m下まで掘り下げたが、旧内堀石垣の延長は検出できなかった。そうすると旧内堀石垣は槽台内のトレンチのすぐ東で再び北に折れ、後の油槽の郭内側石垣に沿って延びていた可能性が強い。

c. 郭内側石垣（第37図2）

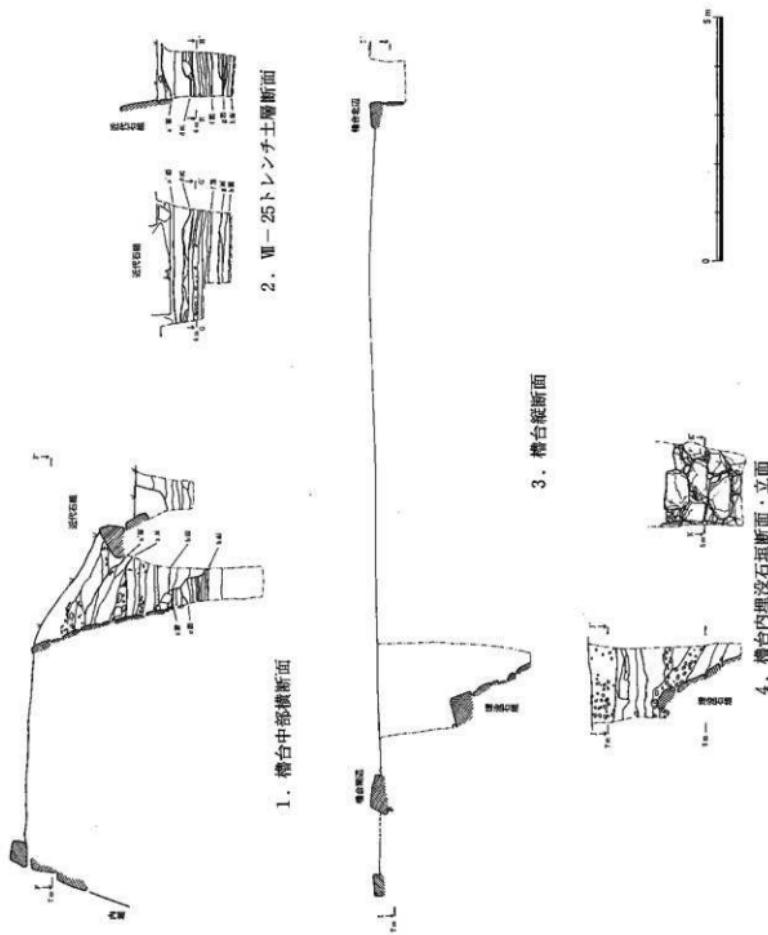
最下段下角は標高4.2~4.4mにあって、検出頂までの高さは3.2mである。内堀側石垣の出角が直線に変更がされたなら、組み合う郭内側石垣にあった入角も直線に変更された可能性が強く、現実に郭内側石垣は場所によって大きな違いがある。すなわち、当初の状況を示すとみられる南側では、築石が長辺1mを超える大きな扁平石で、立てられたものが多く、内下馬門周辺の郭内側石垣や修復際の郭内側石垣当初部と共通するのに対し、改造時に積まれたとみられる北に続く部分は築石の長辺が40~70cmと小さく、矢穴を持ったものも含まれて、7段前後に乱積みされている。

ただ、新しく積まれた部分と当初の構造を保つ部分の境界位置は判断が難しい。見かけではⅦ-29トレンチの北寄りに最も大きな変換部があるが、それ以北に当初石垣の入角があったとすれば、組み合う北の内堀側石垣との天端幅は最大でも2.0mしかなく、やや無理がある。むしろ、乱積み部の北側では再び築石が大形化し立石も含まれる状況から、古い石垣の石材を流用した個所には新造部でも立石を含むとみられ、見かけの変換部より南から新造部が始まる可能性もでてくる。いっぽう、Ⅷ-25トレンチでは、石垣当初部の構築当初の生活面と考えられる層位（d面）で、南北に延びて西に落ちる段を検出し、これが入角・出角を経て再び北に延びていた当初石垣の抜き取り跡の可能性も考えられる。その場合の入角はⅦ-29トレンチの南寄り以前にあったことになり、そこから北の内堀側石垣までの天端幅は最低でも5.0m、折れを経て再び北へ延びる石墨の天端幅は3.0m前後となる。

第38図1・2に示した上層堆積は、c面とd面が石垣構築当初の生活面で4.3~4.5mの標高がある。この面を造るのは黄褐色灰色バイラン土と暗褐色灰色微砂による互層で、その下のf面は石壁構築以前で、一帯を平坦地に造成した最初の生活面の可能性がある。その下のh面まではバイラン土が混ざるが、h面以下は均質な暗褐色灰色の細砂・微砂で深部はグライ化し、最下層期の堀を埋め立てた造成土と判断できる。第38図1のa面は明治維新まで踏襲された生活面で、c面との間に暗褐色灰色微砂・細砂を主体に暗黃色灰色バイラン上層を挟んで江戸時代前期の瓦片を含む造成土が、上には幕末までに作られた大量の瓦や陶磁器、漆喰片を大量に含む暗褐色灰色の細砂が堆積する。b面はc面から地上げを経た一時期新しい生活面で、意味不明の掘り込みを伴っている。また、石垣前面のa面は、郭内のトレンチで確認されたa面より0.5mほど高く、江戸時代のうちに石垣根の根固めのための籠土があつたことが判る。現役の近代石組を造った時の地表もしくはその掘り方がa'面で、石組構築に伴う上砂によって、郭内側石垣は完全に上砂に埋没し、現在の状況になった事が判る。



第37圖 油槽各部立面・断面 I (1/100)



3. 油槽の下方郭内

a. VII-3 トレンチの礎石列（第39図2）とVII-27・28 トレンチ流路（第39図3）

礎石は石墨構築当初の生活面のc・d面に置かれ、造成土を入れてb面を生活面とする段階に機能していたとみられる。長辺60cmの石材が2個、その北に一辺30cmで方形の石材が1個検出された。北から半間-1間半の柱間が想定できるが、本末は半間の等間隔で礎石が並んだ可能性もある。

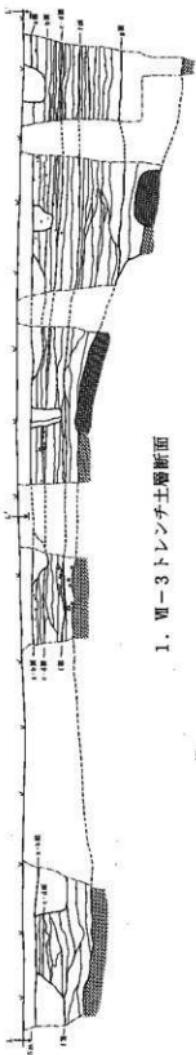
VII-27・28 トレンチではc・d面に肩をもち、埋土の主体を黄灰色細砂や黄灰褐色微砂の自然堆積とする流路を検出した。トレンチ内での両岸の走行は揃っていないが、幅3~5m、深さ1mほどとみられ、大局的には北から南に流れたものと判断できる。層位的には、既に石墨が完成し機能している段階であるが、江戸前期内葉の旭川の洪水が郭内を襲った痕跡に違いない。埋土の上面には鮮黄褐色バイラン土がごく薄く敷かれており、災害復旧後の生活面を整えたとみられる。

b. 最下層期の堀

第39図1に示される一連のトレンチでは、地山は南が高く最大4.1mの標高があるのに対し、北は1.9mまで落ち込んでいる。一帯での地山は風化が進んでいるが、まだ岩盤の体を残す個所もある。ここでの落ち込みは、人為の程度が良く判らないが、他のトレンチで確認できた状況からして、最下層期の城郭の堀として機能したには違いない。埋土は、h面までが暗灰青色の微砂・シルトで、上にはバイラン土を混えた暗褐灰色の微砂などが堆積し、f面が堀を埋めてでき上がった当初の生活面と判断できる。f面は標高4.3mから4.0mまで旧地形を反映して北に緩やかに下がっていき、さらに北方で第39図3に示したトレンチでは3.7mまで下がっていく。f面以深の埋土には遺物が少ないが、16世紀代までの瓦細片や陶磁器が含まれる。f面段階にはまだ西側石垣の石垣はなく、石垣構築当初の生活面はc・d面である。c・d面もf面ほどではないが、やはり北に向かって緩やかに下がっている。

4. 数寄方櫓檜台下（第40図）

高石垣に沿って石組溝を検出した。石垣側は石垣をそのまま溝の側壁とし、外側にだけ石組が造られて、底は土床である。南辺は攪乱を受けて石材が残っていない個所が多い。東辺の北寄りには構造の変わり目があり、北は豊島石材を用いるのに対し、南は花崗岩材である。変換部の上方には、高石垣の上部に突き出す暗渠の吐水口がある。豊島石部は、くり抜き式断面U字形溝材の半裁品を用い、実質的な溝幅は0.4m、深さは0.3mである。花崗岩部の石材は、長辺20~60cmの粗削材であるが、組み合った高石垣の築石より加工度が低い。実質的な溝幅は0.3m、深さは0.25mほどである。吐水口からの水落にあたる花崗岩部北端は、底に平石が置かれ、上には両隣よりもやや外に石材が及ぶよう小石材が4つほど配されている。この溝は、石材上面が標高5.33~5.40mで、全体として南辺西端から東辺北端に向かって水を流す緩やかな傾斜をもち、明治維新の城郭破却時に機能を停止した。



1. W-3 レンチ土層断面

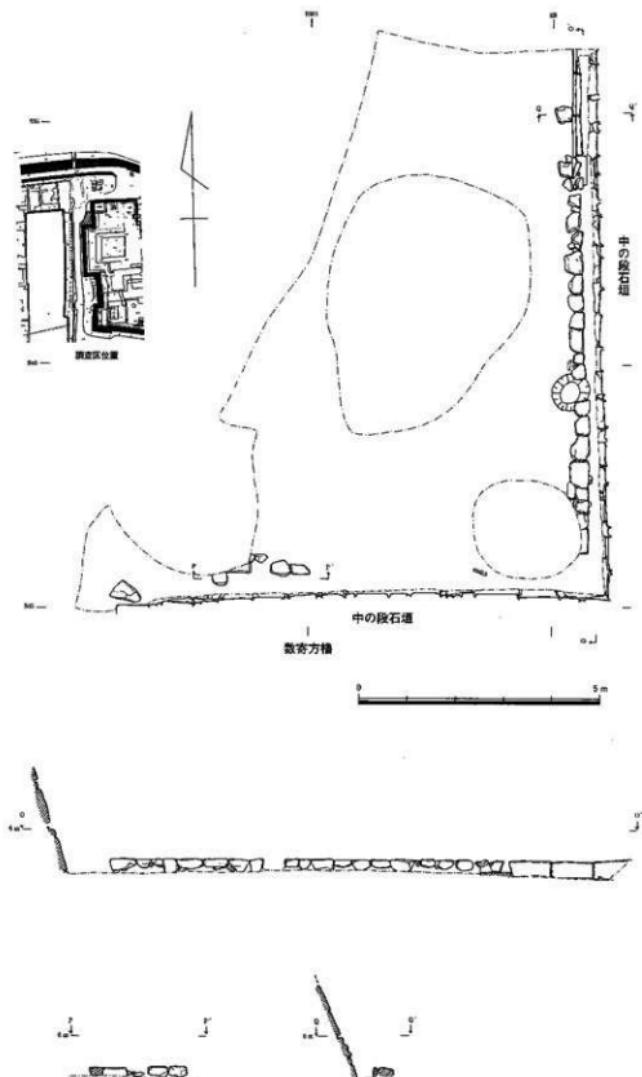


3. VII-27・28 レンチ土層断面



2. 油槽東南下層鍾乳石断面

図39 図 油槽東側内レンチ土層断面 (1/100)



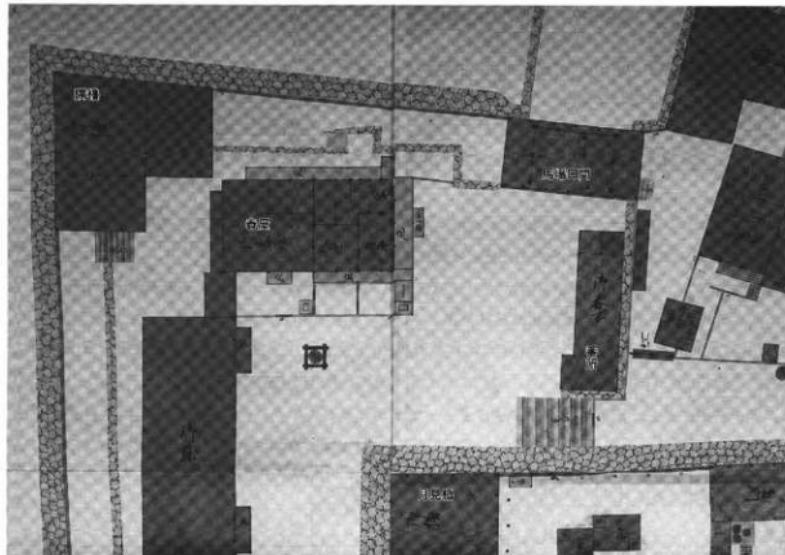
第40図 数寄方櫓格台下調査区平面 (1/100)

第6節 春屋～馬場口門調査区

1. 概 要

この調査区は下の段の北東部を占める。近代の河川改修で失われたが、本来の内堀はいまの北端を超えて北に延び、東に折れ込んでいた。その東岸に向かって門扉を構えていたのが、本丸櫓手門の馬場口門である。西には内堀に沿う石塁が取り付き、東には一部が現役の石垣段が南北に延びていて、門の檣部が渡されていた。門に至るルートは、旭川と内堀の間の土手を西から廻り込むもので、門前は内堀と花畠隅櫓によって固められている。門内の正面には中の段の高石垣が聳え、その頂部西隅の月見櫓、東隅の小納戸櫓、その間に組み込まれた石造銃眼から迎撃するのに適した配置である。門内の東脇には、南北の段石垣に沿う番所があり、その西の道筋は、中の段高石垣に沿って東に上る雁木に続くが、雁木の上端には城中の仕切門がある。西側の閉鎖こそ不完全であるが、馬場口門内の広場は全体として拵形に擬せられる。門内の西脇には春屋の建物があり、その南には井戸があった。

発掘調査の結果、現地表から1.5mあまりも下で明治維新を迎えた時点での生活面を検出した。各石垣頂部との比高は現況より遙かに高かったことになり、軍事的な達成度が、絵図から受ける印象を



第41図 春屋～馬場口門周辺の御城内部絵図(元禄)【岡山大学池田家文庫蔵】

超えて高度なものであったことが判る。東半部では、発掘位置の限界や搅乱に阻まれて、門礎や西側石垣は検出できなかったが、路面の漆喰張りや石組排水溝、番所やその付属施設の石組や礎石などを検出した。東の段石垣は、上部が近代の改造で走行が変わっていたが、下部は当時の構造を保つことが判明した。しかも、当初の構造は中の段高石垣の下端を超えて南に一直線に延びていた。西半部では、石組井戸や春屋に関わるとみられる石組を検出した。

2. 春屋周辺（第43図）

a. 石組井戸（第44図1・2）

対応生活面は5.1mほどの標高がある。井筒は、そこから深さ1mあまりまでが壊されており、石積みの高さにして0.7mぶん、平面でも半分しか検出できなかった。内法の直径0.9mの円形で、長辺0.3m前後の花崗岩方形割石を横に積むが、裏込の状況は確認できていない。本末の井筒の深さは、予想される水位との関係で、5m前後と見込まれる。井筒が埋められたのは戰前のことで、中学校に関わるインク瓶や牛乳瓶が暗褐色土と共に投棄されていた。

井筒の上角から2.0mほどの距離をおき、井筒を取り囲んで弧を描く石組排水溝を検出した。内法幅0.25~0.4m、深さ0.15m内外で、底には明褐色塗喰を張り詰めている。石材は長辺30~60cmの花崗岩で、一部の面は粗削りによっているが、井筒の石材に比べれば丸味をもっている。これを一段一列に置いて側壁を造り出すが、石材のさらに内側にも上面を揃えた同様の石材が残り、本来は井筒と溝の間は全体が石敷であったとみられる。土層断面では井筒石材の背後からこの敷石の下部を固める明褐色塗喰が暗灰~暗褐色の微砂・シルト層と互層を成すのが観察できる。

溝や石敷は、一部しか発掘できなかったが、井筒の全周を取り巻いている可能性が強い。また発掘した弧の内では溝床は南より北が11cm低く、井戸の排水は西の蔵の地下もしくは北西の春屋との間を通り、さらに西の石垣を暗渠で抜け、内堀に注いでいたものとみられる。

b. 春屋の壁石組と石組排水溝（第44図3~6）

V-21 レンチで東西に延びる石組を検出した。長辺40~70cmの花崗岩割石を組むもので、検出できた最高位が標高5.2mの一段であるが、天端を保つ状況ではなく、もう少し高くて段積みがあったと判断できる。北隣の石組溝材の高さからすれば、いま残っているのは、むしろ地覆部である。北側の面が揃えられ、背後には裏込状の石材を伴っている。西側を中心に搅乱で損なわれた個所が多いが、検出東端は本来の角部であった可能性がある。春屋の北壁が載ったものと判断されるが、検出した東端は元縦絵図から窺える春屋の東端位置よりもまだ東で、問題が残る。

先の石組に対し、石組溝は軸が20度ほど振って斜めに延びている。西は調査区外に続き、東は搅乱で壊されている。溝幅は0.25~0.30m、底は土床、石材上面の標高は5.12~4.97mで検出部の半ばが高く、東西に分流していた可能性がある。石材は長辺30~100cmの花崗岩粗削材で、石組と同様に矢穴は観察されない。これを、一段一列に裏かせ置いている。

このほか、第44図5に断面を示したラインでは、溝や石組に隣接して配石が検出されたが、機能は特定できない。

c. 春屋中心部の土層堆積（第44図7）

V-20 レンチでは、春屋に関わる可能性をもつ石材が散乱するが、元位置を保つものは検出できなかった。第44図7のa面は、明治維新まで踏襲された生活面ないしは搅乱到達面である。その下の

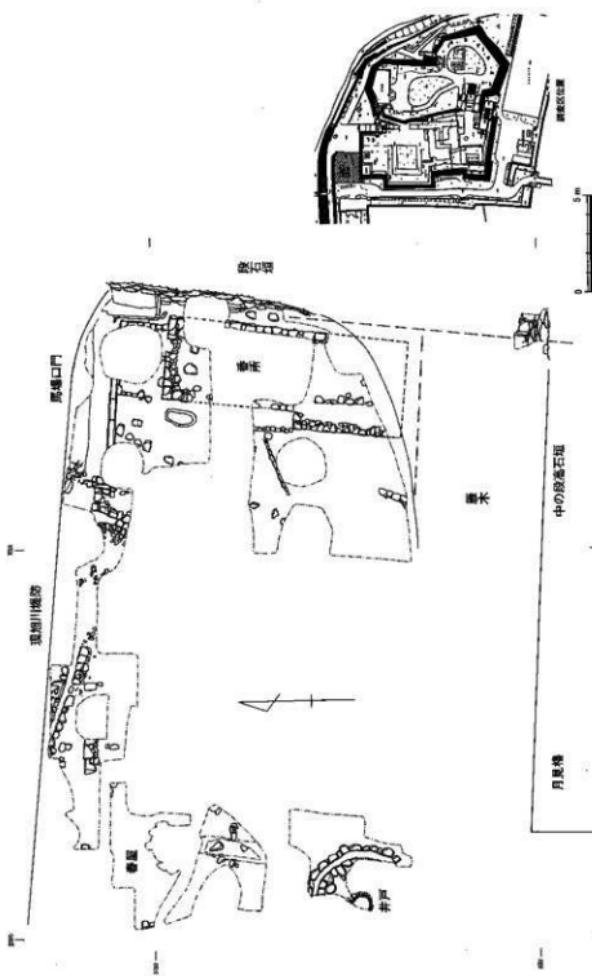
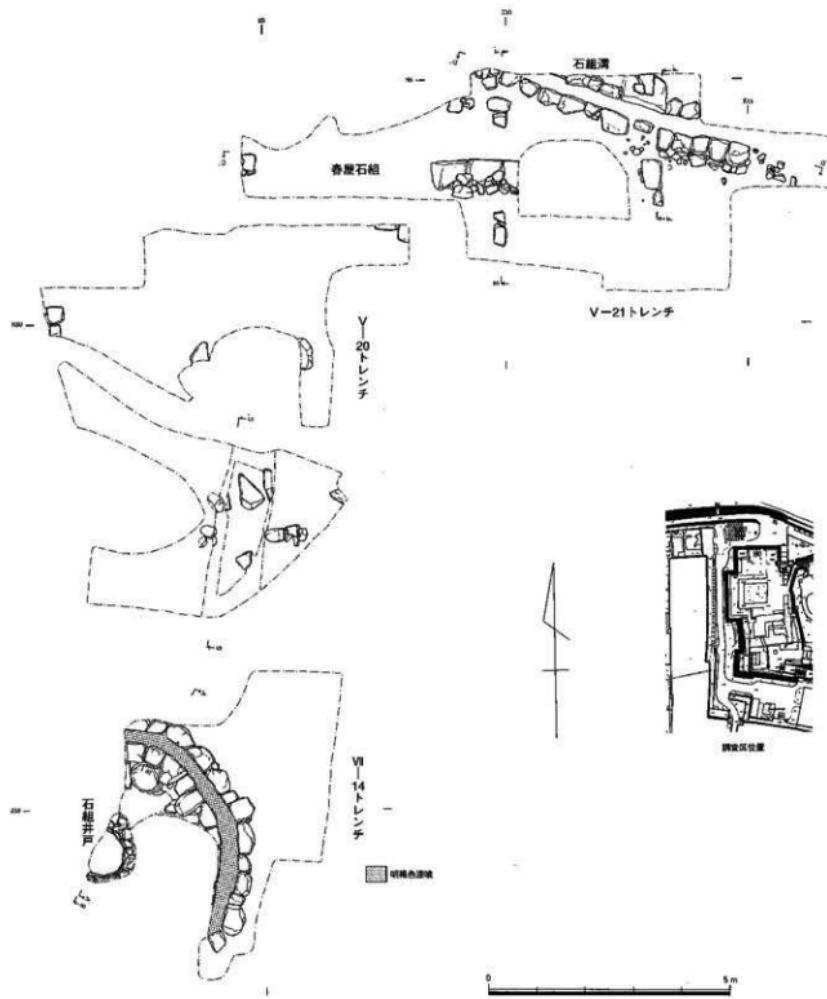
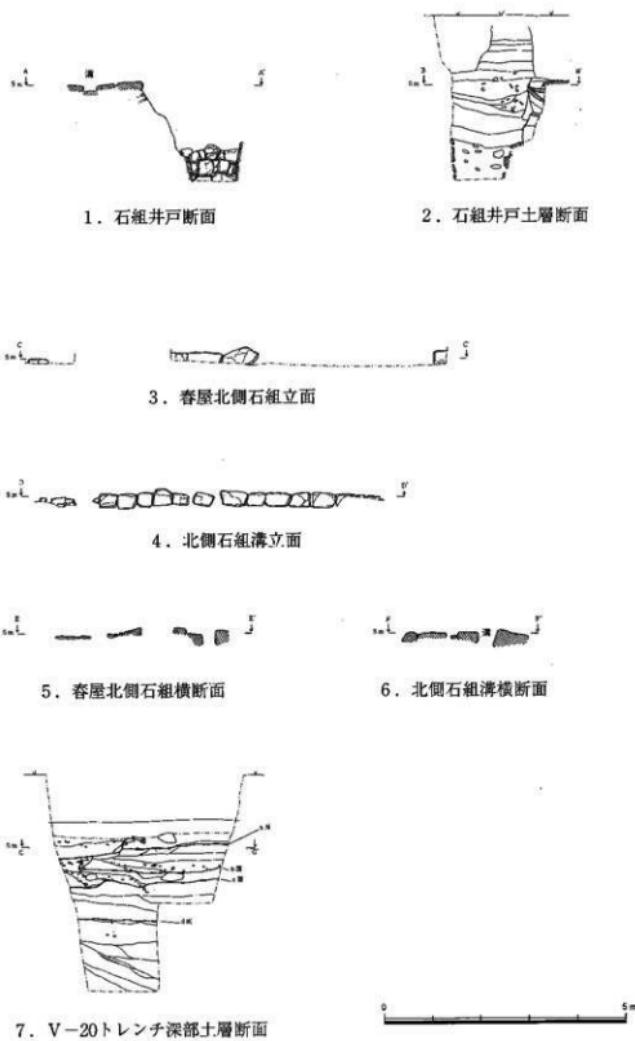


図42 春屋～馬場口門周辺調査区平面 (1/250)



第43図 春屋周辺造構平面 (1/100)



第44図 春屋周辺造構立面・断面 (1/100)

b面までは暗褐色～暗褐黄色細砂に江戸前期前葉の瓦を含む造成土、さらにc面までは黄灰色細砂・パイラン上で、やはり江戸前期前葉の瓦を含む造成土が堆積している。c-d面間はパイラン質土も少量混えた黄灰色微砂・シルトであるが無遺物で、d面以下は流水による自然堆積と判断できる灰色中砂・粗砂、それに黄灰色微砂が検出された。d面以下の堆積は堀内埋土と郭内を襲った洪水による流路の両方の可能性が考えられるが、少なくともb面とc面は江戸時代前期前葉の郭内生活面で、とくにc面は番所の東の段石垣基部で確認できる石垣構築当初の生活面と対応する可能性が強い。

3. 馬場口門内（第45図）

a. 門の路面

東西に延びる石組溝から北に限り、馬場口門の路面化粧とみられる漆喰張りが検出された。その範囲の東西は8.6mで、西は豊島石製石組溝、東は段石垣に付加された石積み段に画されている。この路面幅は絵図から読み取れる門柱間が4間前後の規模観と矛盾しない。

石組溝は、門の檐部南縁付近に当るとみられるが、以北で発掘した限りでは礎石は発見できなかつた。ただ、検出漆喰の西北端は攪乱が及んで石材も散乱し、溝の北1.5m付近に控え柱の礎石があつた可能性がある。いずれにせよ門扉は発掘区の北、旭川堤防となっている場所に想定される。

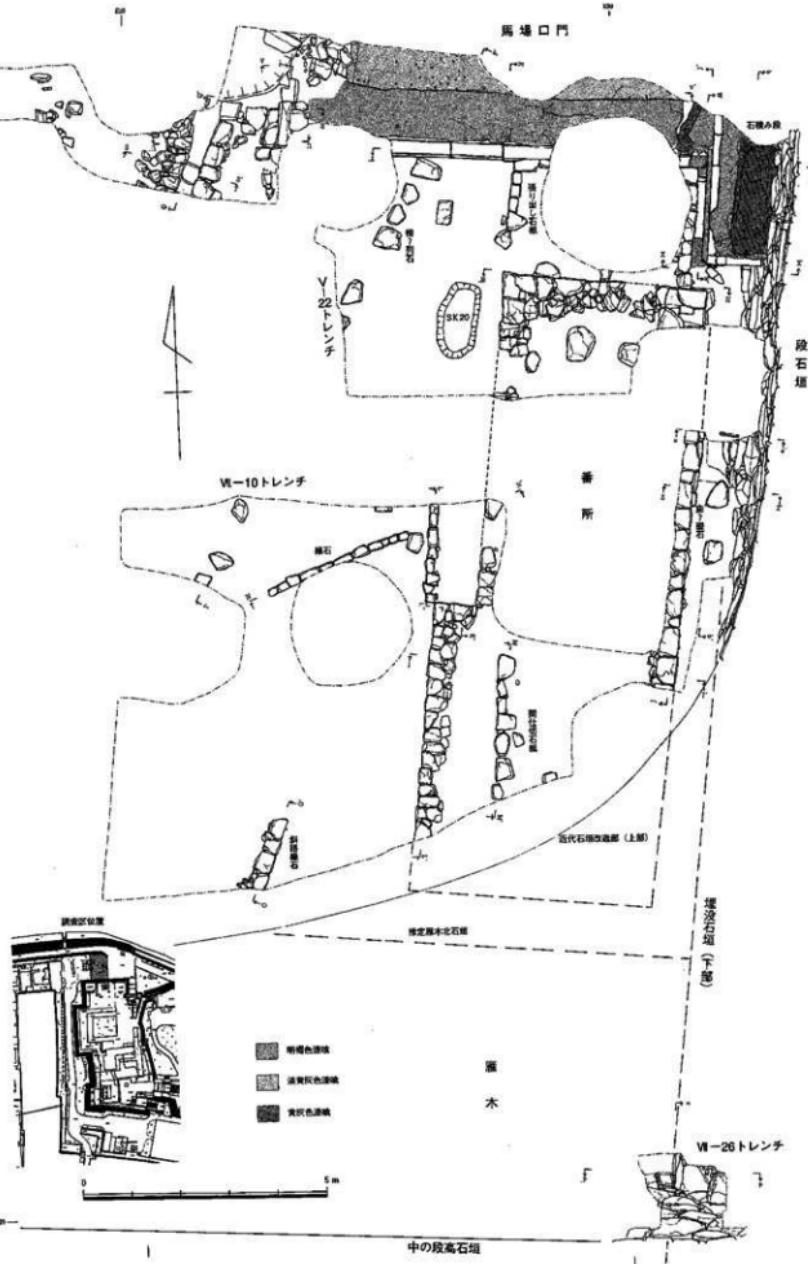
漆喰張りは標高4.40～4.62mで、東西では西が僅かに低く、南北では溝から0.6m付近が最も高く、南の溝側と北の門扉側に傾く。漆喰の色は場所によって違い、時期を異にする補修の結果とみられる。溝から1.0m幅は明褐色で、重なりから北の淡褐色漆喰より新しい。ともに上面に滑り止めとして貼られた径3cmほどの小円碟が残る個所があり、脱落痕らしき窪みも広範に観察できる。漆喰南端の溝縁での厚さは8cmもある。路面はその厚さぶんだけ石組溝上端より高く、溝はその厚さの蓋をもつ暗渠で、路面は平坦なまま溝を越えていた可能性が強い。

b. 石組溝

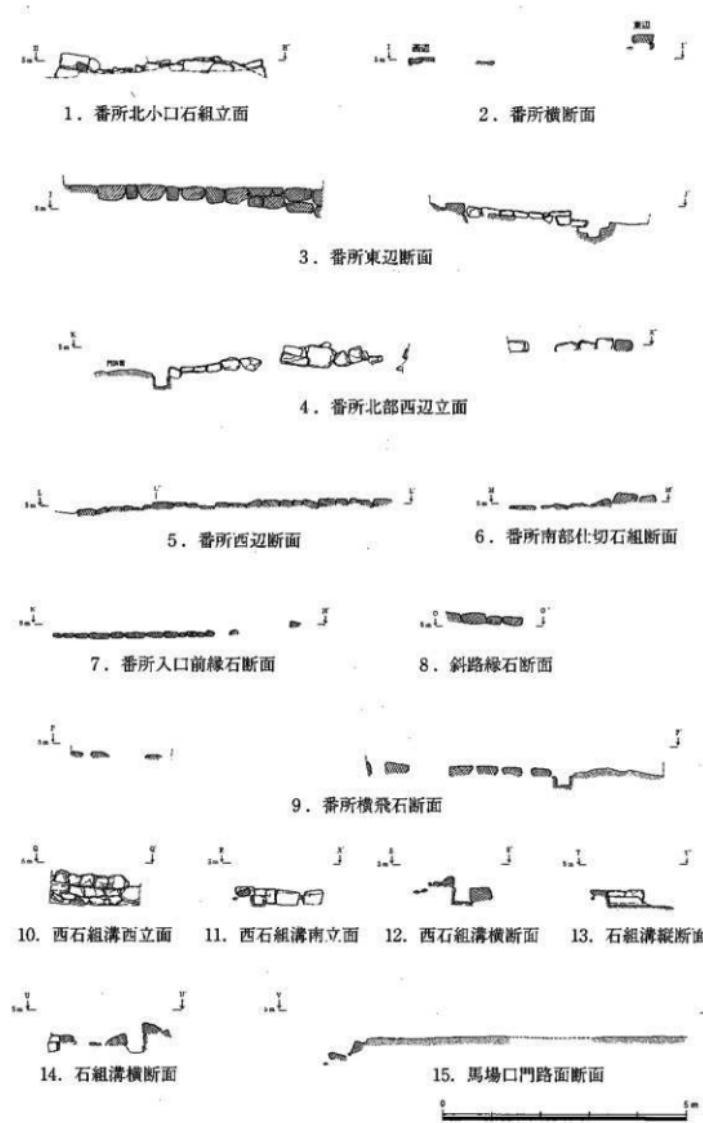
漆喰張り南の石組溝は、豊島石くり抜き式の専用材を組むものである。専用材は長さ1m強、内法幅25cm、深さ20cmのU字形で、両小口には接合のための段が切られている。溝の東は石積み段に当たった位置で専用材は終わるが、そこで石積み段と番所張り出し部の石組とによる南北溝に移行する。移行部は側壁・床面とも漆喰で塗り込められている。南北溝は内法幅15～20cmで、底は十床を基本に漆喰が張られた所もあり、段石垣と番所石組がなす幅0.8mほどの隙間に続いている。

溝の西は、漆喰張り南縁から専用材のまま直角に北に折れるが、その両縁は専用材の上にさらに石材が積まれて、深さが35cmほどに増加する。東に対して溝底を下げながら、溝縁の路面高はできるだけ水平に保とうとした結果と思われる。専用材による南北部は2石ぶんしか残らないが、その北側の石材は西壁が打ち欠かれ、西からの別の石組溝が取り付く。

取り付く溝は、長辺20～50cmの花崗岩粗削材を組むもので、南壁の一部を除いて破壊されているが、先述した春屋の北の石組溝から続くものと判断される。いっぽう、専用材との合流部の1mほど西には、南南西からさらに別の石組溝が取り付く。その溝はやはり粗削材を組むものであるが、東西で構造が異なる。すなわち東壁は、石材が長辺50cm内外と大きく、石材頂部が標高4.5mと東に続く門路面の高度と揃っているのに対し、西壁は石材が小さいものの高さ0.7mの3段積みで、石材頂部の標高が4.85mもある。このことからすれば、この溝を境として生活面に段差があり、東の馬場口門内の路面より、西の春屋が建つ面が最低でも35cm高かったとみられる。



第45図 馬場口門周辺遺構平面 (1/100)



第46図 馬場口門周辺造構立面・断面 I (1/100)

一連の石組溝は、走行が複雑で枝分かれも多く、場所による構造差も激しいが、東の段石垣や番所方面からの雨水と、西の春屋方面からの雨水を、馬場口門南西に先ず集め、門の通路西脇を北に迫って、内堀に排水する体系であったと判断できる。

c. 番所の基礎石組と付帯の石組・礎石

外面を揃えて矩形に延びる堅固な造りの石組が検出され、番所の外壁が載ったものと判断される。北辺は外形幅4.3mで、東辺は発掘した長さ8.3mが直線に延びるのに対し、西辺は北端から6.8mのところで西に0.9m張り出す。南辺は発掘できなかった。石材は矢穴を伴わない花崗岩の粗削材で、角の稜は鋭い。東辺と北辺は石材が大きめで長辺40～60cmのものを主体とし、長辺を横に取り、特に東辺北寄りから北辺では二段積みで、ほぼ垂直に立ち上がる低石垣の体をとり、背後の控え石材も大きき入念に組まれている。いっぽう、東辺と西辺の南部では検出できた限り一段で、とくに西辺南部は石材が小さめで小口を外に向けるものが多く、控え材も少ない。

西辺から北辺の石材頂部の標高は、5.1～5.2mでよく揃って、本来の天端付近であることを予見させる。対する東辺も本来の天端を保っているとみられるが、南に高い傾斜をもち、北端の5.2mに対し南の発掘端では5.5mにまで達している。その結果、第46図2に示した位置での石組上面は東辺と西辺で0.4mもの段差が生まれている。西辺の天端も木本はもっと高かった可能性を考えても、石組基底の高低差は歴然と存在するから、石材が大きい東辺側が一段であるのに、西辺では小さな石材の上に段積みを想定する必要があり不可解である。

番所石組の西辺南部の内側1.5mに西端が崩れられた石組があり、間仕切りに関わる可能性が考えられる。石材や上面高は番所石組西辺と同様である。

番所石組の内側北寄りには、長辺70cm級の石材が2～3個検出された。上面高が隣接する番所石組と近似し、礎石にも思えるが、据えられた状態との保証はない。

番所石組の外側では、その北辺に付加されて北に張り出す石組がある。石材は長辺25～40cmの花崗岩粗削材を主体に、豊島石材が混ざっている。石組は、それを一段に横置きするもので、上面高は番所北辺石組より5～10cm低い。やはり外面を揃え、その外形は東西3.8m、南北2.5mで、北縁は石組溝の南縁に揃えられ、厳密には豊島石製溝材に載っている。

番所石組の東側、段石垣との幅0.8mほどの隙間に、礎石と思われる、長辺50cm級の石材を3つ検出した。その上面は標高5.0m前後で、番所東辺石組上面より0.3～0.4m低い。層位のうえでは、明治維新を迎えた段階まで地表に露出していたと判断され、石組に示される番所の東辺に庇があり、それを受け柱が1.2～1.5m間隔で並んでいた可能性が考えられる。なお、最北の石材は第47図5の土壁壁図作成後に壁奥でかろうじて検出したもので、同図には示されない。

西側では、番所石組の張り出し角に取り付く南北石組と、南西から延びてその南北石組の半ばに取り付く斜方石組を検出した。いずれも石材は、豊島石の加工材を主体とし、一部に花崗岩の粗削材が混じるもので、長辺20～50cm、幅20cm前後の方形である。その長辺を軸にとて一段一列に並べている。南北石組の上面高は番所西辺石組より10～15cm低く、斜方石組の上面高は南北石組への取り付き部ではそれに崩うが、そこから南西に向かって數センチ下がっていく。また南北石組と斜方石組の接合部には高さを揃えて長辺40cmの礎石状石材がある。これらは番所の入口に関わり、南北石組は玄関のステップ縁石（～庇の雨落ち）、斜方石組は取り付く通路の縁石とみられ、あるいは礎石状石材は庇受け柱の礎石であったかもしれない。南北石組の北方は、石材が検出できず、本来の端部が判らな

いが、延長線上で検出されたSK20は深さ0.3mほどの土壇で、幕末期の陶磁器や瓦が出土した。幕末もしくは明治の城郭破却時のゴミ穴とみられる。

番所石組からさらに離れた北西では、豊島石の東西溝に端を発し南南西に延びる列石がある。石材は長辺30~60cmの粗割りの花崗岩、上面は平滑で礎石状である。かなり高密度の配石で、上面は北端部で標高4.6mと満対岸の塗喰路面にほぼ揃い、発掘端の4.85mに向かって南に上っていく。通路の飛石にも思えるが西縁が崩る傾向から難があり、遺構に即せば柵か塀が想定できる。

番所石組から南西に離れた位置でも、南南西に延びる石組を検出した。長辺40~50cmの花崗岩粗割材を横に組むもので、東側に面をもち、裏込石も伴っている。石材上面の高度は5.15~5.3mで、南に向かって高まっていく。高石垣に沿う階段に取り付く斜路の縁石であった可能性が考えられる。

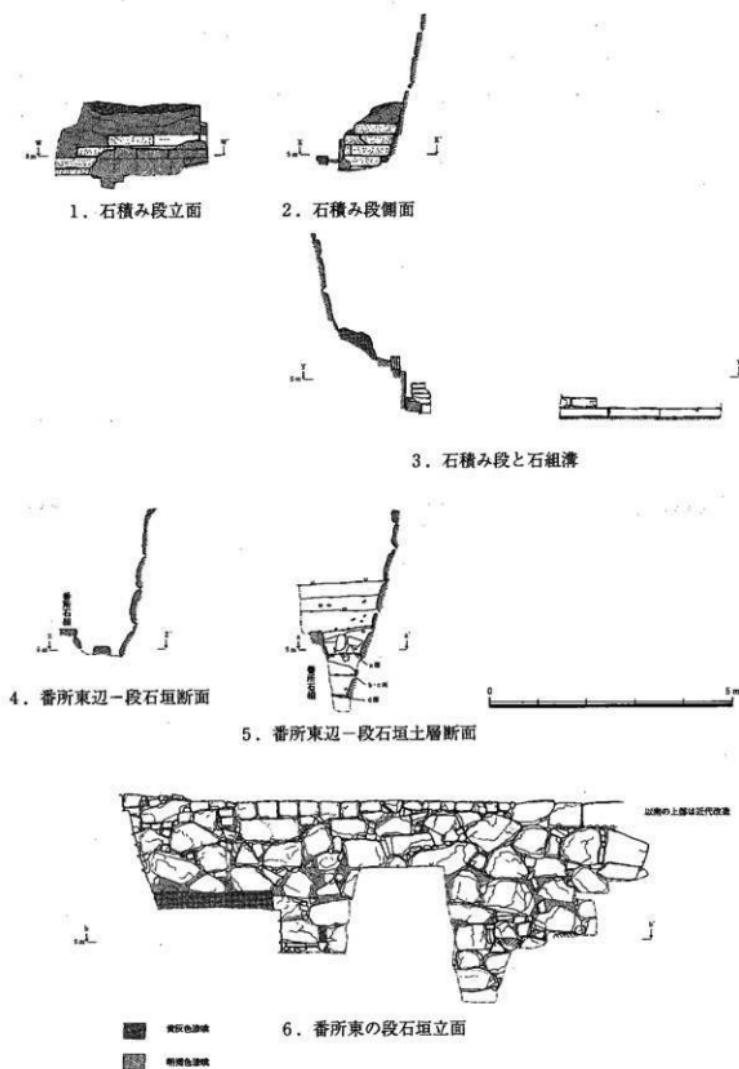
絵図に示された番所は南北7間で、北壁が東西2間であるのに南壁は2間半弱で、南1間半が西へ張り出している。発掘された番所の本体石組の外角やや内側に壁を考えると、1間を6尺5寸とした場合、北壁は2間、予想南壁が2間半となって絵図と一致する。また北辺石組から南へ7間に南辺石組を想定することは、南の高石垣との距離感からして、絵図と矛盾ない。しかし、西壁の張り出しは絵図では北角から南へ5間半で始まるのに、石組は3間半で始まっている。絵図の標記が誤りであった可能性、石組北辺から南へ5間半の位置は発掘区の外になるため絵図に適った石組が別にある可能性、絵図以降に番所の南西部が作り替えられた可能性などが考えられる。とくに最後の可能性は、西辺南部の石組の石材が小さなことや石材高度の東辺との段差の問題とも関連して注目される。

絵図には南西屋内の石組に当る表現はないが、柱や壁を考えると、西壁からは0.75間ほどで整数値にはならない。本体石組北辺に取り付く北側石組は、絵図に示された北壁から南へ1間の屋内間仕切との関連で注目されるが、北の石組溝に示される馬場口門上屋や南の高石垣との距離観、北石組の幅と長さなどからして、絵図に示された番所北壁が載ったのは、北側石組の北辺ではなく、本体石組の北辺と判断される。そうすると北の石組は、元禄以降に番所に付加された小部屋（1間6尺として東西2間）の壁が載った可能性が考えられる。絵図では番所のすぐ西は広場として示され、西辺前面の石組が示す番所入口付近の構造や広場を東西に区切る表現はない。発掘された列石を柵・塀とした場合、門内の主通路はその西側となるが、それでは幅が2m程度といよいよ狭くなり、番所の視界を遮ることにもなる。事実とすれば、番所の北への建て増しや玄関部の列石なども含め、門内の軍備や整然雄大さより、番所の運用面が優先した新しい時期の構築物と評価できるかもしれない。

d. 石積み段（第47図1~3）

東の段石垣に付加して造られた構造で、塗喰で塗り込められている。南壁は門内東西溝から2mほどの位置にあり、西壁は馬場口門の通路端を両して北の発掘区外に延びている。石材は、長さ50~90cm、幅は等しく22cm、厚さも等しく15cmのブロック形にノミ加工された豊島石で、小口には接合のためのホゾが切ってある。これを横に積み、南壁では高さ1.1m、最大5段が確認できるが、基底は前面の塗喰張り路面より深く、もう一段ぐらいいは埋もれている可能性がある。また、南壁の上から2段目では、石材小口が直線でなく鉤形に加工され、見事な接合が観察できる。石積みの立ち上がりは垂直で、南壁長は1.1m、西壁長は3.1m以上である。

明褐色の塗喰が西壁の半分と南壁の西寄りの一部を覆っていたが、本来はその全面に施されていた可能性がある。塗喰の厚さは11cmほどで、裏の石積みのメジとは一致せずに塗喰の施工単位を示すとみられる横筋が20cm前後の間隔で観察できる。



第47図 馬場口門周辺造構立面・断面II (1/100)

石積みの上部も漆喰で固められ、石材頂部より40cmも高く盛り上がっている。この漆喰は2種類あり、芯部の黄灰色漆喰が、石積み側を被覆する明褐色漆喰より古い。

上部の漆喰も合わせた石組段の頂部は、6.1mの標高があり、西前面の漆喰路面から1.5mの高さをもち、東の段石垣の現頂部から1.8mほど低い。

以上は明治維新を迎えた段階での状況とはいえるが、整美な石壁を当初から漆喰で覆うことは不可解であるし、漆喰頂の形態も構築物の一次状況としては違和感があり、さらに漆喰にパックされた頂部石材が天端の体をなさないことからすれば、当初の石積みは天端がもっと高く整って積まれたもので、遅れて上部の石材が失われ、その後処理として明褐色漆喰で塗り込められたとみられる。

この遺構の機能は段石垣の崩落防止であろう。構築場所は、背後の段石垣上に門の檜部が載り、その階下の通路に面するという重要な位置に当たっている。構築による通路幅の減少を最少に食い止め、意味では垂直壁は機能的である。また見た目を問う点では、豊島石加工材や成層積み、垂直壁も効果的であるが、遅れる可能性が強い漆喰の天端処理や漆喰剝離部の放置では度外視されている。

e. 段石垣（第47図6）

石垣の走行は、いまは南北に延びる直線部に対し南が曲線を描いて西に向かうが、元禄絵図や戦前の校内図では、さらに南まで直線で延び、背後に階段をもち西から延びる石垣とはほぼ直角に接合していた。曲線が始まる場所を発掘した結果、戦後に積まれた高さ2mほどの石垣上部とは又分かれして、石垣下部が絵図通りさらに直線で南に延びて、遺構として残っていることが確認できた。

直線部の上部も、石材や積み方から後世の積み直しを受けている可能性が強いが、それは天端から1m前後に限られるよう、以深で江戸時代の構造を保っているとみられる部分には、築石の隙間に漆喰が目貼りされている。漆喰は明治維新を迎えた段階での地表高付近にまで分布し、城郭破却時の造成土に埋まる部分があるから、けっして近代に入ってからのものではない。石積み段の漆喰と一連のものとして、石垣補強のつもりで施されたに違いない。ここでも漆喰は二種類あり、明褐色のものは、やはり黄灰色より新しくて広範に及び、表面に径3cmほどの凹凸が嵌め込まれた部分もある。

石垣の最下段下角は標高3.95mで、そこから今の天端までの高さは3.90mある。先の様に上部は後世の積み直しを受けたとみられるが、動かされていない築石の頂部が崩っているわけでもなく、明治維新を迎えた段階での天端高は、けっこう現状と同等かそれ以上と見込まれる。

本来の構造を保つ部分の立ち上がりは75度ほどで、弱い反りをもつ。築石は長辺60~100cmの花崗岩の自然石と粗削材である。矢穴を残すものはない。横に積まれたものが多いが、傾くものもある。下の段の隨所で多見できる立石はみあたらぬ。間詰石はぎっしり詰る状態ではなく、漆喰施工時までに脱落したか、その際に半端なものが意図的に抜き取られた可能性が考えられる。

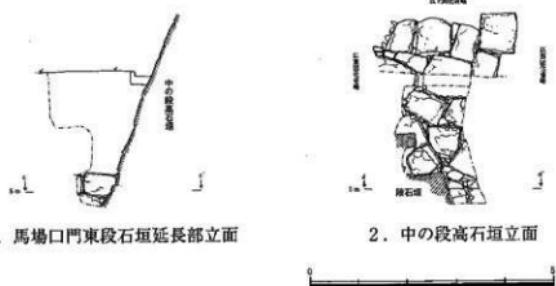
第47図5に示した前面の土層堆積をみると、a面は明治維新まで踏襲された生活面で、幕末までの瓦や陶磁器を大量に含んだ暗褐色細砂で埋まっている。a面からb・c面間は、上から順に暗褐色細砂と暗黃褐色細砂が堆積し、17世紀初頭の前池旧堤とみられるコビキBの瓦を含んでいる。b・c面からd面間の造成土は無遺物の暗黃褐色バイラン細砂で石垣の最下段をほぼ埋め、b・c面が石垣構築当初の生活面であった可能性が強い。石垣構築当初には、上のa面に伴う番所の東辺石組はまだ成立していなかったことも判る。d面をつくる薄層は鮮黃褐色のバイラン上で、その下には暗褐色で均質な微砂が堆積する。石垣最下段はd面から浅い掘り方をもって据えられている。d面は、石垣構築当初の生活面であった可能性も残るが、それでは最下段の埋まりが浅すぎ、石垣構築のための

作業面か石垣に先行するさらに古い生活面の可能性が強い。

f. 段石垣の南延長部（第48図）

中の段高石垣の下に設定したⅦ-26トレンチでは、段石垣の延長とみられる石垣を検出した。石垣の位置は、石垣北部から一直線である。発掘位置は、絵図などに示された中の段石垣に沿う階段を東に登り切ったところで、明治維新を迎えた段階では既に埋没していた石垣である。頂部は5.4mの高度で、北の現役部天端や現表土から2mあまりも深く、前池田期の瓦を含む造成土で埋まっている。検出できた築石は2段だけであるが、ものはや基底に近いと判断できる。長辺70cm級の花崗岩粗削材を横に積み、立ち上がりの傾斜も含めて、北の発掘区Ⅶ-10トレンチでの状況と大差ない。

この石垣は、中の段の高石垣に覆われながら、南東に延びていく。中の段高石垣は、一边50～100cmで矢穴を隨所に伴う方形度の高い割石で、積み方や間詰石なども含めて、段石垣延長部とは全く異なるものである。また両石垣が同時性をもつたなら、双方の石材が入角で噛み合うか、小規模な段石垣の方がむしろ高石垣に当たって終る構造の方がふさわしい。石垣間の切り合いは、時期差をもつものと判断できる。すなわち、段石垣は中の段高石垣より古い時期に築かれ、当初は恐らく北部と同じ高さをもち、もっと南まで延びていたものを、中の段の高石垣が構築される段階になって、上部石材が外されたと考えられる。その時、接合部付近の段石垣を完全に除去することは容易であったと思われるのに、そうしていないことからすれば、例えば絵図に示された雁木の前身構造に関わって、ここに1mあまりの段を残す必要があった可能性が窺える。その後の時期もしくは工程で、段石垣に直交する東西石垣が付加され、高石垣との間が段石垣残部とともに埋め込まれ、東西石垣との入角以北だけが段石垣として露出するに至ったと考えられる。絵図に示されるのは、この最終段階であるが、北の発掘区で判明した番所の石組が、段石垣構築当初より層位的に遅れる事実とも整合してくる。



1. 馬場口門東段石垣延長部立面

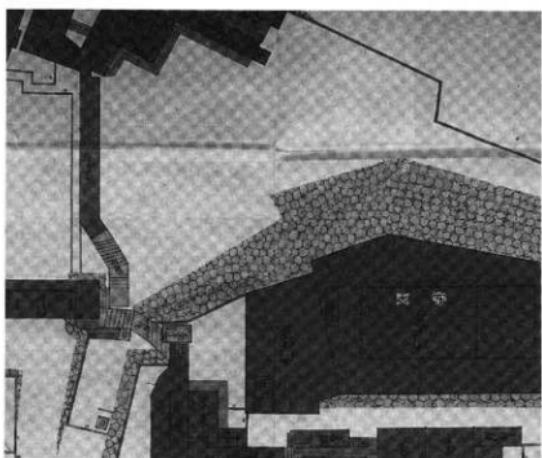
2. 中の段高石垣立面

第48図 馬場口門東石垣南延長埋没部と中の段石垣の接合部 (1/100)

第7節 天守台石垣～廊下門東脇調査区

1. 概 要

下の段の北部にあたる。調査区の東には、下の段から一気に立ち上がる本段石垣があり、上には天守が建っていた。また、西方は中の段と本段が接合する掲手筋の括れ部で、廊下門が建っていた。廊下門は、中の段から東の門脇土台にかけて櫓部が渡され、階下の門扉を北に向ける構造で、1966年に天守と同じく模擬建築が建てられた。廊下門の東脇台と天守台の間は自然石を積み上げた本段側の石垣が続くが、その崩落防止の



第49図 天守台石垣～廊下門東脇周辺の御城内御絵図（元禄）

【岡山大学池田家文庫蔵】

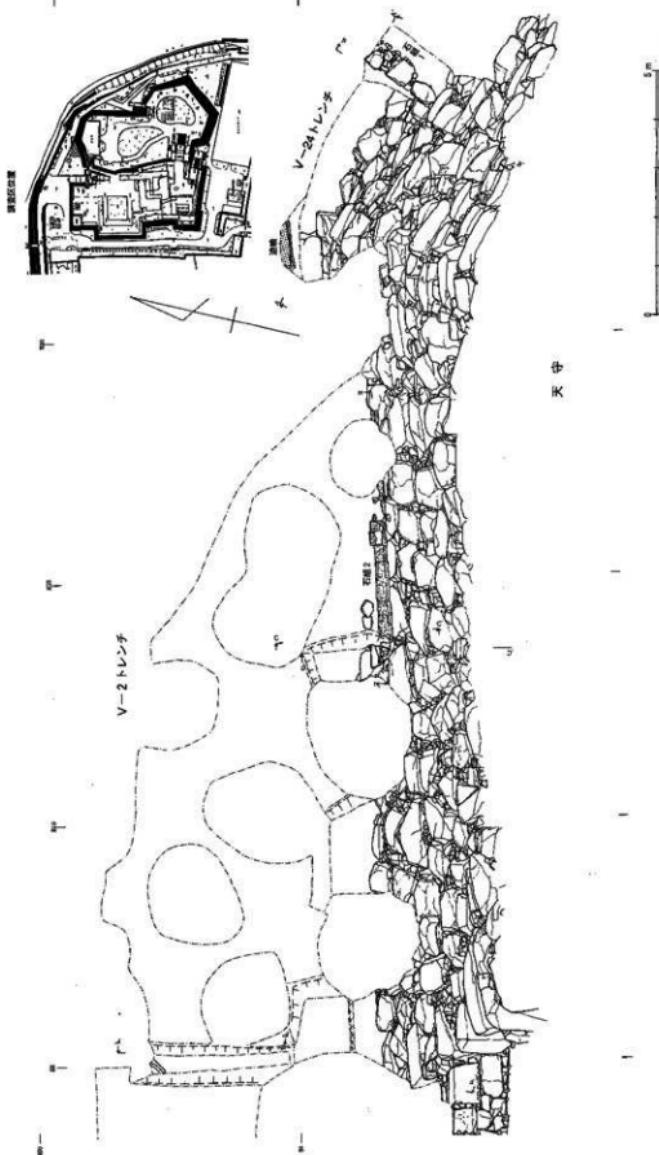
ため割石積みの外被石垣が積まれている。天守台石垣、廊下門東脇石垣、外被石垣のそれぞれ前面を発掘し、基底の状況を追求した。なお、絵図では本段石垣前方には建築物ではなく、廊下門東脇に花畠御殿に降りるための渡り廊下が示されるだけである。

2. 天守台石垣（第50～52図）

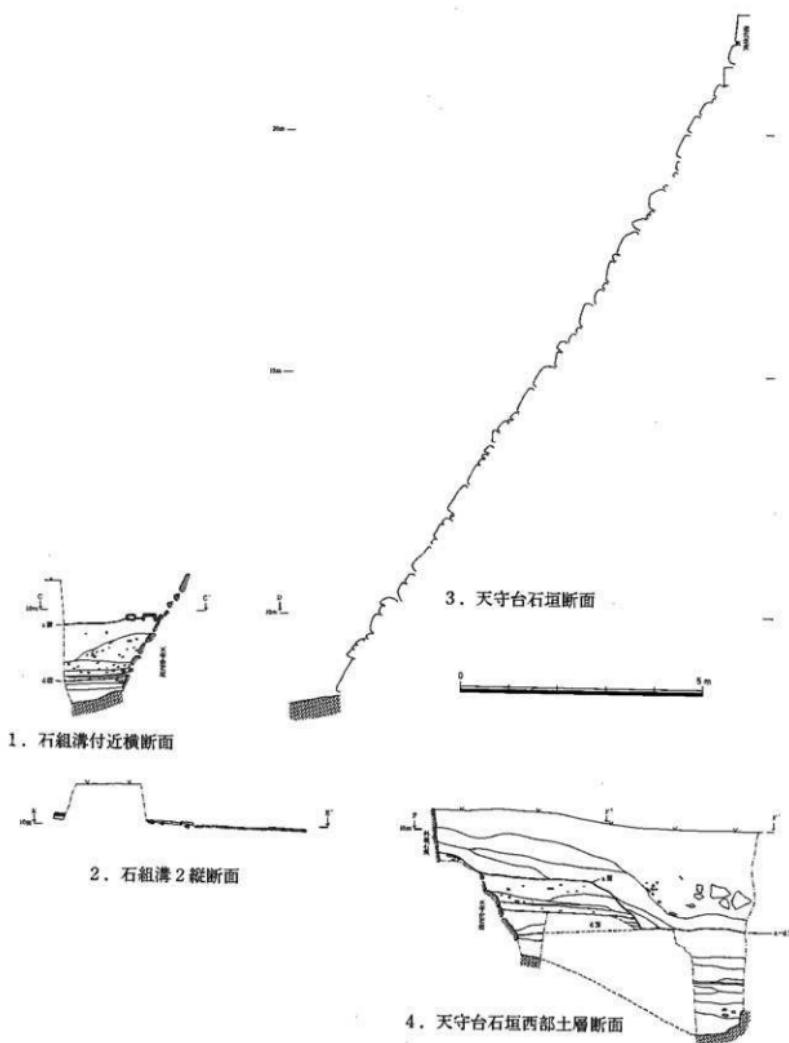
a. 石垣本体

北西の出角から天守真北のシノギ角を東に廻り込んだ位置まで発掘した。

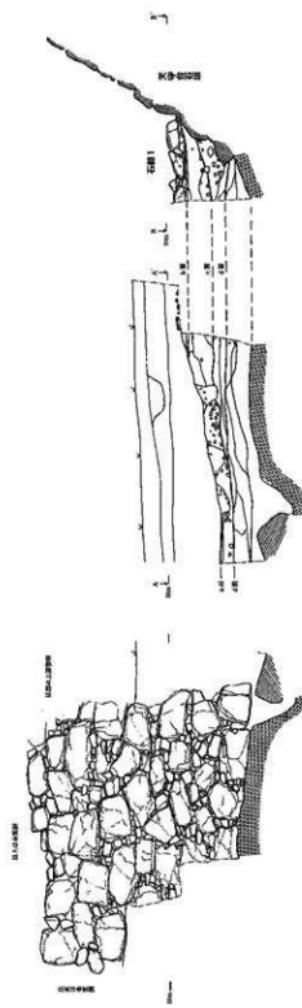
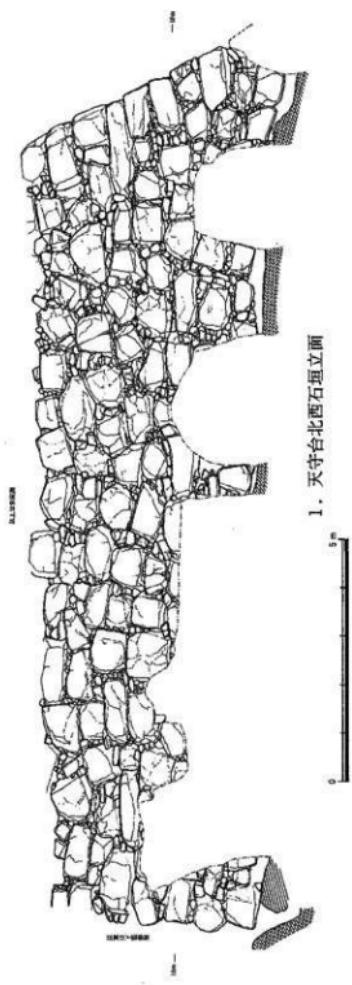
基底部でみると、北西辺は長さが18.5m前後あり、北西出角の折れはほぼ90度であるのに対し、北のシノギ角は内角145度ほどである。最下段築石下角の標高は、北西辺が7.6～8.3m、北東辺の発掘区内が8.3～8.6mで、水平ではなく、東に少しずつ高くなっていく。最下段石材の下には暗褐色バイラン細砂などが堆積する場所もあるが、これは石を据えるための調整土で、基本的には全体が地山に載っているといえる。一帯の地山は風化が進んだ鮮明茶褐色土で、未風化で岩盤の体をなす部分が一部にある。地山整形を除いて、最下段の下に特別な下部構造をもったり、最下段がやや前方に置かれるといった事はない。例外は北のシノギ角で、最下段は石垣面より前方にも及ぶ巨石の上に載っている。この巨石は長辺1mを軽く越える平滑な花崗岩自然石で、一回り大きく地山に据られた深さ0.9mの穴に据えられていた。巨石は厳密には北西辺側にあるが、最下の角石の重量を確かに受けており、最重要の石垣角の根石として、加えて施工時の角の位置ぎめ石として機能したと考えられる。北西出角に同様の石があったかどうかは発掘限界との関係で断定できないが、西北辺側でみる限り気配は薄く、地山が0.4mほど段落ちに削平され、むしろ最下段の角石自身が深く据えられている。



第50図 天守台石垣平面 (1/100)



第51図 天守台石垣立面・断面 I (1/100)



3. V-24 レンチ断面

第52図 天守台石垣立面・断面図 (1/100)

北西辺では、いまの天端の標高が22.5mあり、最下段下角からの石垣高は最大14.9mである。傾斜角は59度で、天端から3石は傾斜がやや急である、それを含めた頂部2mは模擬天守建設時に動かされていて（結果としての天端高は変わらない）、ほんらいは最下段から天端まで一直線で反りを全くもたなかったとみられる。石垣上では模擬天守建設時に地山が標高20mほどで面的に確認されているから、最上部の2.5mほどを除いて、石垣は背後を地山に持たせて積まれていると判断される。

築石は花崗岩の自然石で、ごく粗いハツリ程度の加工を経たものを少量含む。角が人為的に鋸いものや矢穴を残すものはない。長辺は55～200cm、主体は100cm前後、長方形に近いものが多い。

角石は一般部築石より大きいが、その差は極端ではない。いずれの角とも、角石の長辺を一段ごと左右に振り分け、算木積みを指向している。上下の角石に挟まれる角脇石は1石もしくは2石であるが、積み方や石材の大きさなどが一般部の築石と同様で、特殊化していない。

一般部での築石は横に置かれるが、顯著な横メジは通らない。3～4石ぶん横メジが通る部分もあるが、その際は水平ではなく傾斜をもつ。天端まで見渡しても、立石らしきものはない。

地覆部に残る当初の間詰石は、長辺30cm以下の花崗岩・流紋岩などの角礫が目立ち、少量のこぶし大円礫が混ざっている。石垣面に備えて入念かつ高密度に施されている。現役部では間詰の脱落や別石材への置き変わりが顯著で、かなりラフとなっている。また、明治維新まで踏襲された生活面以上では、築石間に淡褐色の漆喰で目貼りした個所がある。馬場口門内の段石垣と同じく、江戸時代の後半期に石垣補強のつもりでなされた可能性が強い。

b. 石垣前面

石垣の前面は、近代に入って0.7～2.0mも堆まっている。明治の造成土とみられるものも多少あるが、空襲で焼失した天守の廃材が上から落ちたり落とされ、加えて1964年から始まった模擬天守建設時の残土が投入されたことが主因である。場所によっては、焼き膨れた天守所用の瓦が最大0.5mの厚さで累々と堆積し、戦火の痕跡を物語る。

第51図1・4と第52図3のa面は、明治維新まで踏襲された生活面とみられるが、この面に伴って、北のシノギ角付近で漆喰張りと石組1、北西辺の半ばで石組2を検出した。

漆喰張りは厚さ2～3cmの明褐色漆喰の上に厚さ1～2cmの淡褐色漆喰を上塗りするもので、上面は8.9mの高度で、ほぼ水平である。当時のシノギ角下端から1.6mほど北に側端をもつ。シノギ角との関連で位置が決まった特殊部の路面化粧とみられ、これを境に東に向かって路面が上がっていく。その坂を登り始めた位置で、傍郭に直交して南北に延びるのが、右組1である。長辺50cm級の花崗岩自然石を一段一列に横置きし、こぶし大円礫による裏込も伴って、西側に面を揃える。この石組には、仕切塀が載った可能性が考えられる。元禄絵図では、ここに仕切塀の表現はないが、東に次のシノギ角にはその表現があり、記載の間違いや時期差による移転が考えられる。

石組2は長さ90cmの豊島石くり抜き式の溝用材を裏返して組むもので、当時の高石垣下端に接して組まれている。長さ4.8m分が残っていたが、本末は長く延びていたと思われる。検出部での上面の標高は10.2～9.9mで西に向かって下がり、この段階の生活面が、地下1.5mに埋まった地山の傾斜をまだ踏襲しているのが判る。ここでの排水溝を暗渠とすべき理由はみあたらず、また内部は土床で狭く、さほど機能的であったとは思えないが、やはり排水溝であろう。

a面以下の上層堆積をみておくと、第52図3では地山からd面の間は無遺物の鮮褐色茶色粗バイラン土や褐灰色バイラン土で、d面は高石垣構築当初の生活面と判断できる。その上のc面までは角礫

や円礫を混える暗褐色バイラン土、さらに上には明褐色茶色バイラン土が堆積する。b面を造るのは明褐色ほかのバイラン土と暗褐色細砂による単位の細かな互層による化粧土で、b面はある段階の生活面であったとみられる。その上に石組1の石材が置かれ、裾を埋めて出来上がった生活面が、明治維新まで踏襲されたa面である。なおc面も、生活面であった可能性がある。

第51図1・4では、地山からd面までは暗褐色茶色～明褐色のバイラン土が堆積するが、瓦片はいっさい含まれず、d面が石垣構築当初の生活面と判断される。d面からa面の間は暗褐色細砂や明褐色バイラン土などの互層で、d面以下から一変して、16世紀末の宇喜多秀家期から17世紀前葉の前池田期までの瓦を大量に含み、高石垣は宇喜多秀家期のものとの判断と整合性をもつ。とくに、下部では少量であるが金箔おし瓦なども含まれる。d面からa面までは、一気に造成されたのではなく、江戸前期のある段階の生活面が挟まれている可能性もある。

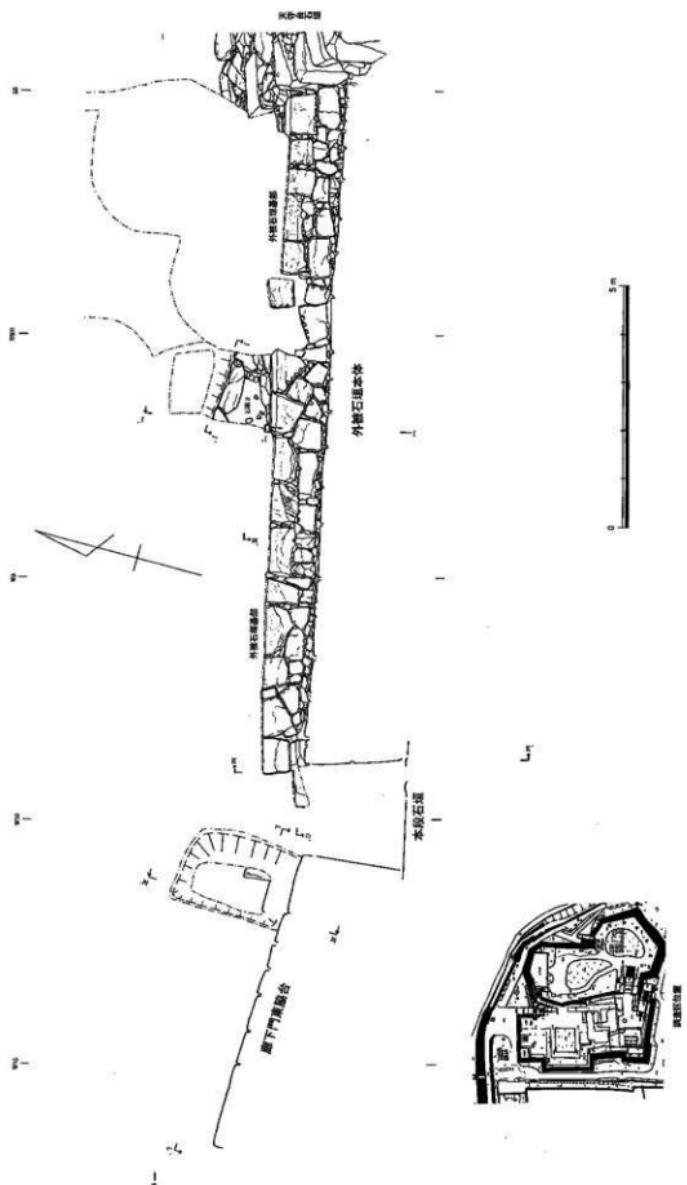
3. 外被石垣（第53～55図）

天守台石垣は北西出角から南に折れ、4mほどの位置に入角をもち、西南西に延びる本段石垣に続いている。その本段石垣の崩落防止のため、前面に接して築かれているのが、この外被石垣である。本体部の前面に基部を作り二重構造で、重なりは本体部より基部が新しい。両者は、時期差をもつ可能性も残るが、状況とすれば工程上の前後関係で、もともと一連であった可能性が強い。

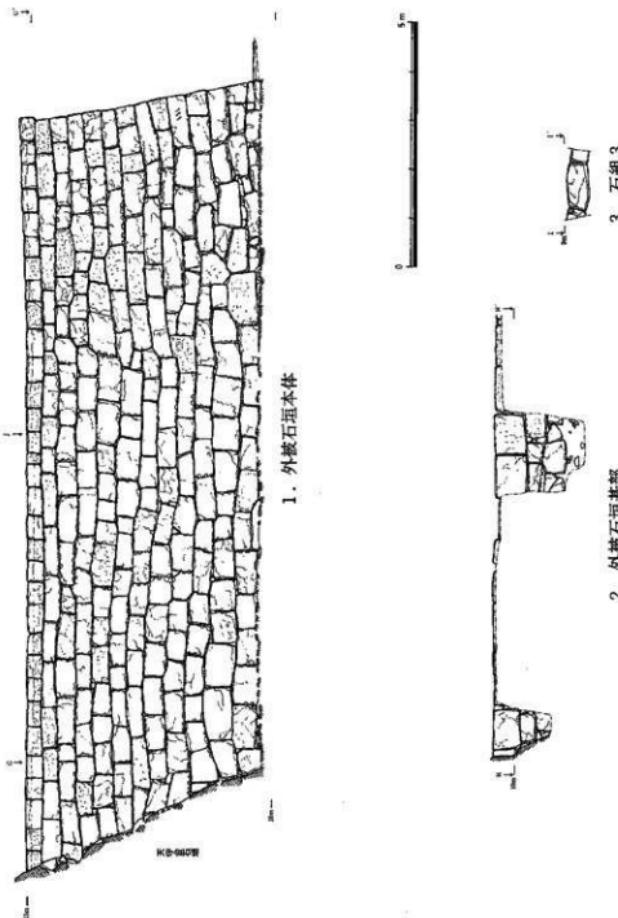
本体部は、東端が天守台石垣に接合するのに対し、西は独自の端部を持つ。天端の長さは15.5m、天端での奥行きが1.3～1.5mある。天端は西ほど微妙に高く、標高15.0～15.3mで、背後の本段石垣の天端よりはまだ3.0mほど低い。基部上面からの高さは4.9mであるが、基部下端からでは6.3mほどとなる。立ち上がりは55度前後で、背後の本段石垣より微妙に緩い。築石は矢穴を随所に伴う花崗岩の割石で、色調などの特徴が揃って单一の石切り場から供給されたとみられる。矢穴の幅は隣の廊下門東脇台や中の段北部の高石垣に近い10cm級のものがある一方、6～7cmと狭いものも含まれる。面はノミで平滑に加工されているが、切石の域には達していない。大きさは、背後の本段石垣より小さく、石垣面での見かけの長さは40～140cm、高さは25～60cmである。こうした築石は横に積まれるが、隣の石材との高さは良く揃い、横メジが端から端まで良く通っている。メジは水平を軸に微妙に波打つが、天端石の一段下ではじめて水平をつくりだす。間詰石はごく一部で長辺30cm級のものも含まれるが、築石間の擦り合わせが高度なぶん、小さく少ない。天端石は小口積みで、専用材として加工され、上角が丸く上面も平滑で、少なくとも西端のものは、下の石材と合わせるために、段がくり込まれている。裏込は観察不能であるが、本段石垣までの全体に充填されているに違いない。

基部は、発掘前では幅0.9～1.1mの石敷に観察されたが、それを天端とする高さ1.5m、傾斜角85度ほどの三段積み石垣であった。築石は最上段が最も大きく長辺50～90cmの方形度が高く面が平滑な花崗岩割石である。第55図1に示されるように、最下段は、完成時には地覆となる部分で、上二段よりやや前に据えられているが、それはa面からの掘り込みの中にある。構築後の生活面も引き続きa面で、それが埋まるのは近代に入ってからである。

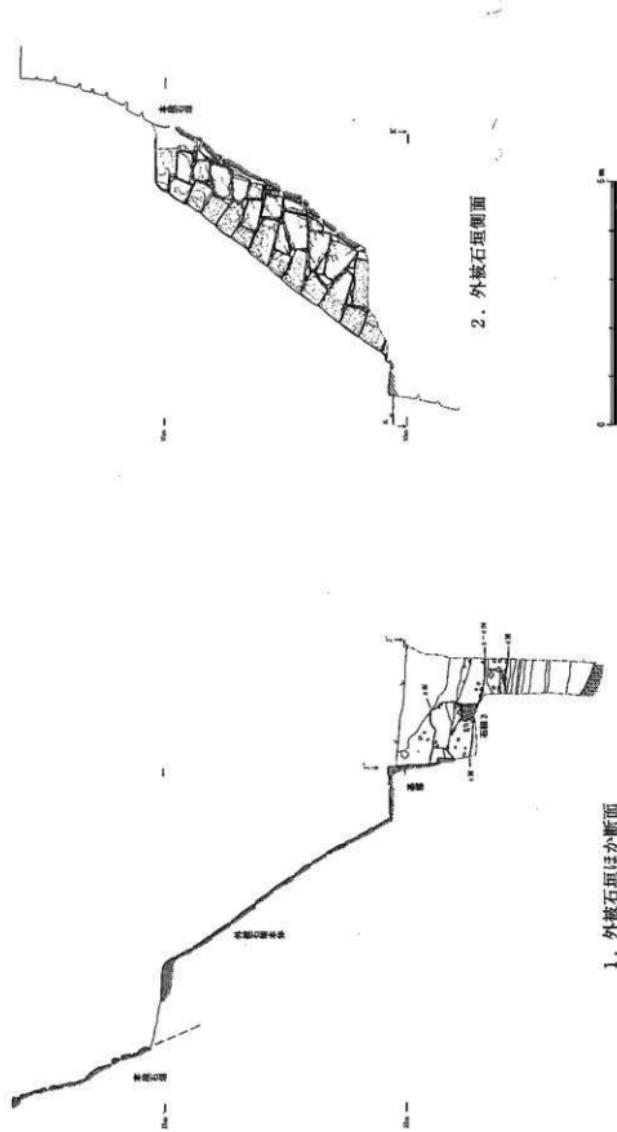
a面は石垣側が急に盛り上がるが、その裾で石組3が検出された。長辺1m強の花崗岩自然石を一段一列に横置きするもので裏込石も伴う。外被石垣基部と斜交し、それに潜り込んで行くから、それより古い別道構と判断できる。機能として考えられるのは、本段石垣の崩落防止策に下端に置かれた土砂の裾石で、外被石垣の前身構造と言ってよい。石組3のさらに下層、第55図1のa～c面とd面



第53圖 地下門東牆~外拔石垣平面 (1/100)



第54図 外被石垣・下層石組立面 (1/100)



第55圖 外被石垣ほか断面 (1./100)

の間には前池田期までの瓦を含む暗褐色細砂が堆積し、本段高石垣構築当初の生活面とみられるd面以下は、無遺物の明褐色のパイラン上が地山まで厚く堆積する。

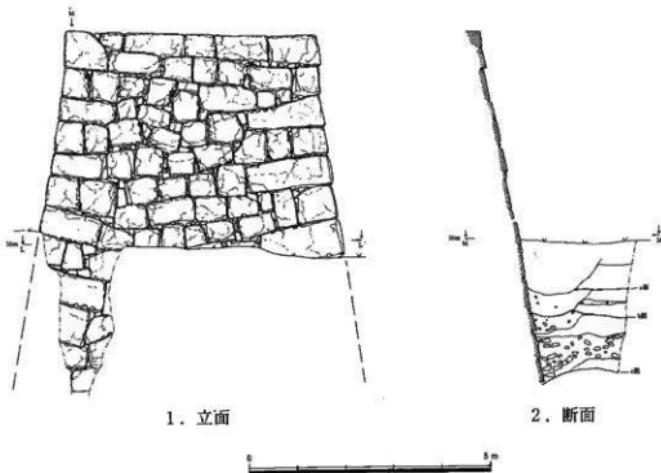
外被石垣は、元禄二年（1689）十一月の史料にみえる「本丸天守下脇ノ石垣横五間 高三間孕出候付サヤ築仕度（中略）何ヒアリシカハ十二月廿七日閣老奉書ヲ以テ允可」（岡山縣史蹟名勝天然紀念物調査報告 第九冊 参照）に相当する石垣とみられる。したがって元禄十三年の絵図には示されていてよいはずであるが表現がなく、その点では問題が残る。なお岡山大学池田家文庫に残る絵図（T3-344）には示され、これまで一部で思い込まれていたような近代のものでは決してない。

4. 廊下門東脇台の北面石垣（第56図）

廊下門の渡り櫓部が載り、西隣に門扉があった。天端幅は5.2m、現地表から高さは4.3mであったが、標高7.0mで最下段下角を検出し、7.4mもの高さを持つことが判った。立ち上がりは80度。

石材は白色度が強い花崗岩（大島石）で統一された方形度が高い割石で、隨所に矢穴を持ち、ノミによる面加工をもつものがある。一般部の築石は、石垣面での見かけの長辺が50～100cmで、横メジを揃えて積まれた部分もある。角石は長さ1.2～1.8mで、築石より面の加工度が高く、算木積みが整っている。これらの特徴は、渡り櫓部の反対側が載る中の段の高石垣と基本的に同じである。

第56図2のc面は石垣構築前の生活面もしくは構築のための工程面で、以深には暗灰色微砂が堆積する。最下段下角直下には特別な下部構造は確認できない。c面の上は径7～15cmの円礫や築石の端切とみられる長辺30cm以下の角礫を大量に含む淡褐色中砂が投入され、次に暗褐色細砂が入れられてb面が形成される。その上はa面まで暗褐色細砂、暗黄色微砂・シルトが順に堆積し、a面以上は近代の堆積である。b面またはa面が石垣構築当初の生活面で、石垣の下3～4段は当初から地覆であったことになる。いずれが生活面としても、模擬の廊下門礎石がある現地表からは1mあまり深く、本来の門礎の遺存に期待がもてるし、逆に模擬建築の軒下高に大きな問題があることが判る。



第56図 廊下門東脇台石垣（1/100）

第8節 六十一雁木～坂下門調査区

1. 概要

旭川に臨む下の段の北東部に位置する。

下の段から直に本段に通じる階段は六十一雁木と呼ばれ、上にある要害門（六十雁木上門）は、1966年に薬医門形式の模擬建築が建てられた。下にある六十雁木下門は、雁木の東に平行する石塀の小口から本段石垣の中位に櫓部が渡された櫓門であったが、明治初めに破却されたままである。現在の階段は、近代の中学校の通路にも使われ、1985年に欠落石材を補う修理が行われたが、基本は城郭時の構造を踏襲している。その段数は61どころか30段ほどしかなく、「北半分は埋もれていて、本来は一直線に旭川まで降りる階段であった」とまことしやかに語られてきた。階段の下方を発掘した結果、雁木下門の礎石や敷石、豊島石の石組側溝を検出した。また、下層には別の階段や路面・石組溝・瓦列が埋め込まれており、門は重上げを伴う江戸前期の改造を経ていることが判明した。その重上げにも対応して門前に最大で6段までの階段は付くが、それ以上ではなく、階段が旭川まで続くとの伝承は否定された。門東の石塀石垣前面も掘り下げて基底の状況を明らかにしたが、とくに東側の付根では石塀に切られた石組脚を検出し、石塀や雁木門が宇喜多秀家期より遡れる構造であることが判明した。そこでは、本段石垣の崩落防止のために遡れて築かれた腰巻石垣の状況も観察された。

雁木下門のさらに北方では、石組井戸、石組排水溝、瓦投棄用の土壌、さらに旭川べりに建っていた多門櫓の櫓台郭内側石垣を検出した。多門櫓の櫓台天端は現地表と大差なく、その石垣の高さぶんの厚さをもつ近代の造成土が郭内を埋めていたのである。これらの上層遺構に対し、江戸前期前葉までに機能を終えた下層遺構があり、素掘り井戸、据え臺群、掘立柱建物の一部とみられる柱穴や堅穴が検出されたほか、本段石垣の基底部の状況を確認した。

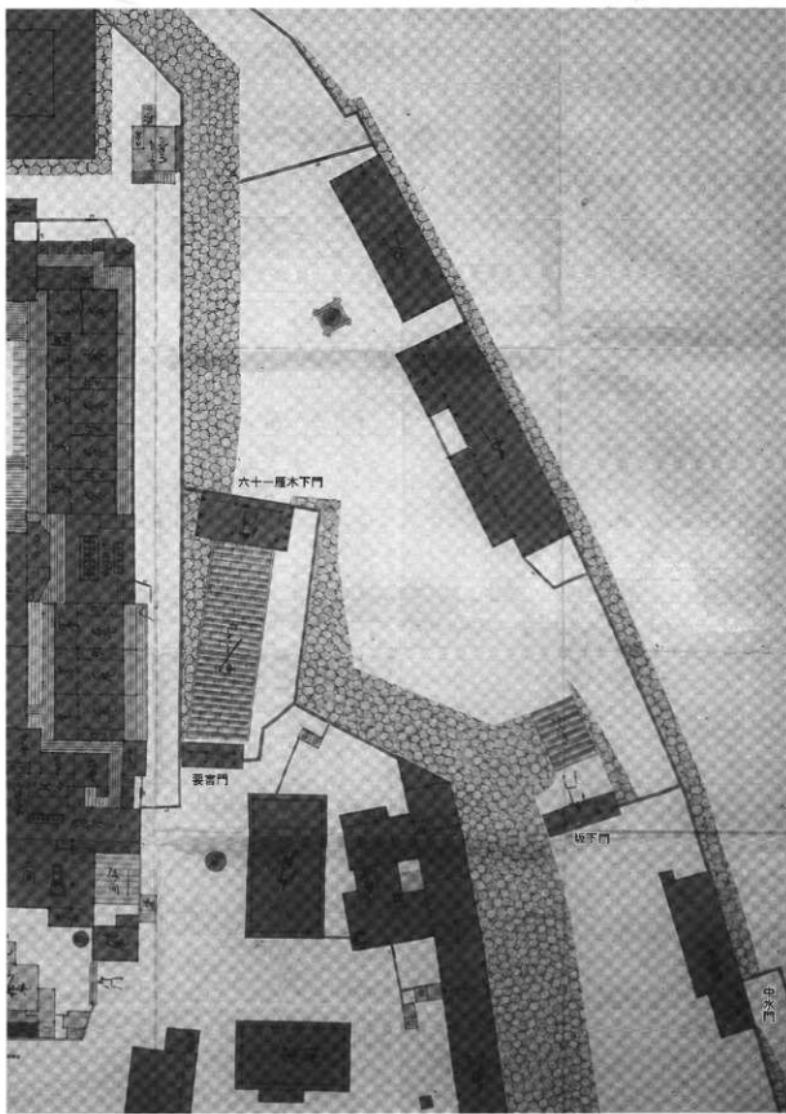
六十一雁木の石塀の東方では、旭川べりに建っていた坂下多門櫓の櫓台南西角の石垣や石組溝を検出した。さらに南方は、埋門形式の坂下門があった場所である。いまは全くの平坦地で、いっけん遺構が削平されたように思われたが、戦後の埋立が激しい地点で、むしろ現地表から3mも下に門礎が埋め込まれていた。東脇の石塀や門内の階段も検出したほか、西の本段石垣を覆う崩落防止の石垣が5m以上の高さを持つことが判明した。坂下門の南東には旭川の河原に続く中水手門があったが、いまは堤防護岸となっていて発掘はできなかった。

この調査区は、旭川の船着き場、あるいは貯蔵施設が林立する下の段南東部から、本段に至る勝手筋に当たっているが、平坦地となつたいまの状況とは異なって、当時の構造はかなり段差に富み、軍事的にも高度に達成されたものであったことが、改めて検証できた。

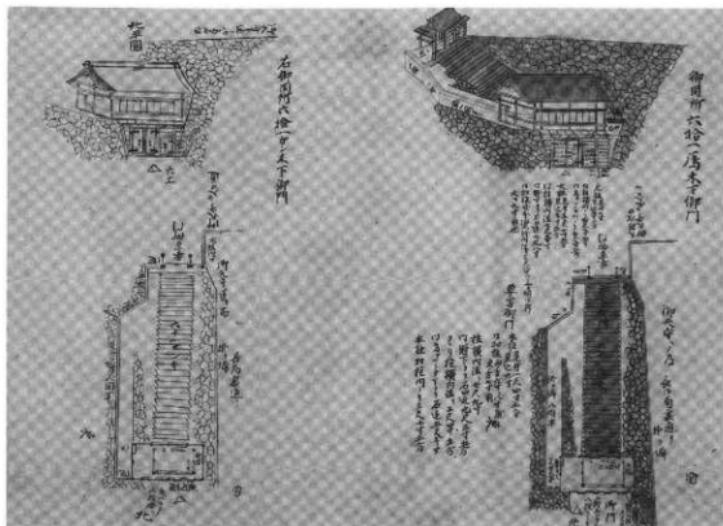
2. 六十一雁木門（第60図）

a. 上層の門構造（第61図）

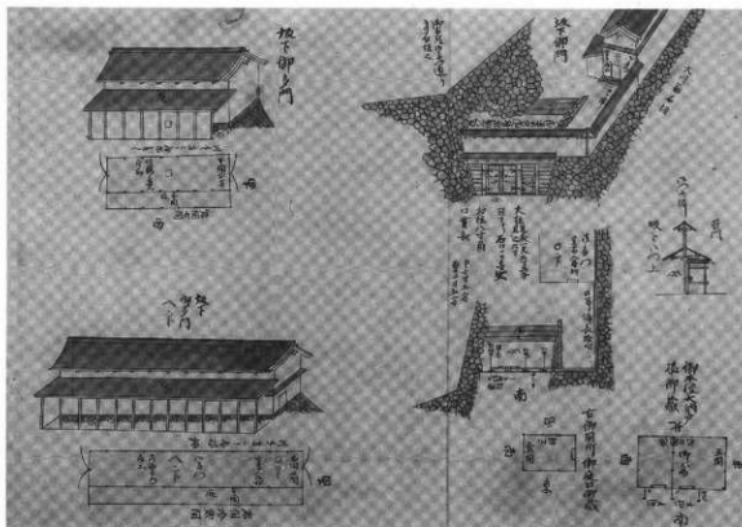
一帯は搅乱が激しいが、門の礎石は西辺の3石と東辺南端の1石が残っていた。石材は長辺90～100cmの花崗岩の自然石で、10.75～11.0mの標高をもつ各上面は平滑に加工されている。とくに西辺北端の門礎1は、上面のうちでも東西60cm、南北36cmの方形に限った範囲が特に平滑に仕上げられ、中央に長さ18cmの鉤形で深さ4cmのホゾ穴が柱受けとして切り込まれている。その西隣には本段石垣との間に長辺75cmの花崗岩平石が置かれている。東辺の半ばと北端には礎石の抜き取り跡とみられる



第57図 六十一雁木～坂下門周辺の御城内御絵図（元禄）[岡山大学池田家文庫蔵]

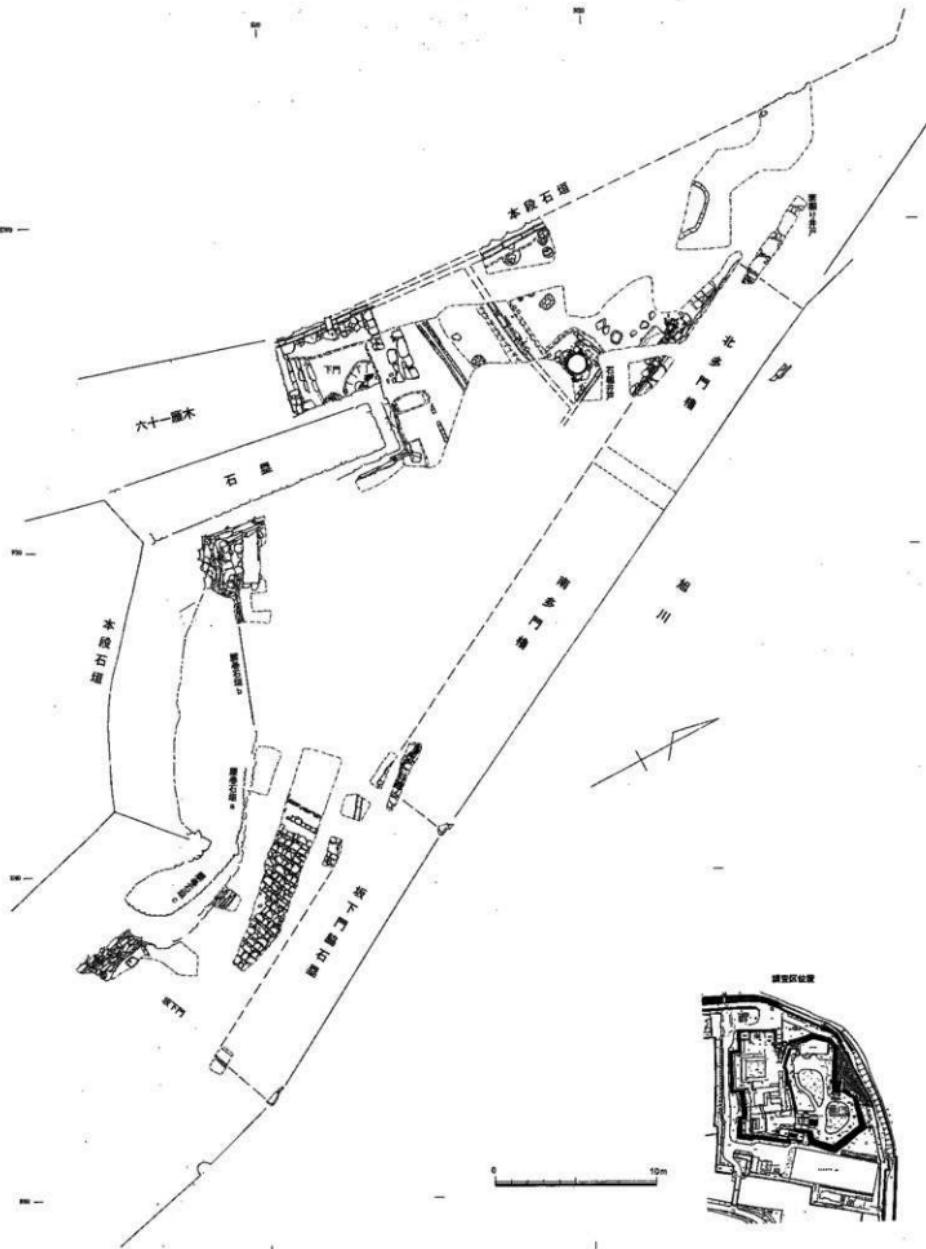


1. 六十一雁木門

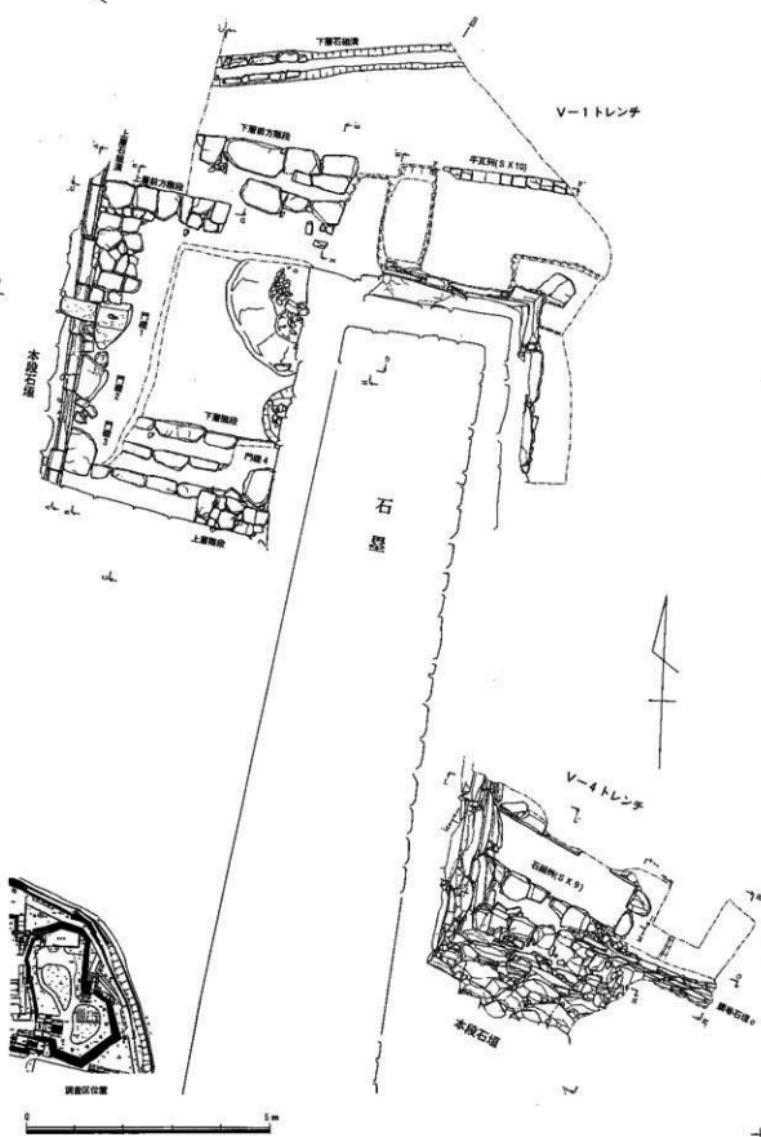


2. 坂下門・坂下多門櫓

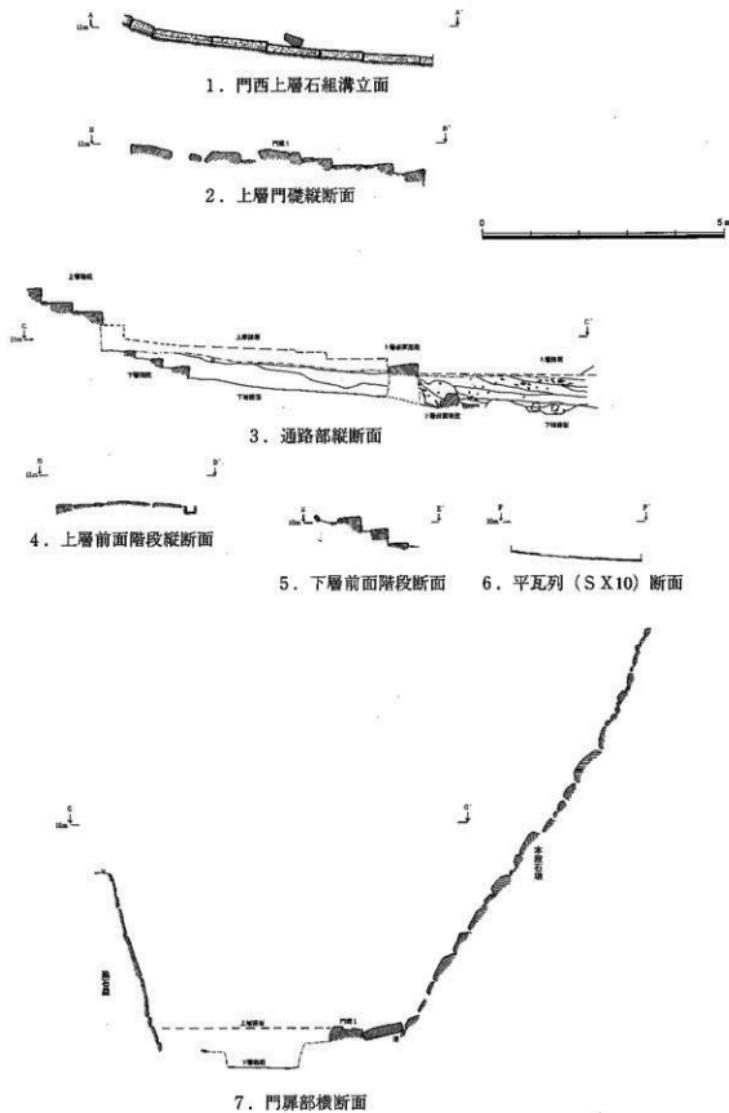
第58図 六十一雁木と坂下門・坂下多門櫓の絵図（牙城郭櫓実測圖〔岡山大学池田家文庫蔵〕）



第59図 六十一番木～坂下門調査区平面 (1/300)



第60図 六十一羅木下門周辺遺構平面 (1/100)



第61図 六十一雁木下門各立面・断面 (1/100)

土壤があり、内部にはこぶし大の円礫や長辺40cm以下の角礫が散乱していた。

門礎1の北側には石組段が残り、門前の2.5mに幅4.4mで3段の階段があったと判断できる。各段の長さは門側から0.7m、1.1m、0.7mと中段が広く、最下段下端からの最上段天端までの高低差は0.5mあり、門礎上面は最上段天端からさらに0.1mほど高い。石材は穴を残さない花崗岩粗削りの扁平材で、各段とも段の手前と奥を複数の石材で造った石骨となっている。段の手前の石材は長辺40~60cmであるのに対し、奥の石材は小さく詰石状の部分がある。

門の上方の階段は一段のみを発掘した。一段の長さ0.6~0.7m、復元幅4.2mである。これは1985年の修理が及んでいない部分で、そのため西方での石材を欠いている。石材や組み方は、上に続く現役階段の本來部や門前の階段と同じである。上方の現役部は、修理時の所見から、石墨寄りの1~2mが元の石材と構造を保ち、第62図1に断面が示される部分も該当する。一段あたりの長さは0.4~0.7m、一段ごとの段差は平均0.25m、下門から要塞門までの推定段数32段、傾斜は23度である。

なお、階段上手では西脇の本段石垣に斜めメジが観察できる。北の天守台から続く当初の本段石垣はここに隅角を持ち、西に折れ込んでいたのを直線部に改造した結果とみられる。東の石墨を伴って直線で南に登る階段構造や要害門は、この本段石垣改造以降といえる。

下門の西脇では、本段石垣の下端に沿う石組排水溝を検出した。長さ45~130cmの豊島石専用材を繋ぐもので、内法16~24cm、深さ15~20cm、5度ほどの傾斜をもっている。門礎1の西の半石は溝に載り、門礎2や3も溝石材に掛かっており、その限りでは溝は礎石より先行的である。しかし溝は、石材の幅などが不揃いで一貫性がなく、当初からの構造を保っているとするには違和感がある。少なくとも礎石は溝材に重量を支えられる関係ではなく、むしろ既にあった礎石と本段石垣の隙間（先行する別構造の石組溝も想定可能）に合わせて適当な豊島石材が選ばれた結果のように思われる。

石組溝の上方は、現在は埋め込まれているが、階段の修理時に傾斜を強めながら階段側溝として統一を確認した。下方は、発掘端からあと6mほど本段石垣に沿って延び、そこで本段石垣に沿って北から延びる石組溝と合流し、門前方の路面を西に横切って、石組井戸端の溝と合流し、南東の坂下門方向へ続いている。各所とも同様の豊島石専用材を組む構造である。

b. 上層の門遺構の絵図との対比（第58図1・第60図）

検出された礎石を『牙城郭櫓實測圖』と対比すると、礎石1には潜戸の西側柱が載り、西脇の平石には高石垣下端から立ち上がる次の柱が載ったものと思われる。そうすると門扉の西側柱が載ったのは礎石1の東にあった礎石となるが、付近は搅乱が激しく、その痕跡すら残らなかったと考えて矛盾はない。門扉の東側柱は礎石の抜取り痕と思われる土壙が検出された石墨下端に想定できる。ところで、この絵図には柱と柱間にに関する法量記載がある。その「戸柱見付七寸」「同柱横内ノリ二尺七寸五分」「大柱見付八寸四分五分」「同柱横内法七尺七寸」から、潜戸西側柱の心から門扉東側柱の東端面までの距離を $(0.7/2+2.75+1.45+7.1+1.45) \times 30.3\text{cm}$ の式で計算すると397cmとなり、礎石1のホゾ穴中心から、同じ高さでの石墨石垣面までの実測値395cmとほぼ完全に一致する。その際、門扉東側柱は石墨ぎりぎりに立つことになり、予想される礎石は礎石1よりやや小さめとなる。

また、梁行方向は同絵図に「大柱」「同扣柱武木梁行内法リ三尺八寸にて二タ間□□大□九寸角也」とあり、門扉側柱から次の控柱までの心々距離を $(1.45/2+3.8+0.9/2) \times 30.3\text{cm}$ 、南端控柱までの心々距離を $(1.45/2+3.8+0.9+3.8+0.9/2) \times 30.3\text{cm}$ の式で計算すると151cmと293cmとなる。これらを遺構として残る西脇の礎石列に投影すると、各石材の中心と見事に一致する。

さらに、同絵図には「大柱」「同冠下より石口迄九尺八寸」の記載がある。この数値は297cmであるが、絵図に示された冠木は材の上面が石壙天端に揃うか僅かに下に表現され、冠木の太さや礎石の路面からの突出を勘案すると、礎石1の上面と石壙天端との比高の実測値320cmと整合する。

以上『牙城郭櫓實測圖』に示された雁木下門は、検出された上層構造に関わるものと判断できる。なお、元禄絵図での柱表現は、門扉ラインでは門扉の両側柱と潜戸西側柱の三本だけ、梁行き方向も両端に二本ずつである。しかし、その配置や距離感は検出遺構や『牙城郭櫓實測圖』と矛盾ない。

c. 下層の門構造（第61図）

上層の門壁や階段とは淡灰褐色純中砂の間層を挟んで階段を検出した。この重上げ土には瓦が多く含まれ、最新はコビキB技法による前池田段階とみられるものである。検出したのは三段分で、最下段前面は土床の平坦地となるが、上方には上層階段に埋め込まれて統一しているのが確実である。長辺40~110cmの花崗岩の自然石を横一列に置くもので、各段の奥側は土床となり、上層段階とは大きく異なる。石壙側の石材は石壙面に接して置かれ、石壙が完成した後に石壙と一緒に構築されたことが判る。一段あたりの長さは0.5~0.7m、一段あたりの段差は0.14~0.16mである。

最下段の上面は標高10.4mで、上の要害門付近の現地表は標高19.1mであるから、その比高8.7mを、一段0.14mとして割ると62段、一段0.15mなら58段となる。したがって六十一雁木の名はこの下層期の段階の段数に因んだ可能性が窺える。ただし、一段あたりの長さを発掘部に準じて平均0.6mとしてしまうと、36.6mもの長さとなって、上層段階のほぼ二倍の長さが必要で問題が残る。

最下段の北前面は南北4.6m、東西4.5mほどの平坦地となる。この部分の西側は、上層礎石の保存のため振り下げができず、また東側は上層礎石の抜き取り塙が攪乱として及ぶため、礎石や柱穴を遺構として検出することはできなかったが、上層期の雁木下門の前身構造としての門の上屋があった可能性が考えられる。ここでの下層期から上層期への路面の重上げは0.7m前後に復元できる。また、下層期に推定できる門の上屋は、石壙小口上端線と段階最下段の位置との兼ね合いから梁行が2m（1間）程度と上層期より小さくなる。本段石壙側の下端、すなわち上層の豊島石製溝の下層には、石組溝があった可能性が強く、後述の門前の石組溝に続くものと思われる。

平坦地の北でも3段の段階を検出した。長辺40~130cmの平滑な花崗岩自然石を横一列に置くもので、各段の奥側は土床となり、石材こそ大きめであるが平坦地の南後方に続く段階と共通項が多い。最下段は当初から殆ど地覆であったとみられ、前面の路面は標高9.7m。最上段の上面は標高10.1mで、すぐ南背後での検出平坦面よりは0.25mほど高いが、平坦地南端に対しては0.1m低い位置で、本来の平坦地は水平とすれば、整合する高度といえる。ただし、この段階の上二段を埋めるのは暗灰黄色細砂で、コビキB技法による前池田段階とみられる瓦を含むことは同じとしても、平坦地からその南の後方段階を埋める淡灰褐色純中砂に対しては、その上に堆積した異質土といえ、最上段が上層の門前段階の最下段とスムーズに整合する位置関係にもあることから、上層の門が構築された初期の段階は、新造部と下層期以来の門前段階が繋がって6段として機能し、遅れて門前の重上げがあつて下層期築造分が埋め込まれた可能性も考えられる。

前方段階の西では、その前端線に軸を揃えて瓦敷きが検出された。縦24~30cm、幅22~24cmの平瓦を、凹面を上に向けて一列に組むもので、西端は段階石材に接して始まっていた可能性もあり、東は調査区外に統一している。東に向かって1mで7.4cmの割合で下がっていき、大した機能性は期待できないが排水施設であった可能性が考えられる。

前方階段の北では、路面を横切る格好で東西に石組溝が検出された。東は石材が脱落しているが、長辺60cm以下の花崗岩粗削材を横に組むもので、内法、深さとも0.2mほどで、東に傾斜する。裏込石は伴わない。北4mの位置の上層には同じ方向で延びる豊島石製石組溝がある。

下層では、門の上屋を直接示す遺構こそ確認できなかったが、それを想定できる平坦地やその前後の階段、関わる排水体系などが検出された。規模と位置、具体構造は変動したとはいえ、下層期の門に関わる基本レイアウトは見事に上層期の門構造に踏襲されていると言えよう。

d. 石壙（第62・63図）

北の小口面は、天端の長さが2.9m、下端の推定長が5.2mである。東隅下角は標高8.4mで、そこから犬端までの高さは5.5mであるが、基底は水平でなく西に向かって高くなり、西隅下角は8.9m前後に見積もれる。断面は75度前後で立ち上がり、上半部はやや反りをもつ。

西面は天端での長さが17mほどあり、天端の標高は14.0mから16.8mまで南に向かって高くなる。基底は未検出であるが、小口から5m以南は築石の傾斜が南に高くなる傾向が窺え、基底高も南に急激に上がっていく可能性が高い。恐らく基底は下層階段の傾斜に沿って、それより数十cm深い位置であろう。小口付近での立ち上がりはやはり75度前後で、弱い反りをもつ。

東面は天端での長さが15.1m、基底での長さが13.3mほどで、天端の標高は14.0mから16.6mまで西面と平行して南に高くなる。しかし、基底の標高は北端の8.4mに対して南端付近で8.7mとほぼ水平である。石垣の最大高は7.7mにも及ぶが、傾斜は75～80度と西面よりかえて急な傾向がある。

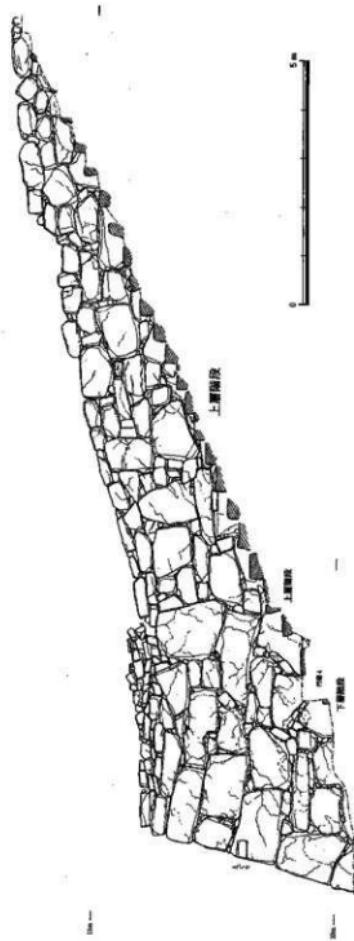
全体を通じて築石は花崗岩を主体とした野面の自然石へ粗削材で、一部はハツリによって面が整えられている。しかし、スダレ状のノミ痕などではなく、矢穴をもつ割石は北東隅の上から3石目だけである。長辺は最大3.0mで、1.5mを越える巨石が10個以上あるが、巨石は下手の坂下門側の東面で目立っている。西面でも、築石は隣の本段石垣に比べれば相当に大きく、面の平滑度も高い。

積み方は、深部まで発掘した東面や北小口で観察すれば、基底から2段の高さ1mほどは、長辺1m強の築石を横メジを通して縫いながら横に積んでいるが、その上は石垣上部に至るまでメジをなさず、方形あるいは不定形の巨石が積み上げられている。所々では長石が横に積まれているが、方形に見える巨石の多くは立石である。築石同士の擦り合わせは緻密で、3つ以上の築石に挟まれた部分では長辺30cm以下の角礫やこぶし大円礫による間詰が施されているが、2石間の擦り合わせ部には間詰石がないか、あっても小さく少ない。西面では横積みの築石がやや多く、途切れながらメジも指摘できるが、やはり立石は目立っている。出角部では、角石の長辺を一応は左右に振り分けるが、その長辺は短辺に対して十分に長くはなく、また横に立てた角石もあって、角脇へのくい込みは浅い。

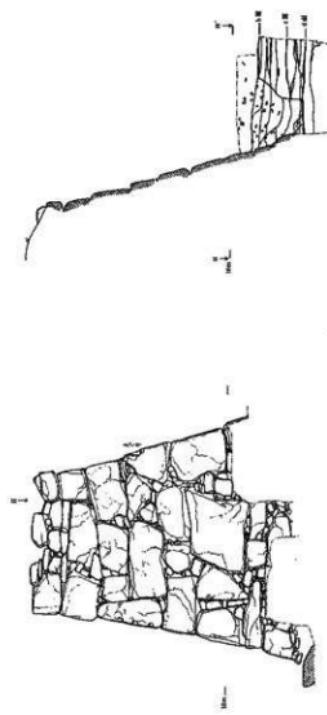
西面北側から北小口を経て東面上端に至る範囲では、天端から0.5mほど下にメジが通り、以上は石材が小さい。この部分は、天端線を造り出すための調整部とも思えるが、むしろその下面が既に天端として據えられている様に観察され、石壙の天端が二次的に数十cm重上げされた可能性が窺える。これは、雁木門の路面部での下層期から上層期に至る重上げに応じたものかもしれない。

石壙の北西隅には、深さ最大7cmの抉り加工をもつ石がある。あたかも幅18cmほどの角材を西面石垣面の角に接して水平に渡した際の当たる部分に観察できるが、意味は良く判らない。抉りの中軸は、西ドの下層期路面から1.8m、上層期路面から1.0mほどの高さである。

また石壙の北東隅では、最下段以深に長辺70cm、厚さ25cmの扁平な花崗岩自然石が据えられている。その外角は石壙最下段下角より0.6mほど外である。石壙最下段はこの平石に接して載るのではなく、



1. 西面石垣



2. 北面小口石垣

第62圖 六十一雁木—坂下門闕査区
3. 北面小口断面

最低でも0.1mの造成土を挟んでいる。しかし、両者の位置関係は偶然とは思えず、平石は石墨構築時の隅の位置ぎめであった可能性が考えられる。

石垣前面の土層堆積を第62図3に示した北小口でみれば、d面をつくる炭粒を含んだ暗褐灰色細砂は、宇喜多秀家期以前の地表面であった可能性があり、以深は一帯を平坦地に造成する暗褐茶色粗バイラン土である。d～c面間は暗灰褐色細砂バイラン土と鮮黄褐色バイラン土の互層による造成土で無遺物であるのに対し、c～b面間は暗褐灰色細砂、黄灰褐色中砂、鮮黄褐色バイラン土による互層の造成土で、宇喜多秀家期のものとみられるコビキAの瓦を一定量含んでいる。したがって、c面は宇喜多秀家段階の生活面であった可能性が考えられるが、石墨の石垣はそれより新しいb面からの根切りを伴って構築され、石墨構築当初の生活面も同じb面とみられる。この根切りの深さは1m近く、石垣の2段分ほどは当初から地覆であったことになる。その埋土は暗褐灰色のバイラン質細砂で、小早川秀秋もしくは前池田段階とみられるコビキBの瓦を含み、場所によってはこぶし大円礫を高い密度で伴っている。b面は、雁木下門前方の下層階段前の路面に続く。b面を埋めるのは、前池田段階とみられる瓦や炭粒を含む暗褐灰色細砂で、雁木下門前方の下層階段を埋め、明治維新まで踏襲された生活面を作り出す。

第64図2に示した東面の南寄りは、石墨はc面から掘り方を伴って築かれている。その深さは0.25mと浅く、埋土は暗灰黄色細砂・微砂で、こぶし大円礫を少量伴っている。c面を造るのは暗黄灰色のバイラン細砂で、後述の石組枠の石積み背後の置土である。c～b面間の造成土は暗褐灰色の細砂でコビキBの瓦を含み、石墨構築に伴う造成土の可能性が高い。石垣の埋まり方や高度からすれば、石墨構築当初の生活面はc面よりb面であろう。

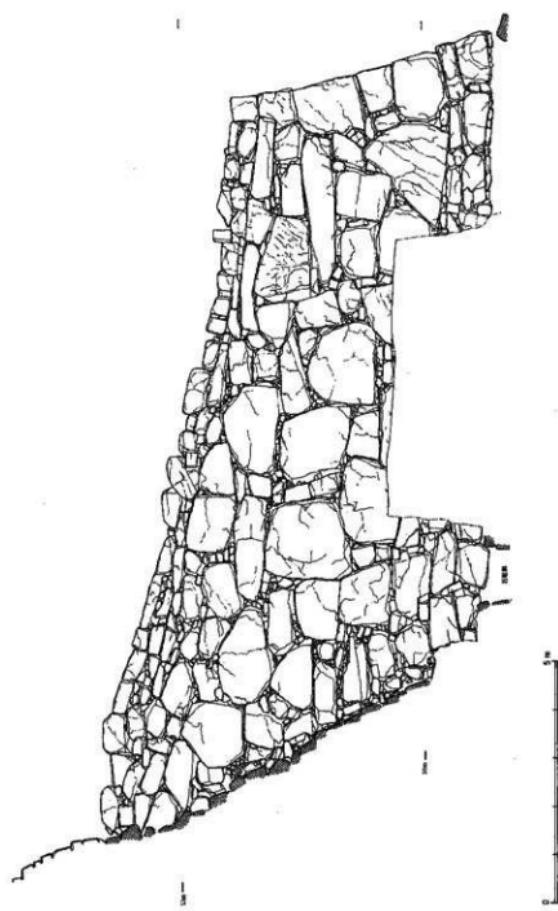
e. 石墨の東辺の付根

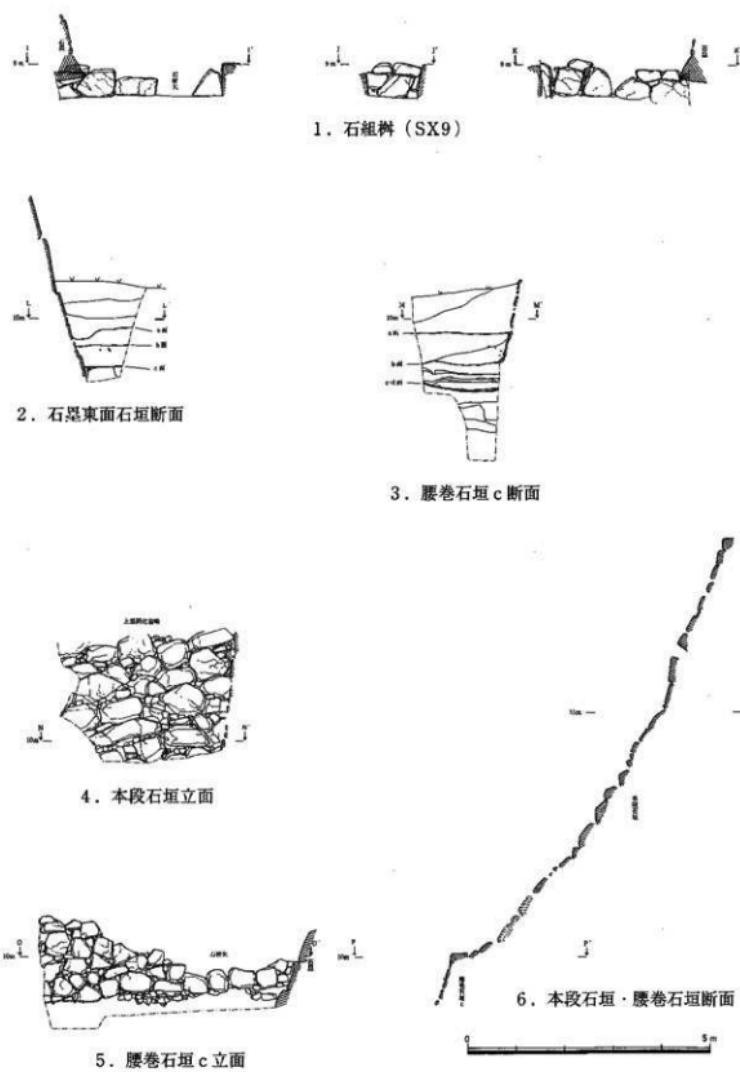
付近は複数の遺構が切り合って複雑であるが、それゆえに郭の変遷を知る上では重要地点である。最古は本段石垣で、統いて石組枠、次に石墨、最後が本段石垣を固める腰巻石垣cである。

本段石垣は第64図4と6に示される。築石は長辺40～150cmの花崗岩自然石で、長辺が数十cmの丸みが強い玉石が主体的である。積み方は多少は横積み傾向があるが、むしろ乱積みである。したがって、築石間の隙間は多くて大きく、長辺30cm以下の間詰石は現状でも多いが、既に相当量が脱落したものと思われる。最下段下角は検出できなかったが、推定高約10.0m、立ち上がりの角度は平均的にみて60度で、上部に反りをもっている。この石垣は、後述の坂下門の脇で観察される斜めメジに新しく付加された高石垣と一緒に、築かれたのは宇喜多秀家期より新しいとみられる。

石組枠（第64図1）は本段石垣のすぐ前面に平行して築かれ、切り合いを直接には確認できないが、本段石垣から遅れた工程か、遅れた時期に築かれたとみられる。長辺0.4～0.8mの花崗岩の自然石ないしは粗削材を横に置き、内法幅1.0m、長さ3.4m以上、深さ0.7mに組んでいる、底は土床である。南東の小口は検出できたが、反対側は石墨基底の下に延びていく。石積みは最大2段まで確認できるが本来の頂部を保つ状況ではなく、石墨構築時に上部が壊されたと判断される。石墨の最下段の築石は、この石組にじかに載るものもあるが、枠部がオープン（暗渠）であることを前提とした工夫がなく、1石は枠内に完全に収まる位置で、石墨は石組枠の埋没を前提に構築されたことは間違いない。その埋土は瓦を多く含む暗褐灰色～暗黄灰色のバイラン細砂である。瓦は、宇喜多秀家期とみられるコビキAのものが多いため、小早川秀秋期以降に出現するコビキBのものが確実にあり、それは石墨の石垣面より奥にも及んでいる。したがって石墨の構築時期は、こうした瓦が廃棄されてからの段階で、

第63圖 六十一雁木門石塀東西石垣立面 (1/100)





第64図 六十一雁木門脇石垣東の付根 (1/100)

前池田期の可能性が高くなる。この石組は水溜め枠の類であろう。

石墨は本段石垣に取り付くが、その主軸は本段石垣や石組枠と115度ほどの角度で交わっている。石墨側の築石は、おのずと本段石垣面に付加して積まれているが、上から4石目だけは本段石垣に喰んでいる。本段石垣の築石間の隙間が大きかったか、石材を抜き取ることが可能であったために、石墨側の築石を差し込んだのであろう。

腰巻石垣c（第64図5）は、本段石垣の前面に直に構築されたもので、築石背後に長辺30cm以下の角礫などを裏込として伴い、そこに土砂は混えない。石墨石垣面に当る位置から始まり、トレント外南東に延びていく。発掘前は一部の頂部だけが露出して列石に見えたが、最大遺存高1.8mの石垣であった。石墨寄りを中心に大きく壊れているが、本来は2mを越える石垣であったとみられる。最下段下角は標高9.1mで、石組枠の現頂部や石墨石垣最下段下角より0.3m高く、背後の本段石垣の予想基底高に対しては、さらに高いと思われ、そのことでもこの石垣が新しいものであることを示している。築石は長辺20～65cmの花崗岩粗削材であるが、矢穴をもつ削石が実測した範囲では1石だけ確認できる。築石は横に置かれるが、メジは通らない。断面の角度は80度で、背後の本段石垣よりかなり急である。前面の土層堆積を第64図3でみると、c・d面は黄褐色バイラン土による薄い化粧土で形成され、下の造成土は無遺物の暗褐色バイラン土や明褐茶色のバイラン土で、字喜多秀家期もしくはそれ以来の生活面とみられる。c・d～b面間の堆積は黄褐色バイラン土と暗褐色細砂による互層で、石墨構築に伴う生活面かさ上げ土とみられ、b面は同図2のb面に対応する。この石垣の最下段はb面上に置かれ、前面は瓦を含む暗褐色細砂で埋め込まれている。出来あがったa面は郭内生活面として明治維新まで踏襲されている。

3. 六十一雁木北方（第65・69図）

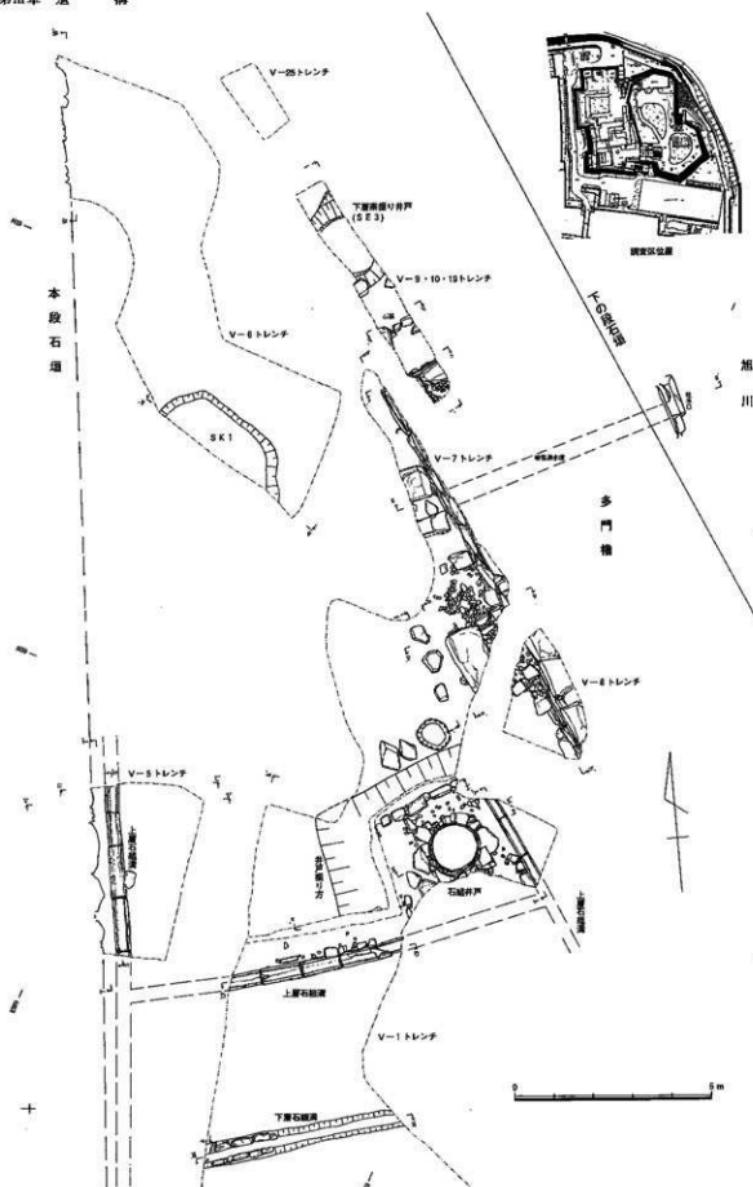
a. 上層の石組井戸（第66図）

井筒は頂部が標高9.75mで、内径1.2mの円筒形である。頂部から3.4mまで掘り下げたが、以深の発掘は断念した。築石は長辺40cm以下の種類が揃った花崗岩の割石で、幅6cmほどの矢穴をもつものもみられる。方形のものが多いとはいえ、全体に形と大きさとは不揃いで、横メジは通らない。

構築のための掘り方は一辺数メートルの方形で、関係土層は第67図3に示される。b面は、雁木下門の下層前方階段前の生活面から続くもので、掘り方はここから切り込まれている。埋土は黄褐色バイラン土を挟む暗褐色～暗橙褐色の微砂・細砂で、コビキBの瓦片のほか、長辺数十cmの角礫を含むが、そのまま掘り方外にも続いている。すなわち、この井戸はb面からa面への生活面の重上げを作った郭内改造の一環として構築されたもので、後述の素掘り井戸の後身代替と評価できる。a面は、雁木下門の上層から続く豊島石製溝などが展開し、明治維新まで生活面として踏襲される。

井戸の北と西は石組で、東と南は豊島石製石組排水溝で区画されている。その範囲は東西2.8～3.3m、南北3.0～3.5mの矩形となる。石組は西辺の残りが悪いが、長辺30～50cmの長方形の花崗岩粗削材を横一列に置くもので、上面高は井筒頂とほぼ揃い、まさに縁石である。南辺の石組溝は内法幅0.25m前後で西の本段石垣下端さらには雁木下門から続くものであるが、東辺の溝は井戸隅に端を発するようで、内法幅は0.15mと細く、底は井筒頂より0.4mほど低い。両溝は井戸の南東隅で合流し南東の坂下門方向に延びていく。

井戸の付属施設が埋められたのは明治維新の直後とみられるが、井筒だけは戦後までオープンであっ



第65図 六十一層木門北方遺構平面 (1/125)

たとみられ、中学校時代の本段にあった武道場に関わって剣道の防具や戦災ゴミが出土した。

この石組井戸の位置は、元禄絵図に示された井戸と一致する。絵図には、矩形の区画に反映されているとみられる井筒の表現はあるが、上屋を示す表現はない。

b. 上層の瓦廃棄穴 (SK 1)

第68図1に示されるように明治維新まで踏襲された生活面のa面から掘り込まれた、深さ1.0m、長さ3.8m以上の上槽である。埋土は瓦を大量に含む暗黄褐色微砂で、瓦だけが折り重なる部分が多い。江戸中期～後期の揚羽蝶文の大形軒丸瓦や滴水系軒平瓦、宇喜多秀家期の金箔おしの桐文軒丸瓦が目立ち、その特殊な組成から天守に葺かれていたものと思われる。江戸後期の陶磁器片も少量含まれ、江戸後期もしくは

明治初頭の大守を主対象とした屋根修理で生じたゴミ穴であろう。なお、天守の大修理が史料に伝えられる延享3年(1746)のものとするには、遺物組成が確実に新しい。

c. 北多門櫓の櫓台と下層の付帯構造

この櫓台は上層期にも機能したが、構築は下層期で、郭内側の付帯構造は下層期の内に埋没した。いっぽう、郭外側の旭川に臨む石垣はいまも現役である。

櫓台の郭内側石垣(第67図4・5)は、南西長辺の10.5mぶんと北西小口辺の1.5mぶんを検出した。石垣最下段下角は標高8.8～8.3mと南東が低いが、地下1.0m以上に埋め込まれた地山地形の反映である。長辺側の端部から3mほどの位置に、櫓台を横断する暗渠が開口するが、その両壁は石垣最下段が並ね、とくに基底高が低くはない。最高位は10.4mの標高をもち、石垣遺存高は2.0mであるが、旭川側の高石垣天端と同じ高さ(=現地標高)まで石材があったはずで、本来の高さは2.5m以上とみられる。ただし、櫓台構築当初の生活面は標高9.0～9.2mで、石垣の基底0.4～0.5mは当初から地覆である。断面は85度ほどの急傾斜である。

築石は平均的にみて長辺1.0mの花崗岩の自然石もしくは粗削材である。矢穴を残す割石やスダレ状の面加工をもつものはないが、石垣面をなす側は滑面で、粗ハツリによる調整は伴っている。築石の形態は方形度が高く、横積みされる個所が多いが、立石も含まれる。特に角石は高さ1.5m、幅1.4m、厚さ0.9mの立石で、この1石で左右の築石3段ぶんの高さをまかぬ。

暗渠(第67図9)は内法が幅0.5m、高さ0.4mで、天井と両側は石造であるが床は吐水部を除いて上床である。櫓台の主軸に対して84度で斜交し、10度の傾斜で旭川側の現役石垣に抜けている。吸水口の両側には長辺1m級の巨石が配されるが、その頂部が櫓台構築当初の生活面とほぼ一致しているため、溝底は周囲より0.8mほど深いことになる。溝底には長辺40cmの平石が置かれていた。

櫓台の南では、櫓台構築当初の生活面に伴って、石垣に付加された石組と礎石状石材を検出した。石組(第67図6・7)は高さ0.4m、長さ1.8m、幅2.3mで、前端には幅一杯の巨石が用いられていて



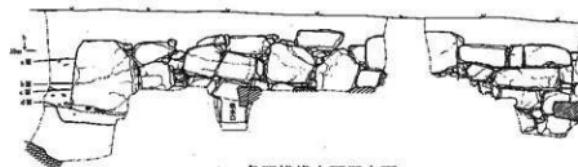
第66図 石組井戸立面 (1/50)



1. 石組井戸東溝立面

2. 石組井戸北縁石断面

3. 石組井戸掘り方断面



4. 多門櫓檻台西辺立面



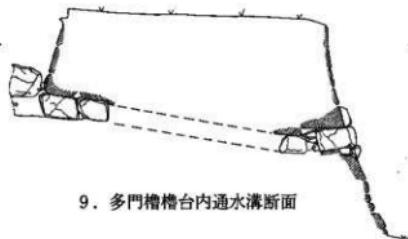
5. 多門櫓檻台北辺立面

6. 多門櫓階段側面

7. 多門櫓階段小口面

5m

8. 多門櫓階段前縁石断面



9. 多門櫓檻台内通水溝断面

10. 多門櫓北側石組立面

第67図 六十一雁木門北方造構立面・断面 I (1/100)

る。奥は長辺40cm級の方形材を2段に積み、裏込にはこぶし大円礫が充填されている。元は巨石の背後に段を重ねた構造で、郭内から櫓に上がるための階段とみられる。また、石組両側の石垣下端には心々1.3mほどの間隔で礎石状石材（同図4）が4つあり、櫓の庇の柱が載った可能性が考えられる。石組前面にも礎石状石材3つ（同図8）が残り、階段に応じて張り出した庇の柱が載ったかにも思えるが、柱間が0.8mほどでは通行の妨げになり問題が残る。さらに石組の南西でも2石が残るが、機能は特定できない。

櫓台小口に平行し、その北約1mに石組を検出した。長辺50cm級以下で大きさが不揃いの花崗岩粗割材を横に組み、北の面を揃えている。櫓台構築当初の生活面を埋めた次の下層生活面に伴う。

櫓台周辺の土層堆積を、第67図4と第68図2でみると、d面以下に無遺物の褐黃灰色バイラン細砂が堆積している。d面は、第68図2の北寄りに地山が露出していたことになるが、一帯を平坦化した最初の生活面で、以深に瓦が含まれないことから宇喜多秀家期に形成された可能性が高い。d面を埋める造成土は暗褐色～黃灰褐色細砂で、d面以深とは一転して瓦がかなり含まれ、その造成の過程で石垣最下段が構築されたことが判る。第67図4ではd面が落ち込んで櫓台構築のための根切りとも見えるが、第68図2のd面は既にその落ち込み下と同じほど低く、d面自体が櫓とは無関係に段落ちしていた可能性がある。いずれにせよ、櫓台の構築に伴う造成土には、コピキAの宇喜多秀家期の瓦を主体的に含み、櫓台はその期の建物の破却を前提とする段階での構築といえよう。c面が櫓台構築当初の生活面である。c面を埋めるのは暗黃灰色微砂に明黄褐色バイラン土の間層に混入する造成土で、櫓台小口に沿う石組はその投入過程で作られ、後述の素掘り井戸（S E 3）は出来上がった生活面であるb面から掘り込まれている。b面を埋める造成土は前池田期のコピキBの瓦や上師質土器小皿や貝殻・魚骨などの食物残滓を大量に含む暗黄灰褐色細砂であるが、この造成土が櫓台長辺の郭内側石組や礎石状石材、それに暗渠の吸水口部を埋め込んでしまう。櫓台の石垣が現地表高まであったとすると、当初の見かけ高は1.6mであったのが、このa面段階（上層期）では1.0mとなる。

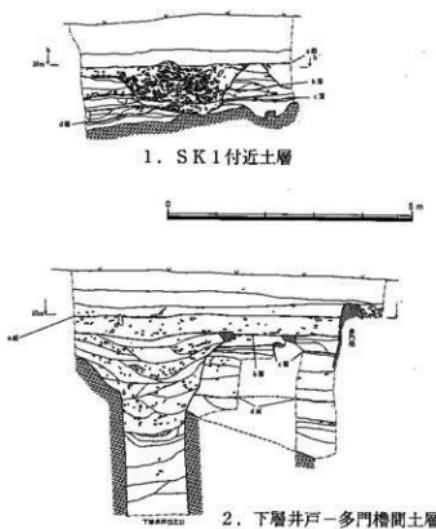
櫓台の旭川側の高石垣は、現状で高さが4.5m、立ち上がりは下部が70度ほどであるのに対し、下部は80度前後で、中位以上が全体として反っている。

郭内側石垣と高石垣との天端幅は5.4mである。元禄絵図に示されたこの多門櫓の幅は2間半（一間6尺5寸として4.93m、柱表現は半間おき）で、天端の外角からやや引いた位置に壁が載ったとすれば、遺構は絵図と一致する。なお、絵図の櫓長辺には庇や階段の表現はなく、絵図が描かれた上層期には既に埋まっていたことと一致してくる。いっぽう櫓小口の北には仕切塀の表現があり、近い位置で検出された下層期石組との関連が注目されるが、上層期には石組は間違なく埋まっていて、整合しない。あえて言えば、石組は絵図に示された塀の前身構造かもしれない。

d. 下層の素掘り井戸（S E 3）

第68図2の土層圖に記したように、多門櫓構築当初のc面の次の生活面であるb面（標高9.6m）から掘られ、a面が形成された上層期の初めには既に埋没していた遺構である。円形で、上端での径は3mを越えるが、井筒部の内法は1.4mである。b面からの深さ3.8m（高度5.8m）まで発掘した。壁面の一部が造成土とはいえ、基本的には鮮黄褐色の花崗岩質強風化土に掘られており、発掘限界からまだ数メートル下でないと湧水は期待できない。井筒石組の形跡は発見されず、内法の狭さと深さとの兼ね合いから判断して、本来から素掘りであったとみられる。

埋土は灰黄褐色バイラン土、黄褐色バイラン土、暗褐灰色細砂などによるブロック土の互層で、土

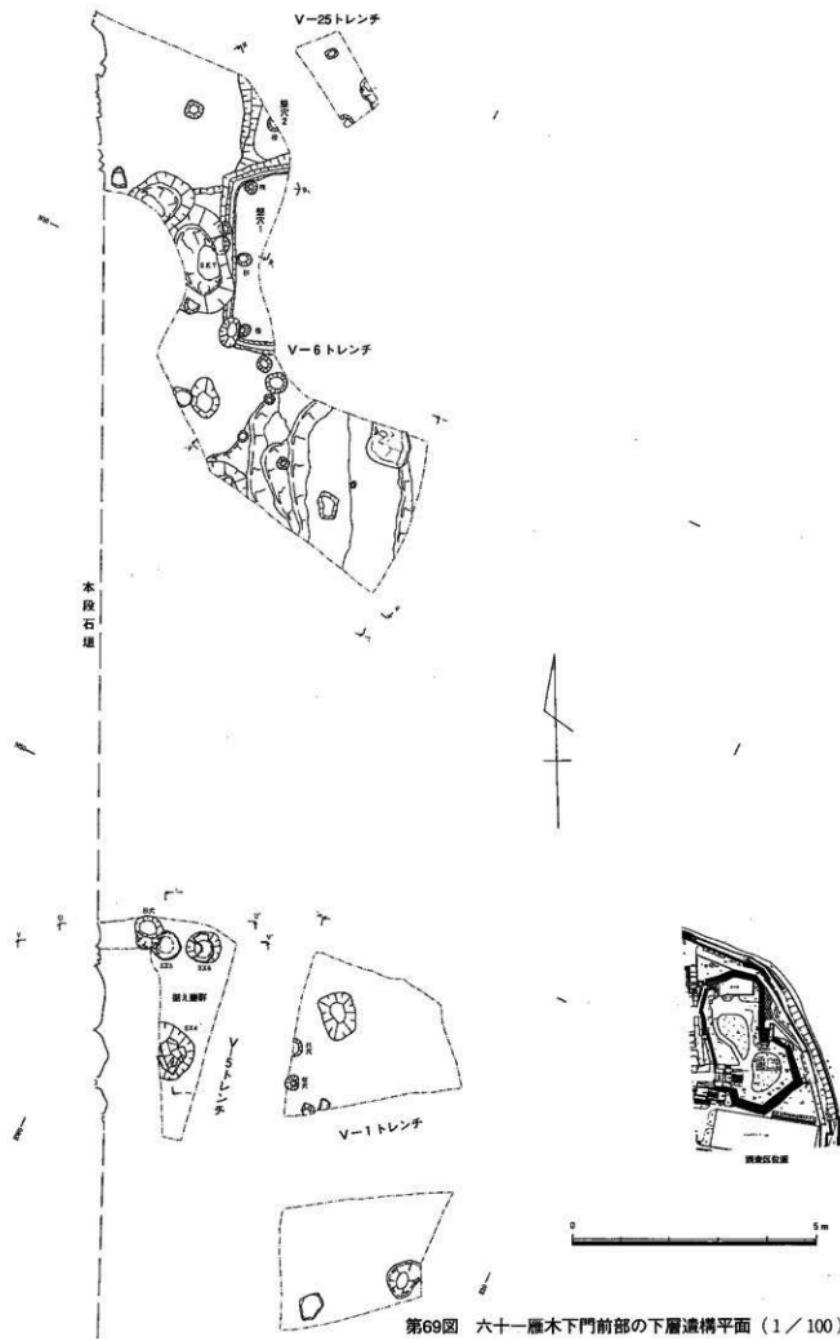


第68図 六十一雁木門北方遺構立面・断面II (1/100)

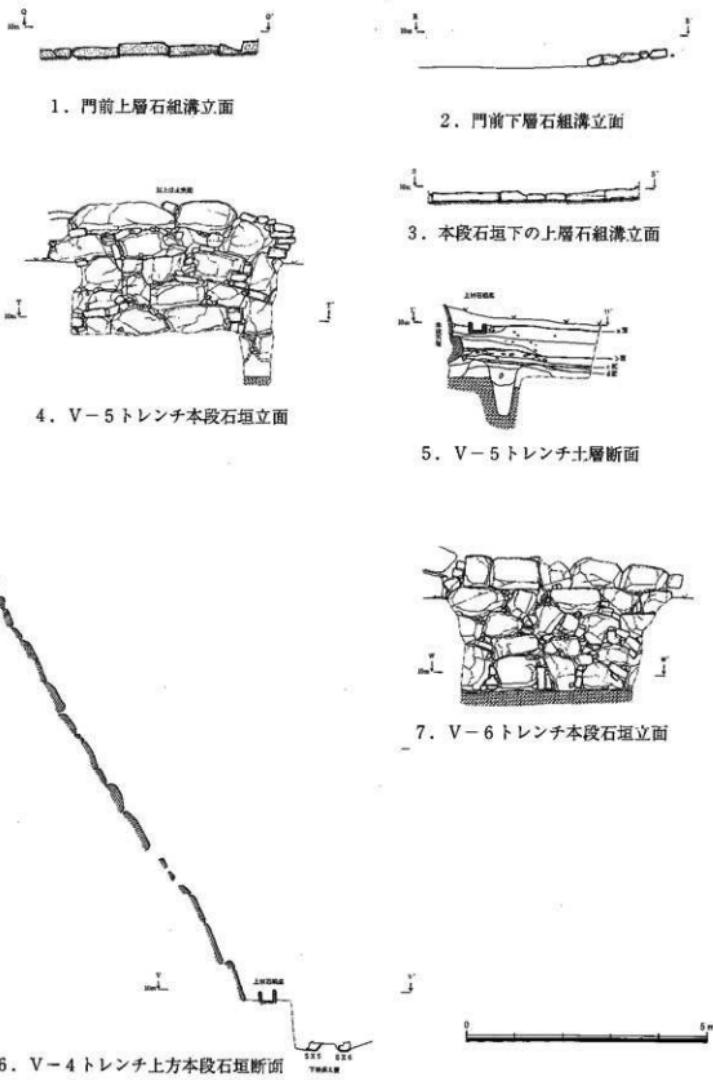
砂に混えてゴミとして一括投棄された膨大量の瓦・土師質土器小皿・食物残滓（貝殻・魚骨・鱗など）を始め、陶磁器、鉄釘、銅錢片、金具、貝杓子など、前池田期の豊富な遺物が出土した。土器・陶磁器の内訳点数は、上師質上器小皿363個体分（うち煤付き37個体分）【口縁外周合計で実数はもっと多い】、焼塩壺7、瓦質火盆1、唐津鐵綱大皿1、唐津碗3、唐津小皿5、唐津瓶1、美濃灰釉皿2、備前播鉢6、備前徳利1、備前小徳利1、備前聲1、備前小皿1、景德鎮系白磁碗2、漳州窯系染付碗1、中国製陶器鉢1、軟質陶器碗1である。また、貝殻はハマグリ〔2枚で1個として〕1026個体分、サザエ119、アカニシ67、アワビ42、ハイガイ11、シジミ4、アカガイ2で、魚骨・ウロコではタイ、スズキが目立つ。

この埋土は、井戸脇の生活面であったb面を埋めてa面をつくる造成土にそのまま統いたようで、井戸上のa面までの堆積や多門櫓の郭内側で吸水口などを埋める造成土と同じ遺物組成をもっている。この造成土は、層位的に石組井戸の構築に伴う造成土にも対応するから、素掘り井戸を埋める一連の工程に併行して石組井戸が造られた可能性が窺える。素掘り井戸は地山が高い位置に掘られているのに対し、石組井戸は旧地形の谷部に当り、湧水性で勝っていたに違いなく、井筒の石組化などと合わせて、下層期から上層期への郭内改造のなかで、井戸機能の向上が図られたと評価できる。

素掘り井戸や多門櫓の郭内側石垣前の出土遺物のうち、少なくとも食物残滓、土師質土器、陶磁器は、生活空間でないこの一帯で生じたゴミとは考えにくく、そうすると出所は目前の六十一雁木の上にあった本殿御殿の台所に求めるのが自然である。土師質土器小皿は灯明皿に使われて煤が付くもの



第69図 六十一櫻木下門前部の下層遺構平面 (1 / 100)



第70図 六十一層木門北方遺構立面・断面図 (1/100)

より、付かないものが圧倒的に多く、法量や胎土・技法が揃い、しかも使い捨てを示唆する完形品が多いことから、主体は儀式用の壇であったとみられる。

e. 本段石垣（第70図4・7）

下層期に構築され、上層期に向けて段階を経て郭内造成土で基部が埋まっていく。

最下段下角は、石組井戸の西方にあたるV-5トレンチでは標高9.4mで、厚さ0.4mの造成土を介して地山からやや浮いているのに対し、調査区北端のシノギ角に近いV-6トレンチでは9.6~9.7mと高度を上げ、地山に密着している。これは、旧地形に規制されながらも、基底高を出来るだけ水平に近く設定しようとした結果であろう。現在の天端は標高18.9m、下角からの高さは9.5~9.2mである。立ち上がりは約57度で、頂部3石はやや傾斜が急になるが、改変を受けた可能性がある。

築石は長辺1m前後の花崗岩自然石で、多少ハツリで面が整えられたようなものもあるが、矢穴をもつ割石は見出せない。築石は丸みを持ちながらも四角いものが多く、基本的に横に置かれ、短い単位で横メジが通る個所もある。間詰石は角礫を主体に大円礫を交え、下層期に埋没した深部では、人念かつ大量に施されたまま残っている。こうした石材や積み方の特徴は天守台と共通する。

前面の十層堆積を第70図5に示したV-5トレンチで見れば、地山の上に茶褐灰色バイラン細砂が堆積し、その上面c面から掘られた根切り壙を埋め戻す過程で、最下段の石材が据えられているのが判る。石垣構築当初の生活面は、同じc面で、石垣前面では柱穴や備前焼の据え甕群が形成されている。d面はさらに下の生活面で、地形が低い東側だけに認められる。c面からb面までの堆積は、コピキAの字喜多秀家期の瓦を含む暗褐灰色細砂バイラン土、暗褐黄灰色バイラン細砂などによる互層で、b面は最後の下層生活面である。b面～a面間の堆積は前池田期のコピキBの瓦を含む暗黄褐色細砂バイランで、出来上がったa面は上層遺構面として、豊島石製石組溝が掘り方を伴って構築されている。

f. 下層の高石垣前面据え甕（第71図1）

V-5トレンチの高石垣構築当初の生活面に伴って、備前焼の大甕底部2個が据えられた状態で残っていた（S X 5・6）。内底は生活面から0.5m深い位置にあり、内容物や便槽としての使用痕はない。両側体とも体部上半は切断されて残っていない。いっぽう、その南には長さ1.0m、深さ0.5mの上壙いっぱいに、大甕の体部上半が横倒しで収められていた。一般論として横に据えた状態での使用は考えにくく、郭の改造時などに露出していた据え甕上部を半裁し、埋棄したものとみられる。

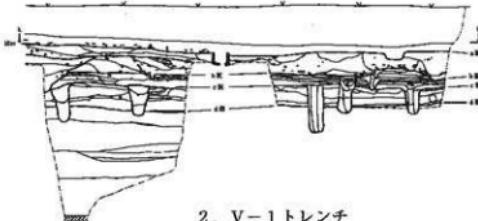
g. 下層のV-1・5トレンチ柱穴など

V-5トレンチでは、据え甕と同じ生活面から据え甕S X 5を切り込む穴が検出された。直径0.6m、深さ1.1mで、柱痕は残らないが柱穴とみらる。また、V-1トレンチでも柱痕を残すものも含めた柱穴状の穴や、礎石状の石材などが検出された。これらは、発掘区の制約などから断片的な確認に留まっているが、建物もしくは柵があったと判断される。

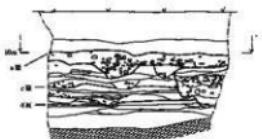
第71図2に示したV-1トレンチの土層堆積を、それらの遺構との関連でみてみる。ここでは、現地表下4.3mもの深さ（標高6.5m）でようやく地山に達し、地山が高い本段石垣部に対して、旧地形の谷部に当たることが判る。その上の堆積は、瓦などを含まない暗褐茶灰色粗バイラン土である。出来上がったd面では長辺50cmの花崗岩自然石が礎石状に置かれ、また面自体が焼けて、炭がまとまって散布する個所があり、一帯が平坦地となって最初の生活面といえる。d面の上のc面までの堆積は暗褐灰色バイラン土、黄褐色バイラン土、黄灰色微砂、暗灰色細砂などによる互層であるが、瓦を全



1. V-5 トレンチ据壘断面



2. V-1 トレンチ



3. V-6 トレンチ東壁



4. V-6 トレンチ窓穴



第71図 六十一雁木下門北方の下層間連土層断面 (1/100)

く含まないから、d面はまだ瓦を大量には伴わない段階、つまり宇喜多秀家期以前の生活面であった可能性が強い。次のc面を造ったのは宇喜多秀家とみられ、それを覆ってb面をつくる暗黄灰色バイラン土と暗褐灰色細砂・微砂の互層造成土には、コピキAの瓦をまとめて含んでいる。したがってc面の段階には瓦葺きの礎石建物が林立していたに違いないが、ここでのc面には掘立柱の柱穴状の穴が4つ掘り込まれている。またこのc面は第62図3のc面に対応し、未だ雁木下門の石塀は構築されていない段階といえる。石塀が築かれたのは次のb面の段階であるが、このトレンチでは柱穴とみられる穴が1つ確認できた。b面を埋めるのは、前池田期とみられるコピキBの瓦を大量に含む暗黄灰色細砂や暗褐灰色細砂などの堆積で、この造成土によって下層期から上層期への橋渡しがなされ、豊島石製石組溝などが構築されるa面が出来上がる。

h. 下層のV-6トレーナー縫穴など（第69図・第71図4）

このトレーナーでの地山は調査区の内では最も高く、9.6～8.4mの標高をもち、西の本段石垣下端から東に傾斜している。その地山には下層期でも古い段階の遺構が掘り込まれている。

縫穴1は、南北3.5mの辺から東に開き気味の方形の掘り方で、深さ最大0.45mの床は水平、壁の下端には溝を廻らせ、西辺に沿って1.5m間隔に深さ0.6mの柱穴が3つ並ぶ構造である。また、縫穴1に切られる縫穴2も、同様の遺構とみられ、壁体溝こそ検出できないが、平坦な床に柱穴状の穴を作っている。これらは、層位の上では高石垣との前後関係は特定できず、いっけん古墳時代などの縫穴式住居に近似し、その可能性も吟味したが、一帯では古い時代の遺物は発見されず、むしろ縫穴1の床面には16世紀末頃の中日製白磁皿が密着し、暗黄褐色細砂の埋土下層には宇喜多秀家期のコピキAの瓦が含まれていた。また、先行する縫穴2の埋土には、瓦はみられないが、16世紀末頃とみられる備前焼片などを含んでいる。したがって、宇喜多秀家期かその直前の城郭に伴うものであることは間違いない。とくに埋土に瓦がある縫穴1は、2.5mという適度な距離に高石垣を背負い軸線も一致させるという位置関係とともに併せ、秀家による高石垣の構築より後の可能性の方に歩がある。

縫穴1の南では、高さ0.4mほどの段が連続し、人為的な地山加工とみられるが、瓦を含まないパイラン質造成土で埋まっており、宇喜多秀家期以前の城郭に伴った可能性が強い。北寄りには、長辺1m超級の花崗岩自然石が転石状に地山に載っている。

縫穴1を切るSK7などは、層位的にも新しく高石垣前面が埋まる過程での下層生活面から掘り込まれたものである。

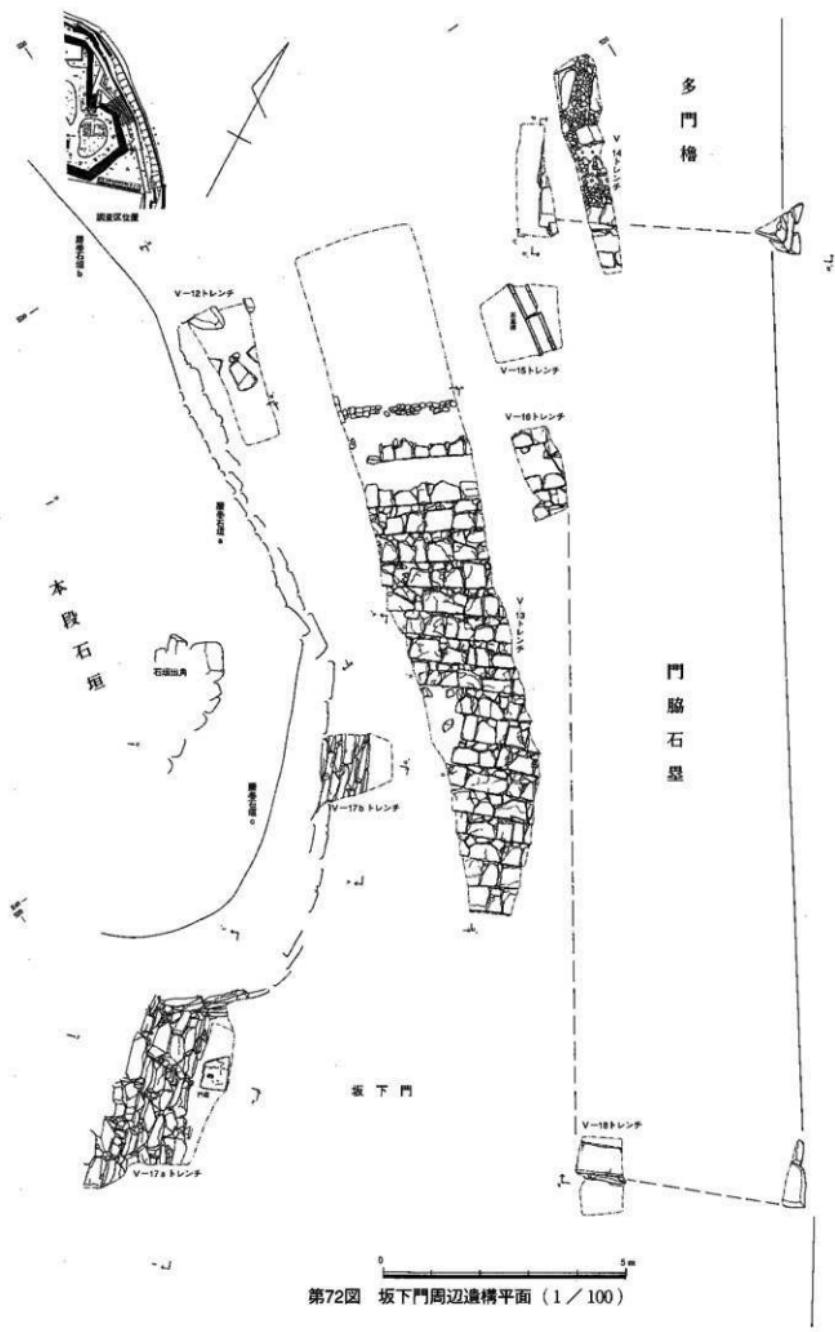
4. 坂下門（第72図）

a. 南（坂下）多門櫓と坂下門脇石壇

江戸時代の絵図によれば南多門櫓は雁木下門北方の多門櫓と別棟であったが、櫓台は中学校地の測量図から一連であったことが判る。つまり郭内側石垣の上部は戦前にはまだ露出していた。

発掘した南多門櫓の南西隅の石垣下角は高度9.0mで、北多門櫓の北西隅の石垣下角より0.2m高いが、その間39.0mという距離を考えれば、全体が極めて良く揃っているといえよう。最大高1.1mで残るが、石材や積み方は北多門櫓と同じで、やはり立石を含む。裏込にはこぶし大円礎が充填されている。近代の石積みに紛れて、旭川側の現役石垣にも10.4mの高度をもつ南東隅の天端石が確認できる。櫓台の天端幅は5.0mで、元絵図に示された2間半の壁がかろうじて載る長さである。『牙城郭櫓実測圖』（第58図2）に注記された櫓の幅は2間であるが、それなら逆に石垣外縁からの引きが大きくなりすぎる。なお、この絵図には、櫓台から一段下の郭内に張り出した庇が示され、北の多門櫓の下層期での状況に連関して注目される。

櫓台の小口石垣には、さらに南に同じ幅の石墨が付加されている。石墨の前端西隅は、V-18トレーナーで石垣3段分まで掘り下げた。東隅はやはり近代の石積みに紛れるが旭川側の現役石垣に確認できる。両隅とも本来の大端石を保つと判断でき、9.3mの標高をもつ。天端でみて、北の多門櫓台との接合部から前端までは19.8m（『牙城郭櫓実測圖』に注記された扉長拾間=19.7mと一致）で、前端に向かって0.6mほど高度を下げている。石墨前端部の旭川側石垣は、現状での高さが4.0mで、傾斜は70度を基本に上部が反りをもつ。



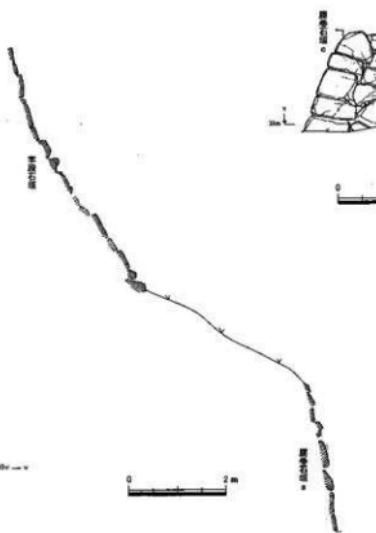
第72図 坂下門周辺造構平面 (1/100)



1. 腰卷石垣 c 一本段石垣断面



2. 腰卷石垣 c 立面



3. 腰卷石垣 a 一本段石垣断面

第73図 坂下門内腰卷石垣 (1/100)

b. 本段石垣 (第75図)

本段石垣は大端で内角135度ほどのシノギ角をもつが、その隅石や付近の築石は極端にせり出し、下部では鋭角に変形てしまっている。江戸時代の崩落防止策として腰巻石垣が構築されたため、一帯での本段石垣下部は覆い隠されているが、腰巻石垣以南の直線部では、発掘によって本段石垣の下部の状況が観察できた。第75図2に示したように、現地表から深さ3.5m掘っても基底に到達せず、石垣高は12.5m以上といえる。傾斜は60度で直線に延び、頂部1.5mほどが80度の急傾斜となる。頂部は横直しや重上げを受けた可能性が強く、当初から反りを持つとは断定できない。

実測を行っていないが石垣上部では、向かって左の天端から右下にメジがあり、南から続く当初の本段石垣がシノギ角をもって西に折れ込んでいたのを、石材を付加して直線に改造した痕跡と判断できる。そのメジは、高度11m以深では不明瞭になり、深部だけは当初から直線であった可能性があるが、現役のシノギ角は、上部の明らかに新しく積み足された部分に属し、旧シノギ角から10mほど北に新設されたものといえる。積み足し部分は、先述の六十一雁木の石墨付根の本段石垣に続く。

本段石垣の当初部分は、築石が長辺60~130cmの花崗岩自然石で、粗くハツリが施されたものはあるが、矢穴をもつ割石は実測図外の南方で1点確認できるだけである。そうした自然石の内にも長方形のものが多く、安定感をもって横積みされる。いっぽう、積み足し部分の築石も花崗岩であるが、小さくて長辺100cm未満のものが多く、丸い石が主体であるのに、不安定に乱積みされている。直線に改造された旧シノギ角は、積み足し部の現役シノギ角より、角石の一般部築石に対する形や大きさの差が明確で、石材の選択度が高く、算木積みへの指向度が高くて、安定している。

c. 腰巻石垣 a (第73図4)

本段石垣の根固めを果たす一連の腰巻石垣で最も古い。腰巻石垣cが付加された元の南端を背後のシノギ角に揃え、天端での長さが6.7m、下角の標高は8.7m、天端までの高さは3.3m、傾斜80度である。築石は長辺40~120cmで、花崗岩自然石を主体に粗割材や矢穴をもつ割石も含んでいる。一般部は乱積みであるが、腰巻石垣bが付加された元の北出角は、角石が一般部築石より大きく、長辺の左右への振り分けが明瞭であるが、元の南出角は、角石長辺の振り分けが不明瞭である。

d. 腰巻石垣 b (第73図4)

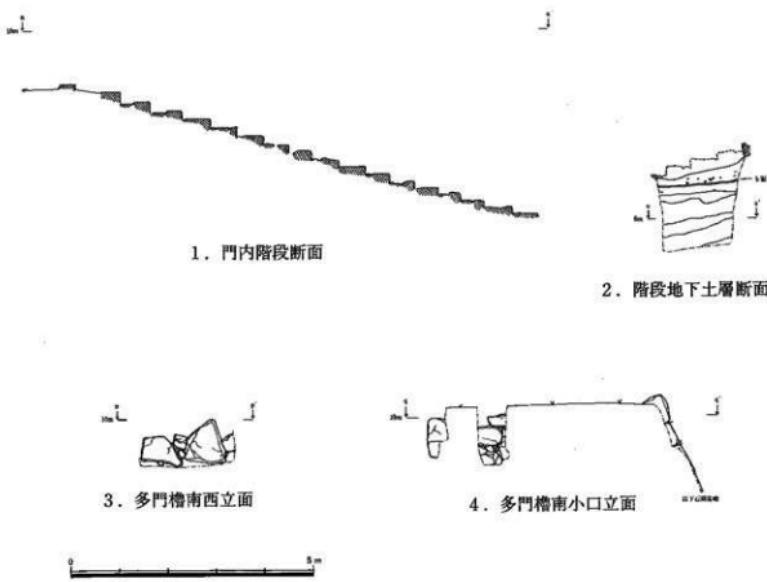
腰巻石垣aに付加されて始まり、13.0m西で六十一雁木石墨に当たって終っている。腰巻石垣aに対し、下角の高度は同じで、天端は0.7m低い。腰巻石垣aより築石は小さいが粗割材のため平滑度が高く、横積みが勝る。

e. 腰巻石垣 c (第73図1・2)

腰巻石垣aの南から角を持たずに丸く延びて、本段石垣に当たって終る。11.6mの高度で本来の天端を保つに対し、南側での基底は標高6.0m以深で、高さ5.6m以上もあることになる。基底は、恐らく北に向かって急激に上がるものと思われる。築石は長辺50~120cmの花崗岩の粗削材で、矢穴を伴う割石も含んでいる。面は丁寧なハツリ加工でかなり平滑に加工されている。一連の腰巻石垣の中で最も築石の方形度と加工度が高く、總てが横に積まれているうえ、高さが隣の築石と揃えられていて、精緻な成層積みとなっている。

f. 坂下門内の排水溝と階段 (第74図1)

多門櫓の南西で豊島石の専用材を繋ぐ溝を検出した。雁木下門北方の石組井戸付近から延びて来たものとみられる。発掘が及ばなかった坂下門内の階段東には側溝があり、それに続くとみられる。



第74図 坂下門内造構断面・立面 (1/100)

階段は、多門櫓脇から坂下門の門扉部に統くもので、石壘と腰巻石垣に挟まれた空間に、敷設されている。19段まで検出したが、その間の長さ約10.5m、高低差2.9m、傾斜角16度である。トレンチ内での最下段は標高6.2mで、既に門礎と同じ高度に達しており、トレンチの南外に段がまだ統くとしても1~2段とみられる。頂部の3段は、平坦部長が0.9~1.0mと長くて奥側は土床となり、上角線は南東向きに揃って平行するのに対し、下方の各段は、平坦部長が0.45~0.6mで全体が石敷となり、各上角線は平行に揃うのではなく、南東から南向きにしだいに変化していく。

この軸線の変化は、腰巻石cの存在に規定された可能性が強い。すなわち、V-17bトレンチでは、搅乱のため階段が残っていないかったが、V-13トレンチから予想できる階段の高度より、腰巻石垣基底の方が深く、階段は腰巻石垣の構築より、少なくとも工程上は後と判断できるのである。

階段の築石は長辺30~90cmの扁平な花崗岩粗削材で、面は平滑であるが、矢穴を伴う割石はない。主として横に置かれ、背後には面を揃えて控え材が嵌め込まれている。

頂部の2段は石材が小さめで、先述の段平坦部の長さや軸線の違いなどとも併せれば、階段上の郭内地盤の重上げに伴って、下方部より後に追加された可能性も考えられる。最上段の大部分は築石本体が失われ、下部構造として長辺15cm前後の板状円礎が帶状に組まれているのが観察できる。頂部から2段目の東端では縁石が検出できたが、予想される側溝との接合関係などは未確認である。

第74図2に示した様に、階段石材が失われた部分にサブトレンチを設定して、深部の土層堆積を確認した。ここでは、六十一雁木の様に、すぐ下層に階段が埋め込まれている状況は認められなかった。

ただb面には炭が散布し、上に前池田期のコピキbの瓦を伴う黄灰色細砂バイラン土が堆積して、旧路面もしくは先行階段の破却限界面であった可能性が窺える。b面の下には、まだ瓦を含む暗灰黄色バイラン細砂が堆積し、さらに下には暗灰色シルトや暗褐色のバイラン土が確認される。

g. 坂下門（第75図）

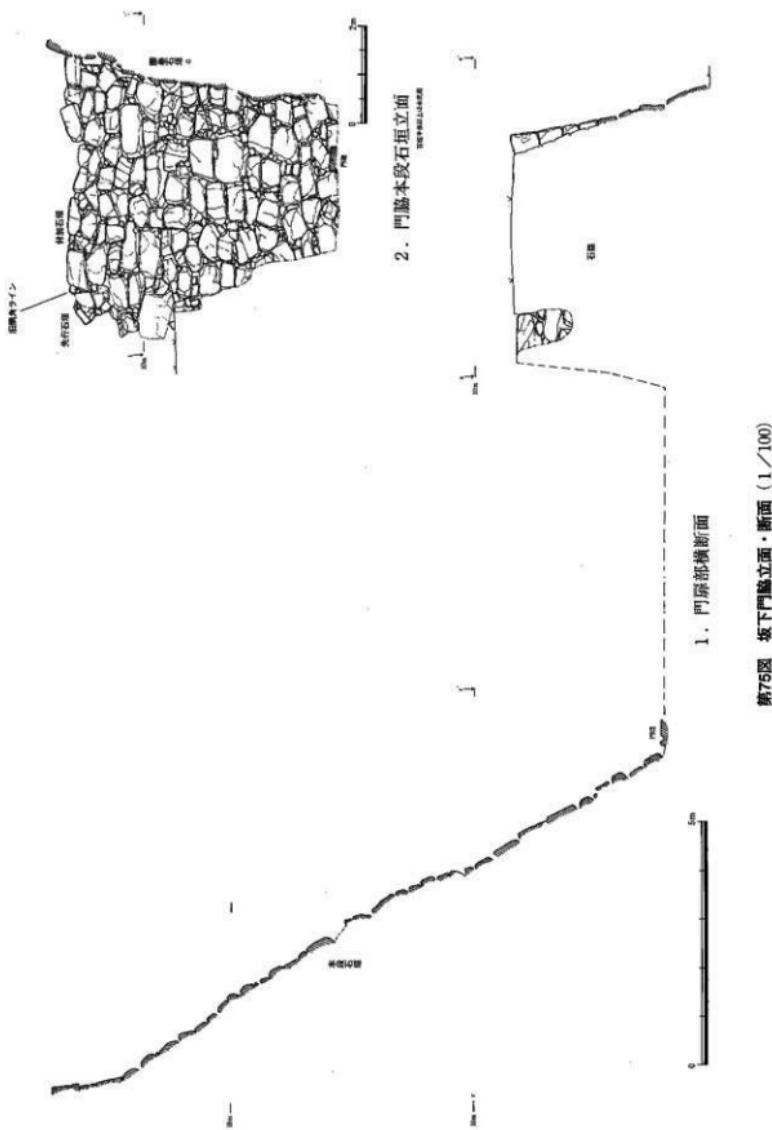
本段石垣の下端では長さ70cm、幅50cmの花崗岩の扁平材を据えられた状態で検出した。素材は自然石であるが、上面は平滑にノミ加工され、長さ10cm、幅5cm、深さ5cmのホゾ穴が切られている。坂下門の門扉ラインの礎石と判断されるが、他の礎石はトレンチ設定の制約から検出できなかった。

『牙城郭構造測量圖』（第58図2）に示された坂下門は、石壘頂部前端から本段石垣に十脚が渡され、その下に薬医門形の柱配置をとる門構造が収まるもので、見かけは埋門である。上の土崩については、石壘頂部の旭川側端から本段石垣の同高部までの実測値が14.2mで、石壘頂部端から壁端までの引きを勘案すれば、「御門上扉惣長七間」（1間6尺5寸で13.79m）の記載とほぼ一致する。また、礎石の上面から石壘天端との比高は3.0mで、礎石の地表面からの突出度や冠木の渡し方や太さの問題もあるが、「冠下ヨリ石口まで丈丈」（3.03m）との記載に整合する。この絵図に示された門扉ラインの柱は5本で、検出礎石は西端の控柱で、門扉脇の主柱が載ったものではなさそうである。残念なことに柱間ごとの注記はないが、土柱間の注記「貳間」を基準に、門下端での長さを比率計算すると4間（788cm）ほどとなる。遺構では門扉ラインでの本段石垣下端から石壘石垣の下端が予想される位置までは約7.5mで、4間よりやや短めである。なお元禄絵図では、門扉ラインに示される柱は4本で、周辺の建物の1間を基準に割り出すと、門扉主柱は1間半ほど、門全体の長さは3間半となり、遺構よりやや小さめといえる。

先述のように階段は発掘端より門扉側には大きく及んでいないはずで、門扉ラインの奥3mほどは平坦地が見込まれ、控柱の礎石はそこに置かれていたことになる。

ところで『牙城郭構造測量圖』の最大の問題は、門と本段石垣との位置関係が遺構と一致しないことである。本段石垣のシノギ角は遺構では門扉ラインの奥であるのに、絵図では南前面に示され、しかも腰巻石垣は全く表現がない。坂下門の前身構造が本段石垣の現役シノギ角のすぐ奥にあって、これが絵図に示されたと仮定しても、絵図自体に示された多門構や石壘前端との距離が矛盾を来すことになる。いっぽう、絵図に示されたシノギ角が本段石垣中に埋め込まれた旧シノギ角と仮定しても、シノギ角の下端が門路面の高さまで降りることは合わないし、門上の脚はもっと長さが必要でこれも絵図自身と矛盾する。そもそも、古いシノギ角が機能したのは、石垣の重なりからして六十一雁木門成立以前という古い段階であり、現に正保年間の城絵図や元禄絵図には北西に腰巻石垣を伴う坂下門や現役シノギ角の成立を前提とする本段建物が示されており、この絵図がそれ以上に古い時期の構造を示したものとは考えにくい。最大の可能性は、やはり絵図の表現上の間違いであろう。

なお、腰巻石垣aより新しい腰巻石垣cは元禄絵図に示され、江戸前期の枠内に構築されたことが判る。逆に古く造られた腰巻石垣bは示されないが、低いため表現が省略されたのであろう。



第75図 坂下門脇立面・断面 (1/100)

第9節 本段南東高石垣～槍櫓調査区

1. 概要

下の段の南東部に位置する。ここは、北から続く本段石垣がシノギ角を経て西に折れていくのに対し、旭川べりの石垣は流れに沿ってそのまま南に延びて、下の段が張り出している。石垣上には弓櫓・^{やぐら}槍櫓・多門櫓が、郭内には蔵が建っていた。

本段石垣の基部は、東のシノギ角では最下段が現地表以上の高さで露岩に載っているのに対し、西は現地表下3mにまで達していた。石垣の前方を埋める造成土中には、複数の生活面が確認されて、郭の変遷に応じて地盤の重上げがあったことが判る。また、シノギ角のさらに東には、本段石垣に付加された石塁が検出された。

縦図に歳が示された郭内では、蔵の基礎とみられる石組を検出したが、同様の石組が下層に重複し、さらに深部で宇喜多秀家期の金箔おし瓦などを伴う生活面を確認した。

各櫓台は旭川側石垣が現役であるのに対し、郭内側は直線に延びる近代の石垣が構築され、調査前は地上に何ら痕跡を留めていなかったが、近代石垣の前面を発掘したところ、郭内側に張り出した槍櫓の櫓台基部、それに近代石垣の直下に残る多門櫓の郭内側石垣と取り付く階段を検出した。また、弓櫓の櫓台頂部では礎石が4個発見できた。

肩位的みて、蔵や櫓は本段高石垣構築より遅れる時期のものであったことが判る。

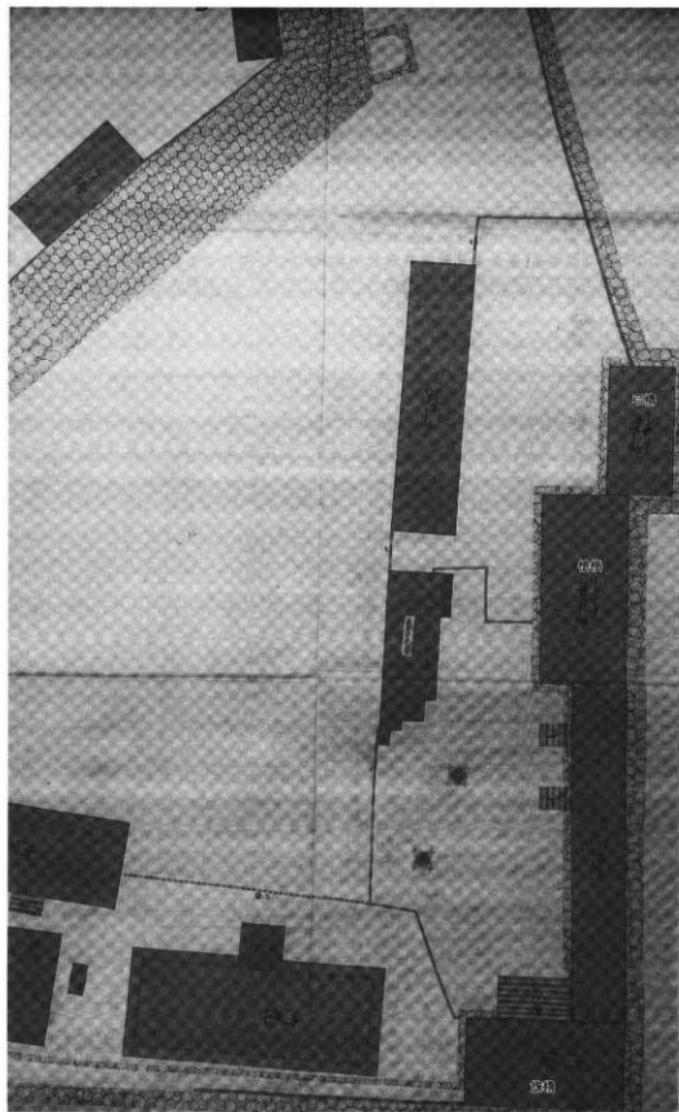
2. 本段石垣（第78図）

a. 石垣本体

最下段下角は、造成土に載る部分は標高2.8～3.2mで、旧地形に応じて東に高くなる傾向はあるが、比較的よく揃っている。いっぽう花崗岩の露岩に載る東部では、急激に高くなつて、標高7.0mにまで達している。この間の基底の高低差は4.2mである。現在の天端までの高さは、最大で15.6m。下半部がせり出しているが、復元的にみた段面は58度で直線に延び、頂部の1.5mだけが70度ほどの急傾斜となる。ただその頂部は、近年の上塀構築時に犬端石が補正されているし、それを除いても石材が小形化したり積み方が横メジを隔てた下部とは異なつて、積み足しと判断できる個所がある。

築石は長辺40～150cm（平均的には1.0m前後）、高さ30～80cmの花崗岩自然石で、一部は粗いハツリによる面調整が加えられるものがある。しかし、スダレ状のノミ痕などではなく、矢穴を伴う割石は第78図に示した尖渦図外の石垣上部に1～2個確認できるのみである。その割石も、自然石の半裁的なもので、複数面に矢穴や割り面を残すものではない。そうした丸みをもった自然石の内にも、長方形に近いものが多く、原則として横積みされる。隣の築石と高さが揃えられ、数メートルほどの単位で横メジが通る場所もある。間詰石は長辺40cm以下の角巣が主体で、一部にこぶし大の円礫を混えている。基部近くの早い段階に埋没した部分では、入念かつ高密度に施された状況で残っている。

東のシノギ角は、内角が110度で折れている。角石は一般部築石に対して大きさが突出しないが、一段ごとに長辺を振り分けて算木積みへの指向が窺える。ただ、こうした構造で石垣の重量を受け止めるのは、岩盤が最も高くなった位置からである。すなわち、事実上の最下の角石は第78図の上から三段目で、直下で岩盤に載る築石群はそれを置くための上台をなす。岩盤最高位の右下で底辺1.5m、高さ1.5mの三角形部分は、石材が小さく算木積みにもなっておらず、隅角としての見かけを整え



第76図 本段南東高石垣～檜橋周辺の御城内御絵図（元禄）[岡山大学池田家文庫蔵]